
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～五芒星から見る物語～

キー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 五芒星から見る物語

【Nコード】

N64100

【作者名】

キー

【あらすじ】

よくわからないうちに転生したのはstrikersの世界。原作知識皆無の主人公は、神様っぽい人からもらった過去の厨二あふれる痛い黒歴史の能力を駆使して嫉妬深いのはからのお話から逃げ回りつつ仕事をこなす日々。

果たしていつまで魔王様から逃げられるか！？

この作品は作者の処女作です。他人の妄想や、厨二病につきあつてられない方は読まない事を推奨致します。

誠に勝手ながら、タイトルを変更させていただきます。

ブローグ？（前書き）

・・・これをブローグと呼んで良いのだろうか？

ブロー…グ？

突然だが。人生、なんてものは基本的に一度だけのものだ。

だからこそ、みんな必死に生きようとする。

だが。“基本的に”と言うことは、例外が存在する。

例えば、神様が手違いで殺しまつて、違う世界で転生、何てこともあるかもしれない。

ん？なんでそんなことが言えるかって？

良い質問だ。花丸の判子を押してあげよう。

なぜなら…

目の前に物凄く顔を青くして土下座してる女性
彼女曰く神様が、説明してくれたからさ。

いや、もうね。何が何だか。

普通に朝起きて学校行つて。

昼休みにバカなことやって。

放課後に部活に精を出して。

もう少しで家だ、と言う所で。
いきなり目の前の空間が裂けて。

その中に呑み込まれて。

気が付いたときには、目の前に女性が立っていて。

思いつきり土下座されて、そのまま、

『あなたは死にました。申し訳ありませんでした。』

訳が分からん。

とにかく錯乱していたと思う。
思わず周りにテレビカメラを探した位だから。

で、とりあえずは落ち着いて。
女性（ないすばでえの美人さん）に状況の説明をもらった。
イマココ

どうやら、俺の記憶を覗いて、良さそうな能力があったら、それを貰って。

違う世界に転生させてもらえるらしい。

…違う世界ってどこだよ、とか、そもそも能力無いと生き残れない世界ってどうよ、とか。

色々ツッコみたいけれどもそこは堪えて。

大人しく待っていることにした。

『よし、これがよさそうですね。』

「決まりましたか？」

『ええ。悩みましたが、あなたが14歳の時に考案した能力に決めました。』

え？待てよ？もしかしてもしかすると、それって…

『魔眼、ですか？随分面白そうな能力でしたね。』

………

………

……

…

！

「やっぱりいいいいいいいいいい！！！！俺の黒歴史――
――！！！！！！！！」

『あ、そろそろ時間ですね……。では、あなたのサポートとして、転生の二年後に、武器を送りますね？』

「待って！マジで待って！」

『では、行つてらっしゃーい』

「嫌だああああああ――……」

薄れていく意識の中、最期（誤字に非ず）に見たのは、
最高にイイ笑顔をした、女性の手を振る姿だった。

ちくせう……いつか殴る……

プロローグ？（後書き）

あゝ、うん、言いたいことは大体わかるよ。ハイハイテンプレテンプレ。

あ、こんにちは。はじめまして。ないすとうーみーちゅーの方がいいですか？

第一話：空港火事は突然に

目が覚めると、赤ん坊だった。

……何て事はなく。ちゃんと15才程の年齢を維持していた。

うん。幼児じゃなくてホントに良かった。

数々の転生オリ主達のような羞恥プレイは勘弁被りたかったからね。

しかし、そろそろ現状を把握しよう。

見た所、ここは空港のようだ。思いっきり“出発ゲート”ってあるし。

・・・空気が焦げ臭い。

火事でもあったんだろうか。

原油などは日本ならば大体は海から運ばれてくるから問題は無いはず。

まあ、ここが日本じゃない可能性があるっちゃあるんだが。

次に警戒するのが機体燃料への燃え移りだが、それはもう致し方あるまい。

ここが燃えてないだけで、他が火の海の可能性もある。

・・・さつきから可能性ばつか言ってるな。

ここで元から少ない脳みそ振り絞ってあれこれ考えていても仕方ない。

某筋肉達磨のバグキャラも言っていたじゃないか。

大体の事は気合いで何とかなる。

まあ、何とかなるだろう。

「そう思ってた時期が俺にもありましたー！」

ダッシュ。後ろに。猛スピードで。

何故かって？

ドア・・・ってか、扉？

とにかくそれっぽいのをあけようとしたら。

右手の皮膚がはがれた。

こっ、ベロンって。

痛い。超痛い。

ってか、

「やっぱりドアの向こうは火の海か、畜生―！」

さっきの場所まで戻ってくる。

「はあ、はあ・・・」

「というか、あれ？これ、詰んだんじゃない？」

「はあ・・・はあ・・・うっ・・・！」

「うわー。マジかよ。まあ、これも天命・・・か？」

「はあ、はあ、はあ・・・！」

ん？

「おねえちゃん・・・どこ・・・？」

「・・・マジかよ。」

さっきのドアの向こうを見れば。

青い髪の毛の幼女が、なんか、ヤバい感じの石像を後ろに、ひざまずいていた。

「あれ、絶対に倒れるよな・・・」

そう。石像の足場には、良い感じにひびが入って。

今にも倒れそうな・・・むしろ、倒れないことの方がおかしいと言う程の様子で。

「行くっきゃ無いよなあ・・・!」

駆け出す。今度は前に。

気合いで何となく、全身を包むようにイメージ。

気休めにはなろう。

「う、おおおおおおおっっっ!」

目の前の火の壁に飛び込む。

熱っ! いや、痛い!

抜ける。

「・・・あれ?」

服が、端っこしか焦げてない。

どうやら、本当に気合いで何とかなるようだ。

「嬢ちゃん、大丈夫か!？」

「!?!」

バツ、と。凄い勢いで振り向いた少女。

こちらを見つけると、涙目で飛び込んできた。

俺の、マイサンよりも少し上らへんに。

危なかった・・・この年で、『幼女に股間に抱きつかせる変態』の
称号を得るところだった。

「ふぐつ・・・こわかった、こわかったよ・・・!」

「・・・ああ。よく、がんばった。」

頭をなでてやる。ホントに、よく頑張った。

・・・何か忘れてないか？

はて、俺はついさっきまで、いったい何をそんなに慌てていたんだ
っけ？

まずいな。思い出せそうにない。この年で呆けるのは勘弁して欲し

いんだが。

まあ、思い出さなくてもいい程の些末事だったのだ

ゴゴゴツッ・・・メキッ・・・

「忘れてたー！」

そっだよ、石像だよ！

何で忘れてたんだよ俺のバカ野郎！

バキッ！

根本から折れた石像は、そのまま重力に従いこちらに倒れてくる。

「黙ってる！舌嚙むぞ！」

「え？・・・！」

とりあえず少女を横に突き飛ばす。

迫ってくる石像。そこに彫られた女神の顔が忌まわしい。

ああ・・・ここで死ぬのか。流石に気合いで何とかなるレベルを超えている。

転生一時間未満で死亡とか笑えねえ。

・・・ま、最後まで足掻きますか。

そう覚悟を決めた瞬間、石像がピンクの輪っかに縛られて動きを止めた。

「よかった・・・間に合った・・・！」

見れば、白い服を着て、左手にマジカルステッキのようなものを持った女性？少女？が、空を飛びながら手を石像に向けていた。

「飛んでる・・・？・・・あがつ！？」

突然、頭に流れてくる情報。

フライヤーフィン 飛行用魔法

同時に、空戦魔導師としての戦い方などが瞬時に頭の中に流れ込んできた。

「ああ・・・くそつ。だからこんな能力、嫌だといったんだ。
アルファ・ステイダマエンド
複写眼と完成なんて・・・」

ともかく。その女性（でいいやもう）が天井向けて砲撃をぶちかまし。

その穴を少女と二人、抱えられて飛んでいます。

というか、胸、胸当たってます！

あっ！

という間に着いた上空。

見下ろせば、空港は火の海どころの話では無かった。

燃えてるよ……。俺、人生初だよ、こんな大規模な火災を見たのは。

「えっと……。二人とも、大丈夫？」

「は、はい！」

「なんとか。」

「よかった。じゃ、このまま救護班の所まで飛んでいくからね？しつかり掴まっててよ？」

この胸に顔が押し付けられている状況でどこに掴まれと。

「それじゃ、ちょっと飛ばすよ？」

ちょ、ま。

「ありえねえ・・・なにがありえないって、魔法があるって事があり得ない。」

「ん？君、もしかして次元漂流者かい？」

「へ？」

そんなこんなで連れて行かれた（連行された）救急車内でつぶやいたら、その眩きから隊員さんが変なことを言い出した。

「次元・・・フォーメーション？」

「次元漂流者。君、ミッドの戸籍持つてる？」

「ミッドチルダーの経験ならありますが？」

「まいったな、とりあえずは高町空尉に来て貰うか・・・」

「聞いてよ」

なんかぶつぶつぶつぶやいて、空中モニターをいじる隊員A。

傍から見れば痛い人である。

しばらくして、先ほどの女性が来た。

ツインテールからサイドポニーに変わっていたから、一瞬誰かと思
った。

その女性・・・なのは（驚いたことに同い年だった）が言うには、
ココは地球ではなく、魔法が溢れるステキ世界、ミッドチルダで、
自分は地球からきた云々・・・。

で、今の俺には戸籍が無いから、管理局に入れと。

管理局ってなによ？ってきいたら、警察と裁判所と一緒にして、全
世界に広げたようなものだと言われた。

三権分立はどこ行った、といったかったが、よく考えればモンテス
キューさんは地球人だった。残念。

とりあえず、管理局に、なんだかんだで入ることになりそうです。

・・・あ、そうそう。住所が決まるまでなのはさん（至れり尽くせ
りでとても呼び捨ては・・・）がホテルを取ってくれた。

出世払いだそうです。

第一話：空港火事は突然に（後書き）

能力の説明などは次話に。

2011/06/03 大幅に改訂。もはや別もの。

主人公設定

神裂 剣夜^{かんざき けんや} 16才。本編開始時20歳。身長185?。体重73?。

容姿

肩まである赤髪。

目の色は赤だが、たまに金色に輝くため常時サングラス着用。

イメージはグラサンかけた和製ジエームズ・ボンド。

思い浮かばない人は取りあえずは若い頃のハードボイルド系イケメンだと思っただけ。

能力（f a t e風味）

筋力 E X

魔力 E X

耐久 E X

幸運 B

敏捷 S S

知識 A

デバイス

インテリジェントデバイス

『イージス』

待機モード 指輪

戦闘モード グローブ・ブーツ・?（まだ本編に登場してないためシークレット。）

設定性別 女

設定言語 日本語

インテリジェントデバイス

『アルテミス』

待機モード 指輪

戦闘モード 無形（武器全般）

設定性別 女

設定言語 日本語

保有能力

アルファ・ステイグマ

魔法を視るだけでその魔法の全てが理解できる。使用したり、発動を解除する事も可能。

イーノ・ドゥーエ

魔法を吸収して身体能力などを上げる魔眼。回復も可能。最悪腕などもはやせる。

ギアス

目を見て命令するだけで、一度だけ絶対に逆らえない命令を下す。取り消しは不可能。

直死の魔眼

モノの死が線と点で見える。刃物などで線をなぞれば、線の下は殺され、結果両断される。点を突けば、そのモノの生命活動を停止させる。万物を『殺す』魔眼。

ジ・エンド
完成

本編参照。

この小説では、知識として知っているものも完成させることが出来

26.

主人公設定（後書き）

チートだ…

2010/11/21編集。

第二話：新部隊（前書き）

一気に四年飛びます。

第二話：新部隊

あの空港火事から四年。あの後なのはにスカウトされた俺は、管理局に入局。

魔導師ランクEXの執務官として、毎日を忙しく働いていた。

東に時空の歪みがあれば、行って正常値に戻し。

西にロストログアの反応あれば、行ってサッサと封印し。

時には無限書庫の整理を手伝い。

そんな日々を、彼女になったのはに慰めてもらっ。

そんな男に、私はなった。

いや、正直、なのはがいなかったら今頃俺は生きてないと思う。マジで。

それ程までにEXランク執務官としての仕事はきつかった。

EXランク、とは言っても。

俺の魔力に底がないため、暫定的にこのランクになっているらしい。何でも、俺の魔力量は歴代の管理局ーらしい。

そんなに多いかな？一週間スターライトブレイカーぶっ続けて撃てるぐらいしかないんだけど。

それでもSランク魔導師の二乗位はあるらしい。

うーん。信じられん。

「剣夜？今大丈夫？はやてちゃんから2人で呼び出し受けたんだけど。」

取りとめもないことを考えながらもコンソールを弄る手は止めてなかったのだが、なのはから通信が入った事で完全に止まった。

「おう、なのは。はやてが？何か用か？」

「それがね？新部隊への異動とかだつて。」「遂に来たか。機動六課！」

「うん。で、今離れられる？9時に第24会議室で待ち合わせ何だけど。」

時計を見ると、今は8時半。ああ、あそここの会議室は遠いからな。
「わかった。9時だな？すぐに行く。」
さて、新部隊への第一歩だ！

第二話：新部隊（後書き）

展開がはやーい！

第三話：約一回目のプロポーズ

「剣夜！」

会議室の扉を開くと、茶色い何かが俺の鳩尾を正確に突いてきた。まあ、なのはなんだが。

「ぐふっ…なのは。飛びつくのは止めると毎回言ってるだろ？」

正直、俺の鳩尾が毎回強打されるからなんだが。

だが、サイドポニー付きの球体は何かが気に入らなかったらしく、グリグリと鳩尾の中心に押しつけてくる。

ああ、昼に食ったカレーの味が喉に…

「なのは。そのぐらいにしといたり。剣夜の顔が青くなってきとる。」

「今なのはを止めてくれた関西弁の少女。」

八神はやて二等陸佐という。なのはにスカウトされた後、正式に友達となった少女である。

「あ…ありがとなはやて。ほら、なのは。そろそろ離れて…」ああ、カレーが喉の中ほどもで上がってきた…

「剣夜？離れてもいいけど、条件をのんでもらうよ？」

「わかった。わかったから離れてくれ。」

カレーが持たないから。限界が近い。

「ほんとだね？その言葉、忘れないでね？」

「…ああ。」

口調が怪しかったが、今はそんなこと気にしてられない。カレーがヤバイ。

「ほら、なのは。剣夜も。早く席について、少し落ち着いて？」

これは長い金髪がふつくしいフェイト・T・ハラウン執務官。

なのはとはやてが暴走するのを止めてくれる常識人なのだが、

「でも、なのはが幸せなら別に剣夜はどうなっても大丈夫なはず…。惚れた弱みとも言っし。よし、なのは！もっと抱きついていいよ！」

ちなみにこの執務官、顔が真っ赤である。

「はあ！？フェイト、今俺かなりヤバい状況なんだけど！？」

「大丈夫！私とはやては目、つぶってるから。お二人でごゆっくり」

こういう風に、こと色恋沙汰になると小学生並みにウブなのだ。これで、更に暴走するからタチが悪い。

おい、そのまめだぬき！ニヤニヤしながら俺らを見るんじゃない！なのはを、とは言わないからせめてフェイトの暴走を止めてくれ！

「剣夜がなんか助けてほしそうな顔してこっちを見てきてるねんけどな？昔からよく言うやん。人の恋路を邪魔したら馬に蹴られるつて。あたし蹴られたないもん。ま、精々頑張ってくれたまえ！」

あのヤロウ絶対楽しんでやがる。後で“高町式お話し”をしてやらなければ。

《なのはちゃん？ご主人のことは後でどうしてもいいから、今は我慢なさい？》

よく言ったイージス！アルテミスもなんか言ってるやれ！

《別にマスターがどうなってもいいんだけど、これ以上行くとフェイトちゃんがオーバーヒートしそうだから、そのぐらいでやめたいたら？》

さっすがアルテミスさんですね！マスターがどうなってもいいんだって！デバイスとは思えない発言ありがとうございます！

俺がアルテミス的人格形成プログラムをどこかで間違えたか真剣に悩んでいると、ようやくこの騒動の原因からお言葉が。

「剣夜？何か私に言うことは？」

はて。何かなのはに急ぎの用事はあっただろうか？こんなに怒っているとすることは、早急に解決しなければならなかったらしい。

「あー。悪かったなのは。だが言い訳をさせてくれ。俺はどうにも書類仕事は苦手なんだ。で、だ。お前がそこまで怒ると言うことは、そうとう大事な案件だったんだろ？ごめんな？でも、この埋め合わせは必ずするし、これからは極力書類仕事も早めに終わらせるよ

ヤバい。なのはが涙目だ。何とかしなければ。特にあの狸に知れたらー。

「あつれー？剣夜？もしかして、なのはの事、泣かしたん？あーあ。ヒドい男やなあ。どう責任取ってもらおか？」「責任？」

「そ。まさかこのまま帰れると思ってへんやるなあ？せやなあ、ちやんとなのはちゃんが泣き止むまで、なのはちゃんのお願ひ全部、実行するとかどうや？」

「やっと理解した。この三人グルだ。なのはが泣いてるのはガチだが、それも三人の計画の内なんだろう。そして、俺が引くに引けない状況に陥ったのをいい事に、コレ幸いと無理難題をふっかけるのだ。」

流石は八神はやてとその親友達。やることがえげつないぜ。

しかし、なのはを泣かせてしまったのは紛れもない事実。

仕方ない、甘んじて受け入れるとしよう。

まさか俺が出来ないほどの難題は出ないだろう。

「わかった。で？最初はなにをしろと？」

「よく言った剣夜！それでこそウチが見込んだ男や！」

ウソつけ。想定内のくせによく言うぜ。

「でな？まず始めに、ウチらが立てたプランに従って、明日、デートして欲しいねん。」

デート？その程度なら、わざわざ仕組んでまでやらせる意味がわからない。

「んで、2つ目は、なのはにプロポーズしてもらうよ。」

「は？今フェイトさん、ナンツツタ…？プロポーズ？ハハハ、ソナバカナ。あるわけなからう。」

「剣夜？ちゃんとプロポーズ、してやってな？」

現実だと言ったことが数秒のタイムラグの後、理解できると。

俺の意識は、ブラックアウトした。

最後に見たのは、心配して泣きそうなのはの顔だった…。

第四話：総隊長

目が覚めると、見覚えのない部屋にいた。

「どこだ？ここ……」

しばらくの間茫然としていたが、すぐに現状を把握しようとする行動を開始した。

いや、しようとした。

部屋の一点を見た俺は、思考が停止した。

いやむしろ、時が止まった。

比喻ではなく、完璧に。

念の為に完成させておいた、とある巫女が弹幕撃ちまくるゲームに登場する能力、時を操る程度の能力が無意識に発動していたらしい。しかし、時間が止まった事によって、俺を混乱させた原因を落ち着いて観察する時間が生まれた。

『それ』は、円柱状をしていた。

『それ』は、中ほどがゆっくりと上下していた。

『それ』の上部からは、茶色い尻尾がのびていた。

『それ』は……。

ここまで言えばわかりだろうか。

俺が寝ていたベッドの足元に、寝袋にくるまったなのが寝ていた。え？何で？もしかして、まだ俺は寝ていて、これは夢なのか？わからない。しかし、夢は深層意識を映し出すものだと言ったことがある。そうすると、俺は本質ではなには寝袋で寝て欲しいのだろうか。しかし、それにしてもわけがわからない。何故数ある寝具のなかで、寝袋を選んだのだろうか。俺の深層意識なら、隣でなのはが裸で寝ていた一位はしそうなのに。いやむしろ、俺は起きているんじゃないか？どうせはやてあたりが面白がつてなのはにやらせたのだろう。そうだ。そうに決まってる！俺は断じてなのはに寝袋で寝てほしいなんて事、望んでない！そうともさ！全く、はやてにも困っ

たもんだぜ。恐らく、これを見た時俺がどんな反応をするのかをどこかでニヤニヤしながら監視しているのだろう。あいつは本当に性格が悪い。寝袋なんかで寝かせて、もしなのはが風邪なんてひいたらどう責任とってくれるんだ。それどころかホコリを吸い込んで変な病気なぞにかかったらどうするつもりなんだ？もしそんな事になったら、俺ははやてを生かしておけないだろう。よし、悪いのはいつもはやてさ。そうだそうだ。あの狸が全面的に悪いんだ。

(ここまでの思考、約0・8秒)

「イージス、アルテミス。セットアップ準備。モードクロス。セットアップ。」

《主！？目覚めて数分で何故にセットアップなのですか！？わけがわかりません！》

《まあまあイージス。ご主人の考えてることなんて、アカシックレコードにも解き方が載ってないだろうから。考えるだけムダムダ。ここは大人しくセットアップしておきましょう。》

《アルテミス！！お前までなにを！せめて主を止めてくれ！》

《いいじゃんいいじゃんイージス。ちなみにご主人、なんでセットアップするんですか？》俺の右手の人差し指と中指からそれぞれ声が聞こえる。

だが今は関係ない。なのはに害をなす存在を完膚無きまでに叩きのめす。それしか頭にない。

「おまえら、はやくしよう！？俺だけでも特攻してくよ？」

《（なあ、イージス。せめて主を止めてくれ！》

《いいじゃんいいじゃんイージス。ちなみにご主人、なんでセットアップするんですか？》俺の右手の人差し指と中指からそれぞれ声が聞こえる。

だが今は関係ない。なのはに害をなす存在を完膚無きまでに叩きのめす。それしか頭にない。

「おまえら、はやくしよう！？俺だけでも特攻してくよ？」

《（なあ、アルテミス。これは主、相当キレてないか？）》

《（ね）。何がご主人をここまでにしたのか、しりたくはあるわね。）》

《（だろう？だから、とりあえずセットアップしないか？）》《（賛成。本当に危なくなったら止めればいいんだし。じゃ、そゆことで。）》

《主。お待たせしました。セットアップ致します。》

「ああ…セットアップ。」

瞬間、俺の体に黒いボディアーマーと、白い外套が纏われる。…よし。感度良好。いける。

「待つてろよクソタヌキ。いま肅清してやるからな…」

そう言っていると俺は空中に指を走らせ、光の文字を描き始めた。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の聖獣を宿す。」

呟くと、頭の奥で枷が外れたような感覚があり、体のスピードが数倍に跳ね上がった。

「座標固定。位置、八神はやての魔力反応半径5m。」

「転移…開始。」

今まさに転移しようとした瞬間、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「剣夜？何してるの？」

剣夜side off

なのはside in

びつくりした。

起きたと思ったら、剣夜が何故かバリジャケット姿で魔法を発動させようとしていた。

何が起きてるのかわからないから、とりあえず剣夜に話しかけてみる。

「剣夜？何してるの？」

問い掛けると、少し驚いた顔をしながらこちらを向いた。

「ああ…なのは、おはよう。なにをしてるか？これはね？なの

はに害なす存在を、この世から消し去るんだよ。」

わけがわからない。どうやら剣夜は、正常な判断が出来なくなっているみたいだ。

「何で？誰を？どうしてこんな事するの？」

「なのは。止めないでくれ。これはお前の為なんだ。お前の為に、俺ははやてを討つ……。」

いきなりはやてちゃんが命の危機に晒されていた。

「はやてちゃん？何ではやてちゃんが出てくるの？」

ここは少しでも会話を引き伸ばして、はやてちゃんに警告の念話をかけなければ。

「何で、だと？決まってるだろう！」

剣夜は言葉を切り、息をためてこうのたまった。

「なのはを寝袋なんかで寝かせるからだ！もし風邪なんかひいたらどうするんだ！」

……。空気が重い。たった一言で病室の空気が凍りついた。

「け……剣夜？今何て？」

なんか物凄い誤解が起きてる気がする。

「だから、この寝袋を渡してきたのははやてだろう？こんな薄っぺらいモンで寝て、風邪ひいたらどうするつもりなんだっていったんの。只でさえ最近お前働き過ぎだし。」

やっぱり。はやてちゃんにアレを渡されただと勘違いしてる。

「剣夜？これは私の私物だよ？剣夜が心配だったからこの病室に泊まったんだよ。」

そう。昨日会議室で気絶した剣夜をフェイトちゃんと一緒に剣夜の部屋まで運び、運悪く簡易ベッドがクリーニング中らしくなかった為、一度自室に戻り寝袋を取ってきて剣夜を寝かしたベッドの脇で寝たのだ。

「え……？」

あ、まるでトナカイがしゃべったのを見たような顔してる。ちよっと可愛いかも。

「なのは？マジで？」

「うん。マジマジ、大マジだよ。」

途端に、剣夜から出てた覇気がかきえた。

バリアジャケットも解除して、元の病院服に戻った。

良かった。これではやてちゃんの誤解は解けただろう。

…解けた、よね？

なのは side off

なのはから事の顛末を聞かされて暫く。はやてとフェイトがやって来た。

「剣夜。元気か？生きてるか？」

なんかいきなり生存確認された。そんなに死にそうなのか、俺。

俺が周りからの見え方を真剣に考えていると、はやてからこんな事を言われた。

「神裂 剣夜執務官。明日から、戦闘総隊長として古代遺物管理部機動六課に異動となります。あ、因みに部隊長はウチな。」

「ああ。つーことは俺は丸一日寝てたのか？よく寝たな俺。まあ、とりあえず。」

俺は姿勢を正し、はやてに敬礼をする。

「明日からよろしく願います、部隊長殿？」

「あはは…よろしくな？剣夜執務官。バリバリ使ってくから、覚悟しときよ？」

「ほどほどでよろしく。で、三人がいるってことは、なのはとフェイトも同じ部隊ってー事でいいんだな？」

これは俺にとって死活問題である。

心の清涼剤のなのはがいるかいなかでは、精神状態に大きな差異が生じる。

「安心せえ。二人はそれぞれ、分隊の隊長をやってもらう。スター

ズとライトニングやな。」

安心した。しかし、三人一緒か。

「騒がしくなりそうだな？」

そう言くと、三人とも嬉しそうな顔をした。

「ふふ。剣夜？よろしくね？」

「ああ。よろしくなフェイト。しっかり頼むぞ？」

「任せて。ちゃんとやってみせるから。」

「剣夜？これからはもっと一緒にいられるね！！」

「ああ。そうだな？なのは、よろしくな？」

「こちらこそ。頑張ろうね！」

四人で決意を新たに、また目標に向かって進んでいくじゃないか。

第四話：総隊長（後書き）

次回、機動六課発足。

第五話：尊敬されることはいい事です

翌日。

俺は昨日はやてから渡された機動六課の制服に着替えていた。

「よし。行くか。」

機動六課は試験部隊。期間は一年。

活動は主に、最近発見されたロストログア、レリックについてになる。

部隊長は八神はやて。

その下に俺、神裂剣夜戦闘総隊長。

そしてその下に高町なのは隊長とフェイト・T・ハラOWN隊長となる。

：しかし、だ。いくらなんでもオーバースキルすぎやしないか？

SSランクにS+、Sランクに俺がEX（測定不能）。いくらリミッターがあるからって、チート過ぎる。

あ、因みに俺はリミッター掛けてSSS+。何でも、これ以上リミッターを掛けられないそうだ。

さて、準備も終わったし、顔合わせに行きますかね。

「まあ、長い挨拶は嫌われるので、この辺で。次は神裂剣夜戦闘総隊長から。」

お、俺か。

段の上で一步前出る。

「紹介された、神裂剣夜総隊長だ。俺から言うことは簡単だ。

まずは戦闘部隊に一言。

死ぬな。全員必ず生きて帰ってこい。

無様に負けてもいい。死ぬな。死んだらそこでお終いだ。生きてれば必ず何時か挽回できる。

地べた這いつくばってでも帰ってこい。

これは命令だ。

中途半端に死ぬ事は許さん。

三途の川まで行って首筋ふんづかまえて引きずってでも死なせはしない。

途中で死ぬならば、最初から全力で生きようと足掻け。

一年後、またここに集まった時。

必ず全員で並べ。わかったか!!」

『はいっ!!!!』

全員で一斉に返事が来た。

よしよし。元気はいいじゃねえか。

「次に後方支援部隊。

お前達の力が無ければ、戦闘部隊はやっていけない。

お前達の行動一つ一つがそのまま戦闘部隊の生存率に直結する事を

片時も忘れるな。

お前達の肩には、俺達の命が懸かってる。

忘れるなよ？返事は!!」

『はい!!!!わかりました!!』

これまた一斉に返事。

頼もしいね。

「よし。俺からは以上だ。日々の教えをしっかりと胸に刻み込め。以上!!」

『ありがとうございます!!』

全員で敬礼。ちよつと怖くなりながらも返礼する。

この後ってどうなったたつけ。何も無ければヒヨッコ共の訓練でも見に行くかね。

機動六課、訓練シミュレーター。

機動六課御自慢の訓練スペース。

なのは完全監修の元、俺とシャーリーで開発した自慢の一品。書類仕事を終わらした俺は、新人達の実力を見るためにそこに来ていた。

ビルの屋上に降り立ち、なのはに話し掛ける。

「なのは。新人達の実力はなんぼのもんだ？」

「剣夜。みんな頑張ってるよ。鍛えがいがああるよ。腕がなるね。」
なのははいい素質を持った新人が配属されて、ご満悦のようだ。隠してるつもりでも口元が笑ってるぞ？

俺はなのはから視線を外し、オレンジの髪―たしかティアナだっけか―を見る。

彼女は、魔法弾にバリアを纏わせようとしていた。

「おいおい。多重弾道なんぞ、新人に撃てんのか？精々半分纏わせたらめっけもんじゃねえ？」しかし、俺の心配を余所に、ティアナは完全した多重弾道で残りのガジェット三機をぶち抜いた。

「おお。マジでやりやがったよあいつ。こりゃ新人達は相当の掘り出し物じゃあないか？」

そう。訓練校を卒業したばかりのヤツらがガジェットを倒したのだからその凄さは計り知れない。

「そうだね。でも剣夜？みんなまだまだまだ原石。どんな色なのかもわからない。どんな形をしてるのかもわからない。大変なのはこれからだよ。」

「本当にな。お前も無茶はすんなよ？お前が体壊したら、それこそもう二度と無茶出来ないように説教だぞ？」

「うん。その点は大丈夫だよ。またあの時のような間違いはしないよ。」

「頼むぞ？《アレ》が使えるのは後三回だからな？」

「大丈夫だよ。それに、昔と違って今は剣夜がいるからね。」

「うっ…。聞いてるこつちが恥ずかしいような事を平然と。コイツも大概天然だな。」

「はあ…。まゝ俺の仕事が増えるわけか。ほどほどにしてくれよ？」

「剣夜なら大丈夫だよ。」

「さっさとやってくれるぜ。」

「根拠は？」

「剣夜だもん。大丈夫！剣夜なら出来ると思うよ？」

「やっぱり。この自信はどっからくんのかね？」

「私は剣夜を全面的に信頼してるもん。剣夜は何でもできるしね。」

嬉しいこと言ってくれるじゃないか。

俺はなのはの肩を抱き寄せた。

なのはも特に抵抗せず、こっちに顔を向ける。ああ、そゆことね。俺はその顔に唇を近付けていき、そのままキスー。

「あゝ？私もいるんですけど？当て付けですか？」

しようとして、シャーリーに止められた。

「あれ？シャーリーいたの？気付かなかったよ。ごめんね？」
流石天然。的確にシャーリーの心を抉ってやがる。

「悪かったなシャーリー。てつきり逃げてきたガジェットにやられたもんかと。」

だが、俺がこの辺で止めると思ったら大間違いだ！
キス出来なかった恨みを晴らさせる。

「ガジェットって、それは酷過ぎますよ剣夜さん！私そこまで馬鹿じゃありません！やられる前にシステムを止めますよ！」

「どうだか。オタオタして何も出来ないのがオチだな。」

ん…？ガジェット？その手があつたか！

「なのは。訓練終わったら俺にガジェット二十体出してくれないか？」

「いいけど…。何するの？」

「何。只のストレス発散さ。」
只の、ね。

「いいよ。二十体だね？AMFはどうする？」

「フルパワーで。ガンガンやってくれ。」
久しぶりに直死を使うか。
たまに使わないと腕が鈍る。

「さて、私はフォワードの所に行くね？」

「ああ、俺も行くよ。言いたい事もあるしな。」

フォワード陣の所に行くと、驚いた顔をされた。

「え？あの、なのはさん？何で総隊長がここにいるんですか？」

「スバル？失礼だよ？何でって、剣夜も時々みんなの訓練を見てくれるからだよ。」

「「「「ええっ！？」」」」

「何をそんなに驚いてるんだよスバル。」

「え、だって総隊長って言うたらモニターの前でふんぞり返って命令するイメージがあるんで、ちよつと意外だな〜って。」

失礼な。俺がそんな外道に見えるのか。ちよつとシヨックだ。

「はは。酷い誤解だな？俺だって前線に出るぞ？」

「うん。剣夜隊長も出撃するよ？コールサインはメテオ。単体のサインは隊長だけだね。」

「そこ、そのちっこいの二人！何鳩がディバインバスター喰らったような顔してやがる。そんなに意外か？」

そう言ったら、赤髪とピンクの少女がワタワタしながら弁解し始めた。

「いえ、そうじゃなくてですね。」

「なんか、すごーい強そうだなって思ったんです。」

ふむ。ならあのストレス発散をみせてやるかな。

「そんなに言うなら見せてやんよ。なのは、ガジェット二十体、リンクSでよろしく。」

「いいよ。リンクSだね？みんな？危ないから私より前に出ないでね？レイジングハート、プロテクションお願い。」

《All light・protection hard》

なのはがプロテクションを張り、モニターを操作すると俺の前にガジェット二十体が出てきた。

「AMF最大展開完了。剣夜。いけるよ！」

「了解。なら、三分で終わらせる。カウント頼むわ。」

「うん。いくよ？レディー、ゴー！」

なのはの腕が振り下ろされると同時に、ガジェットが一斉にビームを撃ってきた。

だが、密度が薄い。穴がありすぎる。

ビームの穴に体を通し、アルテミスに話し掛ける。

「アルテミス。七夜だ。セツトアップはしなくていい。二分で終わらせるぞ。」

《了解》　ちゃっちゃとやっちゃいましょ？》

「ああ。…直死、解除。」

右手の人差し指の指輪が光り、短刀に形を変える。

それと同時に、世界に線と点が描かれる。

因みにここまでで約十秒。

「まずは十体！切り刻む！」

一番近くにいたガジェットに高速で近寄り、真ん中に走っていた線をなぞりつつその隣のガジェットの点を突く。

「二体！はああああっ！」

更に加速し、瞬時に三体の線をなぞる。

手に持った短刀を一番遠くのガジェットの点目掛けて投げ、両手に日本刀に形を変えたアルテミスを振るう。

あと二体。ここまでの時間、三十二秒。

行ける。体が軽い。今なら世界だって殺せそうだ。やらないけど。

右の刀を振り、ガジェットを両断。左の刀で点を突く。

そのまま後ろに回転し、ガジェットを切り払う。

よし、まずは十体。これで四十八秒たった。

残り十体は直線上に並んでる。好都合だ。一気に消し去ろう。

「アルテミス。シューターだ。行けるな？」

《勿論！》

軽い返事と共に右手にゴツい拳銃が握られる。

「イージス！出番だ。弾道の誘導を頼む。」

《承知した！安心して任されよ！》

頼もしい返事が中指から帰ってくる。

イージスは術式補助とシステムB専用機だからな。余り訓練で使う機会はないな。

まあ、なるべく使おうとはするけどね。

「行くぞ！デイベイン…バスター…！！！」

俺の魔力光であるクリスタルシルバーの極太砲撃が残りのガジェットを全て射線に取り込み、消滅させる。

…あー。やりすぎたような気がする。どどんビルが倒れてく。

ま、いつか！あゝすっきりした。ガジェットざまあww

皆の所に戻ると、フォワード達が自信をなくしたような顔をしてい

た。

「何よあの砲撃…あんなの撃てる訳ないじゃない。」

「スピードだけが取り柄なのに…全く見えなかった。」

「「はあ。」」

「おい、なのは。あいつら二人はどうしたんだ？」

「ああ、ティアナとエリオ？なんかプライドが粉々になったみたいだよ？」

マジすか。俺のせい？あ、やっぱり？

しゃーねえ。ひと皮脱ぎますかね。

「おい、お前達。俺は最初からこうだったと思うか？」

答えはnoだ。俺だって最初の方はひどいもんだった。

魔法弾の制御はできない、ろくに収束魔法も撃てやしない。

ただ魔力の量が膨大なだけの、いわばタンクみたいなもんだった。

だが、なのはに集束のやりかたを教わり、フェイトに戦い方を学び、シグナムさん達ヴォルケンリッターに立ち回りを教えてもらった。

わかるか？俺だってこんなだったんだ。お前らが気に病むことじゃあない。

むしろ、はやく俺を追い越してやる！とか、まってるよ総隊長！みたいな感じでいればいい。

俺を追い越す方法はなのが教えてくれる。

お前達はそれを全力でこなしていけばいいんだ。その応援ぐらいはしてやるさ。」

言い切ると、スバルとエリオが尊敬のまなざしでこちらを見ている。何！？俺がなんかやっちゃった？マジで？

「す・・・」

す？なんだ「す」って？

「すごいです剣夜総隊長！尊敬しました！一生ついて行きます！」

あー。そういうことね。すの意味がわからなくてびくびくしてたよ。しかし・・・尊敬、ねえ。

表だって言われたことが無いからか、妙に背中がかゆい。そうか、これが照れくさいってことなのか。

なのははいつもこんな感覚と戦ってたのか。今までさんざん「えーすおぶえーす」とかからかって。悪い事したな。反省。

「総隊長！総隊長！総隊長！ばんざーい！」

尊敬にしてもこれはさすがにやり過ぎだろう。これじゃ神裂教の開祖だ。それはゴメン被りたい。

「あゝ、スバル、エリオ？」

「sir, what sir！」

なんかこの短時間で返事が軍隊式になってるんだけど！？これは行き過ぎだろう！ほら、ティアナとかキャロとか引いてるし！なのはなんか一歩ずつ後退して行ってるし！

「sir? What do you think sir?」

「スバル、エリオ。言語を元に戻せ。ここはあいバベルじゃない。ミッドチルダだ。普通に話せ。」

「はい!! 了解しました総隊長!」

「剣夜でいい。それで、だ。俺のことを尊敬してくれるのはいい。だが、お前らの直属の上司はなのはだろう? なのはを放っておいていいのか? 最悪、”お話し”されるぞ?」

「でも……。」

「個人的に慕ってくれるのはかまわないが、あまりおおっぴらにやるのはどうかと思うぞ?」

「はい……。わかりました。」

目に見えて沈んでるんですけど。今にも地面に沈んでいきそうなくらい。

こんなに慕われているのはわかるんだが、あまりにもやり過ぎてる。

「まあ、限度をわきまえればかまわない。限度をわきまえるよ? 俺は言ったからな?」

「はい! わかりました!」

「よし。ならいいんだ。ほら、なのはの所に行ってやれ。」

「はい!」

ふたりは敬礼をし、なのは所に走っていく。
よし。なのはにアイコンタクトを試してみる。

（悪かったな。新人を借りて。）

（ううん。問題無いよ？）

（ありがとな、なのは。）

いい彼女を持ったよ、ホントに。

第六話：サングラスよ永遠に 前編（前書き）

少し長くなるので前後編に。

第六話：サングラスよ永遠に 前編

機動六課発足から一週間。

相も変わらずフォワード陣はなのはのキツイ訓練をこなす日々。皆さんどうお過ごしでしょうか。

ワタクシ神裂剣夜、只今絶賛

「剣夜！よけないでよ！お話し出来ないでしょ！？」

命の危機に直面しております！！

「無理だから！よけないとか死ぬから！非殺傷設定でもそんだけスフィア喰らったら死ぬから！」

「剣夜なら大丈夫なの！私の愛を全部受け止めてくれるって言うってたでしょ？だから大丈夫！」

「それは愛じゃねえ！純粹なる殺意だ！」

なぜこんなことになったかと言うと、二時間程前に遡る。

六課の食堂にて。

俺となのははちょっと早い昼を食べていた。

「カッレ〜、カッレ〜、カッカレー〜」

「剣夜って本当にカレー好きだよな〜。」

「ああ！血潮はカレーで出来ていると自負している！カレーは血液！カレーが無ければ俺は生きてはいられまい！カレー万歳！ジーク、

カレー！カレーに栄光あれ！称えよ、崇めよ、奉れい！」

「さ…流石にそれは言い過ぎだと思うよ？」

「そんなことはない！俺はカレーを愛しているんだ！」

「ふうん…。…ねえ、剣夜。カレーと私、どっちの方が好きなの？」

後に俺は語る…。この時なのは放つ雰囲気が変わった事に気付いていれば、あんな惨劇は起こり得なかった、と。
しかし、この時の俺は完全にカレーに意識が行っていた為、こんなに簡単に地雷を踏んでしまった。

「そりゃあお前、決まってるんだろ？」

「うん、そうだよ！決まってるよね！」

「ああそうとも。んなもんカレーに決まってる。。」

流石にトリップしていた俺でもわかった。

真ん前に座るなのは放つオーラが、何時ものにはぐつとした物から、悪魔の物に変わって行っている事に。

おいそこ！フォワード陣！うわぁ…なんて言いながら震えてるな！俺を助ける！いやむしろ助けて下さい！

「スバル！丁度良い所に！助け「無理です！」最後まで言わせる！」

「無理ですって！あんな怖いのはさん見たこと無いですもん！下手したらコツチまでやられますよ！？」

「貴様それでも軍人か!？」

「軍人じゃ無いです!」

「心は軍人だ!」

「何ですかそれ!」

「あの…。剣夜さん?」

「ん?どうしたエリオ?」

「いえ…。剣夜さんの後ろになのはさんがいるんですけど、逃げなくていいんですか?」

「なんだと?」

機械のように振り向くと、そこにはとてもいい笑顔のなのはが。
やべえ…。笑顔がこええ…。

「剣夜…。」

「な、何かな?愛しのなのはさん?」

「ちょっと…。お話し、しよう?」

「えっ!?!なのはさん!?!何で俺の腕を掴むの?待つて!?!話し合おうよ!人は必ず分かり合えるはず!頼む!離してええええええええー!」

「行っちゃったね…。」

「ええ…。ねえスバル、何時の間にか総隊長と凄い打ち解けてない？何があつたの？」

「あ、私もそれは気になりました。どうしたんですか？」

「ああ、剣夜さんと会った初日に、『剣夜でいい』って言われたんですよ。」

「うん。それで剣夜さんって呼ぶようになったんだよ。総隊長だと堅苦しい…って。」

「「へえ」。」

「ほらどうしたの剣夜！動きが鈍いよ？」

「連続で二時間も逃げ回ってきた事も考慮してくれませんかね！？すっげえ辛いんですけど！そろそろ許して下さい！」

「うん、それ無理！」

何でお前がそのネタを知っている！

「これ以上は流石に無理！ヤバいから！ってかレイジングハート！

「なのはを止めろ！」

《剣夜さん。今の私にはマスターを止める術がありません。諦めてください。》

「お前は最初っから何もしてないだろう！？為す術が無いですとかよく言えたなあ！」

「劍夜！」

「はいっ！」

レイジングハートと漫才（本人は必死）を繰り広げると、なのはさんに呼び止められた。

「私の愛情……受けとめてね？
ディバイーン……」

「だからそれは愛情じゃねええええええ！つてチャージ終わってるし！待って！？話し合おうよ！」

「いましてるじゃない！バスターー！」

「それは話し合いじゃない！ お話したあああああああ
あ！ うわこっちきたやめろ助けてええええええー……。」

バスターは寸分変わらず俺の顔面に直撃した。

今度なのはに話し合いとお話しの違いを教えてやろう、などと考えながら俺は錐揉み状に回転し、宙を舞うのだった。

あの悪夢の魔王タイムから一時間。

俺の懸命な謝罪活動により機嫌を直したなのは、只今俺の左腕に抱きついています。

「〜」

しかし、いつもなら腕に感じる柔らかさを意識しているのだが、今の俺の意識は完全に目の前にある物に注がれている。

「はあ…。」

「剣夜？どうしたの？」

「見て見るよこれ。サングラス。さっきのバスターで木っ端微塵だよ。」

「あ…ホントだ。粉々だね。どうしよつか？」

「どうしよつか？じゃ無いだろ！顔面にバスター直撃させておいてよく言うぜ！！滅茶苦茶痛かったぞ！！？」

するとなのははこちらをみて最高にいい笑顔で、サムズアップしながら、

「大丈夫！非殺傷設定だから！死にはしないよ！」

「非殺傷でも痛みでシヨック死するわ！馬鹿かお前！」

「あ、ひどっ……。馬鹿はないと思うの馬鹿は！」

「馬鹿だ！むしろ大馬鹿だわ！」

「何よ！」

「何だよ！」

「...!」

遠くから観戦していたフォワード陣の会話。

「ねえ、ティア？」

「何よスバル？」

「うん。あの二人、端から見たら只の痴話喧嘩にしか見えないって事、わかってやってるのかな？」

「まさか。今のなのはさんと剣夜さんにそこまで考える余裕はないわよ。特に剣夜さん。さっきまで逃げ回ってたから、精神的にも肉体的にも疲労困憊な筈よ。…っっていうか…。彼氏がいない私達に見せつけてるとしか思えないのよ…!!」

「わあっ！？ティア、黒いよ！黒過ぎて周りが歪んでるよ！？」

「ほんとですよ…。剣夜さんとなのはさん、凄く仲がいいですよ。…僕とキャラもあなれたら…。」

「ん？エリオくん、最後何て言ったの？」

「うえ！？あ、いや、何でもないよ！何でも。」

「…？うん。」

「はあ…。エリオも早く素直になればいいのに。」

「そうね…。まあエリキャラはエリキャラだから、いいんじゃない？」

「それもそだね！」

「まあいいや。この争いはあまりにも不毛だ。そろそろ止めにしないか？」

「そうだね。状況は何も変わってないものね。」

「「はああああ……。」「」

「で、剣夜？どうするの？」

「「どうするも…どうするも、しょうがないさ。これからは裸眼でいくぞ。」」

「大丈夫だ。多分。みんな受け入れてくれるさ。」

「ならいいんだけど…。」

ここでグダグダしていても変わらない。
行動を開始しようか。

「フェイトか？一時間後に戦闘要員をブリーフィングルームに集めてくれ。」

『いいけど、どうしたの？』

「詳しくはそこで話す。」

間違ってもWebではない。

『わかった。一時間後だね？』

「ああ。頼むぞ？」

『了解、総隊長殿？』

モニターの向こうのフェイトは、何が面白いのか笑顔で敬礼してきやがった。

畜生。総隊長をからかいやがって。後で一分間耐久くすぐりの刑だな。

一時間後。

ブリーフィングルームニテ。

「スバル？何で集められたか知ってる？」

「うん。いきなりフェイトさんに、フォワード全員でブリーフィングルームに来て、って。」

「何なんでしょうね？しかも戦闘要員全員で。」

「ヴォルケンリッターの皆さんも揃ってるし、なんか緊急事態でしょうか？」

「違うよ？なんか、剣夜がみんなに話があるんやって。」

『八神部隊長！？』

「うん、八神部隊長やよ？」

そのいかにもなスカした答えに、フォワード陣が言い返そうとした時、剣夜がブリーフィングルームに入ってきた。

「ん？もう皆おそろいか。」

「うん。もうみんな揃ってるで？」

「そうか。なら、始めようか。」

そう言うと剣夜は皆の前に立ち、息を吸う。

「今日集まって貰ったのは他でもない、俺の『眼』についてだ。」

「眼？」

「そうだ、キャロ。俺の眼でありながら、レアスキル。」

「眼とレアスキルが一緒？」

ティアナはまだ納得しきれない様子で首を傾げている。

「ああ。俺の眼を見てみる。何かが浮かび上がっていないか？」

「ホントだ…。何か朱い五方星が浮かんでいます。」

「スバル、正解。これが俺のレアスキル、『アルファ・ステイグマ』複写眼だ。」

「アルファ・ステイグマ？何ですかそれ？」

簡単に言くと、視ただけで魔法の全てが解る魔眼だ。」

「ほう…。全てとはどういう事だ？」

どうもシグナムはその抽象的な言い方に疑問を感じているみたいだ。

「どうもこうもない。全ては全てだ。魔法の構造・形・消費する魔力量・解除方法・使用方法・などだな。ほら、全部だろう？」

全員がそのオーバースペックに戸惑っている様子。

信じられない、などといった感情が顔に出ている。

「信じられないか？なら、見せてやる。なのは。スフィア2つ出してくれ。」

「ちょ、剣夜！こんなところで魔法なんかついたら、最悪六課が壊れるで！？」

「大丈夫だ。なのは？浮かばせるだけで構わない。まあ見てろ。」

剣夜がそう言った途端、彼の両目が赤く、いやむしろ朱く輝き出す。そして瞳に朱い五方星が浮かぶ。

「剣夜？出したよ？今は目の前に浮かばせてるけど、これでいいの？」

「十分だ。いいか皆？よく見てろよ？」

剣夜はいきなり空中に指を踊らせ、光の魔法陣を描いて行く。それを信じられない速度で完成させると、剣夜は一言呟く。

「求めるは改変くくく・変異」

すると魔法陣から黒い煙が走り、なのはの右に浮かぶスフィアにぶつかる。

次に起こった事に全員が自分の眼を疑った。

スフィアの形が変わったのだ。それも生半可な変化ではない。平らに広がり、段々とその輪郭に沿って縮んでいく。

ある程度まで縮むと、今度は輪郭自体が変わり始める。

輪郭が歪み、その完成型へと近づいていく。

変化が止まると、実物と同じ大きさの桃色で出来た、なのはの顔が浮かんでいた。

第六話：サングラスよ永遠に 前編（後書き）

後編はなるべく早く上げます。

第七話：サングラスよ永遠に 中編（前書き）

結局三つに…

第七話：サングラスよ永遠に 中編

「え…？」

皆言葉が出ないようだな。

ふふふ、今使った魔法は、魔力を組み替えて別の形を作り出す魔法だ。

構成が読み取れる『複写眼』だからこそ出来る芸当。

正直、何が起こってるのかわからないだろう。

それ程この眼は規格外なんだ。

「もう一つだな。」

今度描くのは光の文字。

空中にミッドの文字とは違う文字が展開されていく。

「我・契約文を捧げ・世界に眠る脅威の仕組を興す」

瞬間、なのはの横の魔法弾に変化が起こる。

魔法弾が一度魔力の塊に還元され、別の魔法陣、ミッドともベル力とも違う形の魔法陣へと変化していく。

出来上がったのは円をベースに内部に複雑な構造を飲み込んだ魔法陣。

そしてその魔法陣を俺は発動させる。

「我・契約文を捧げ・求めるは西、無、陣、陽の向きから生み出す光の魔獣。」

すると、魔法陣の中央に光の塊が生まれ、段々と形を作っていく。

生まれたのは丁度ザフィーラ程の大きさの光の虎。

「よう、ロア。喚び出しといて何だが、只お前を見せたかっただけなんだ。悪いな。」

『構わん。我の命は主の物。所有物を使い回して何を謝る？』

「だあかあら、いい加減その古臭い考え方止めろって。何だよ所有物って。」

『ならんな。我は主について行くと決めたのだ。』

「でもなあ、お前は何時も」

「剣夜？皆がついていけないんだけど？私も何が何だか。その、説明してくれない？」

俺がロアに説教を開始しようとした所で、フェイトに止められた。

「ああ、悪い。コイツはロア。一応俺の使い魔って事になってる。」

「使い魔、ですか？でも今、ロアさん魔法陣の中から出て来ましたよね？」

うつむ。エリオの疑問は最もだ。だが、俺が上手く説明出来るだろうか？

答えはノウ。無理だ。よし、

「その辺はロアに聞け。」

奥義、丸投げ！ふふふ、ロアよ。俺の代わりに説明したまえ！

『うむ。我は普通の使い魔ではなく、ただ単に我が主に協力してるだけなんだな。違うのは当たり前だ。』

「そーそー。意外と単純。分かり易いだろ？」

「はあ…。」

む、エリオ。納得してないな？

「神裂…。」

「はい？何でしょう？」

いきなり今まで黙ってたシグナムが口を開いた。
とりあえず…。

「告白ですか？だめですよ？俺には心に決めた人がいるんで。」

茶化すために冗談を言うと、なぜかフェイトが真っ赤になった。
フェイトよ、なぜお前が赤くなる。何時俺がお前にそんなそぶりを
みせた。ほら、なのはをしてみる。

誰を示すのかわかって（自分だと）自分の世界にトリップしてる
だろう。そういう事だ、お前じゃあない。

「神裂・・・私は真面目な話をしようとしたんだが？それとテスト
ロツサ、どうもお前じゃ無いようだが？」

「ふえ？」

そこでフェイトは元に戻り、ゆっくりと周りを見る。みんなの苦笑

しながらも自分の隣を見つめる視線に気がつき、その視線に沿うように顔を隣へと向ける。

そこにいるのは、顔を真っ赤にしながらいまだ自分の世界にトリップしてるなのが。

フェイトの眼が動き、なのはと俺、そしてみんなとの間で激しく行き来する。

みんなの顔には、『なんだ、今頃気がついたのか』と言ったような表情が浮かんでおり、その意味する所を読み取ったであろうフェイト。

その顔が先ほどの理由とは違う理由で赤く染まってゆく。

「~~~~っ！」

「そういう事だ、テストロッサ。お前の春はまだ来ない。残念だったな。」

「し、シグナム！何で最初に言ってくれなかったんですか！？」

「何、慌てふためくお前が面白・・・じゃない。たいそう愉快・・・でもない。・・・まあ、その、なんだ。と、とにかく、お前じゃ無い、それだけだ。」

あ、シグナム逃げたな。あれでだまされるのは、それこそフェイトと

そこで俺はぼへっとしてる青い髪の前髪に顔を向ける。

「？剣夜さん、どうしたんですか？」

こいつぐらいだろうな。

まあ、戦闘時はちょっとは鋭くなるから、大丈夫だとは思うがな。

「いんや、何でもない。悪かったな。」

「?いえ。」

危ない危ない。もう少しで気付かれるトコだった。

さて、そろそろシグナムに話を戻してやろつ。いい加減内容が気になってきた。

「で、シグナム。何だったんだ?」

「いや。何、すべての魔法を読み取れるのなら、それは同時にすべての魔法を使えると言うことじゃ無いかと思つてな。ちよつと気になったんだ。」

ああ、そんなことが。

「出来ますよ?むしろ、みんなが使つてゐる魔法は燃費が悪いもんだから、色々改良して使つてゐる位ですし。」

「燃費が悪い?どういう事だ?」

「そうですね。じゃあシグナム。あなたの紫電一閃、うまくいけばあと二発は撃てますよ。」

俺がこの前模擬戦で見た技をたとえに出す。するとシグナムはひどく驚いた顔をしていた。

「そ、それで?具体的に言ってくれ。」

「では。まず、炎の熱の事にばかり頭が行って、形がついつい大きくなりすぎていますね。それに、変換効率が悪すぎます。後で端末に改善データを送っておきますので、参考にしてみてください。」

「むう……。わかった。すまないな、神裂。それと……。」

「まだ何か？」

何だろうか。もしかしてデート！？……いや、無いわ。自分で言ってみて恥ずかしくなった。

それにしてもシグナム、いい笑顔である。何かいいことが起こるのだろうか。

俺が見ているとシグナムはとてもいい笑顔で、

「これから私と、模擬戦をしないか？」

爆弾を投下した。

機動六課、訓練スペース。

あれから逃げようとした俺をみんなが総出で取り押さえ、泣く泣く訓練所へ。

「俺は……。無力だ……。」

ああ、空が青い。いい天気だ。潮風が気持ちいい。

これで目の前にセットアップしたシグナムがいなければ、もっとい

い気分だったろうに。残念だ。

「もちろん手加減はしてもらっぞ？管理局最強の魔導師と名高いお前が本気を出したら、私など一瞬で塵になるだろうからな。」

「わかりましたよ！やりやあいいでしょ、やりやあ！」

「そうだ。わかってきたじゃあないか。」

「はあ・・・不幸だ。手加減ねえ。こんなのでどうでしょう？『神裂剣夜は今回、自分の魔力を使わない。』」

「そんなので大丈夫なのか？魔力がないと、何も出来ないだろう？」

瞬間、俺のお笑いセンサーがボケのフリを敏感に感じ取った！

「大丈夫だ、問題無い。」

「そうか。なら始めるぞ。」

あるえ〜？スルーされたよ。何で？

「剣夜ー、とりあえず頑張れー！」

なのはよ。とりあえずをとって応援してくれないか？

「シグナムー！あんなのぼっこぼこのぎったぎたにしてやれー！」

ヴィータさん？あんなのは無いと思うんですけど？

因みに今ここには、六課の主要メンバーがそろっている。お前ら仕事しろ。

「ねえスバル？どっちが勝つと思う？」

「ん〜。予想しようにも、あたし剣夜さんが戦ってるって、見たことないんだよね。」

「剣夜は相当強いで？」

「うわっ、八神部隊長！いきなり後ろから声かけないでくださいよ！心臓止まるかと思ったじゃないですか！」

「言い過ぎ、スバル。」

「あはは、ごめんな？でも剣夜が強いんはホントなんよ？何てったって、『エースオブレジェンド』やしね。」

「何ですか？その『エースオブレジェンド』って。」

「ありや、知らないん？局員の中では意外と知られてないんかなあ？一般の間では結構人気なんやけど。」

「そんなにですか？」

「うん。もう神裂を超える魔導師は未来永劫現れないだろう、ってことでレジェンド〜ってついたらいいねんけどな？その二つ名が付いた当時は、まだそこまで剣夜と親しいわけじゃ無かったしな？三

年前に何かあったらしいやけど…。剣夜もなのはちゃんも何も話してくれへんし、わかるんはその事件が“事件”って呼ばれてることだけやったし。

ま、じきに剣夜の口から聞き？いつか話してくれるよ。」

「はい！」

何だか俺の過去が勝手に話された気がする。
はやて、おまえか？

「そろそろいいか、神裂？」

「ええ。では…。なのは、スタートを。」

「了解。行くよ？レディー、」

俺とシグナムは同時に構える。シグナムは抜き打ちの為に俺はすぐに魔法陣を描き出せるように。

「ゴーツ！」

なのはの手が振り下ろされた瞬間から、俺は光の文字を空間に刻んでいく。

瞬く間に完成したそれはしかし、呪文を唱えるまで行けなかった。シグナムがレヴァンティンを振り下ろして来たのだ。
当然よける。髪の毛数本持つて行かれたけど気にしない。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の聖獣を宿っおと！」
危なかった。あのまま唱え続けてたらやられてた。

「宿す！」

最後まで言えなかった呪文を唱えると、微かに全身が光る。
今の魔法は脳のリミッターを強制的に外し、身体能力を格段に上げる魔法だ。

くう。筋肉が軋む。こりゃ明日は筋肉痛だな？

「逃げるな神裂！」

「いや逃げますから。むしろもう逃げたくなる位まで逃げますから。」

「軟弱者！」

「そのセリフは平手打ちと共にお願いします！」

なんて漫才をしながらも反撃の為の魔法陣を描いてゆく。
よし、出来た！

「求めるは雷鳴くくく・稲光！」

途端、魔法陣の中央から稲妻が走る。目標は勿論シグナム。

「むうっ！？」

しかし雷撃は右に飛んでかわされた。

「甘いぞ神裂！」

「甘いのはそっちだ。今のは囿の本命はこっち。」

稲光の魔法陣へ被せるように展開していた魔法を発動させる。

「求めるは殲虹くくく・光燐！」

今度は光の柱。それがシグナムに伸びていく。

終わったかな？ だといいな。

淡い希望を持ちながらシグナムを見る。

そして次の光景に啞然とした。光燐を剣で切り裂いたのだ。光を裂いた勢いそのままにこっちに走ってくる。

なかば呆然とした頭で、対抗するための魔法を描く。

「求めるは焼原くくく・紅蓮」

「レヴァンティン！」

《explosion》

「紫電一閃！」

「うそお！？ また切った！」

飛んできた炎弾を炎剣で取り込んだ。

しかもそのままこっちきた！

「ちょ、こつちくん！ 求めるは水雲くくく・崩雨！」

「ぬうう ああああ！」

打ち出された水流を蒸発させながら突き進んでくる。

だがシグナム！ あなたは策にはまった！

自分でも口が歪むのは感じているが魔法は止まらない。

「終わりだ。求めるは雷鳴くく・稲光！」

あえて狙いはシグナムではなく水流へ。
上手く行けば…！

「ぐあああつ！」

かかった！水から感電して痺れた！
一気に懷まで入り込み、光燐の魔法陣を完成させる。

「はい、チェックメイト。」

「ぐう…。」

ほとんど密着してる状態からは剣は振るえない。
それに加えてこちらは体にくつつくぐらいまで近くに魔法陣を展開してる。

どうあがいても俺の勝ちだ。

「なる程、な。あそこで私が水を斬る所まで想定済みか。」

「ええ。シグナムならやってくれると思って稲光を描いてましたから。」

「ふ、完全に私の負けだ。悪かったな。」

「なにがです？」

「つきあわせて、だ。この埋め合わせはいつかしよう。」

そう言ったシグナムは凄くすがすがしい笑顔を浮かべていた。

「いいですよ。俺も楽しかったですし。」

「そう言ってくれるとありがたい。」

二人で顔を見合わせて笑う。

ああ楽しかった。本当に楽しかった。
久しぶりに全力で魔法を描いた。

「さて、未だに何が起こったのかわかってないフォワード陣の所に行きますか。」

「あれぐらいのスピードについてこれないのか…。訓練の増量を高町に言っておこう。」

フォワード陣…ドンマイ！

第八話：サングラスよ永遠に 中中編

「剣夜ア！魔力は使わないはずじゃなかったのかア！」

みんなが集まってる所にシグナムと二人で戻ると、突然ヴィータがアイゼンで殴りかかってきた。

「はあ…。アルテミス？」

『了解』

だが忘れてもらっては困る。

こちらにはチート仕様のイージスとアルテミスがいるのだ。今だつてとつさにアルテミスを盾にして楽々防いだ。

「ヴィータ、落ち着け。今からそれを説明する。」

「ホントだろうな！！納得行かなければ討つ！」

「シグナムが好きなのはわかったから。な？」

「バツ…！何言つてやがる！あたしは…！」

「あゝはいはいよしよし。どうにも思つてないんだろっ？」

「ぐっ…そ、そうだ！」

なる程。ヴィータもツンデレだったか。顔真っ赤にしてやがる。

「ほら、剣夜？ヴィータちゃんいじるのはそれ位にして、早く説明してくれない？」

俺が更なるからかいを始めようとして口を開こうとしたとき、見かねたなのが介入して来た。

因みに他の隊長陣は娘の成長を見守るお母さんのような顔で静観を決め込んでいた。

助けるや。特にヴォルケン。家族だろう。

「ああ、悪かった。ヴィータをいじるのはまた後で、だな？良かったなヴィータ？」

「良くない！」

「それと…。」

「ん？…！ど、どうしたなのは？顔が怖いぞ？」

マズいマズいマズいマズいマズいマズい！！！！！！

あのオーラは白い悪魔モードの時に発動する物だ！

何故だ！？今回はアイツの期限を損なうような振る舞いはしなかったはず！

一体なにがー。

「剣夜？何でもここ一週間、全く優しくしてくれなかったの？ねえ、どうして？ねえ、ねえ、ねえ、ねえ？教えて？何があったの？」

そういえばそうだったー！

この一週間は引越しやら異動やらで凄く忙しかったんだっただけ！
なのはの奴、完全に根に持ってやがる！

どうする……？ 考えろ、考えろ俺の普段あまり働いてない脳細胞！

「剣夜：後で、お話し、だね？」

「はい。」

$$\backslash \left(\wedge \bigcirc \wedge \right) /$$

はい死亡フラグたちましたー！どうみても絶望です、本当にありがとうございました。

神裂剣夜の物語はここで終わります。キー先生の次回作にご期待下さい！

「待って！誰か助けて！目を逸らさないで！こっちみる！おい！」

「デイベイイーン……」

「待て！なのは！何でも一つ言うこと聞くから！なっ！？だからその構えたレイジングハートを下ろせ！頼むから！」

そこまで一気に叫ぶと、なのはは少し考える素振りを見せた後、ものっそい良い笑顔でこう言い放った。

「元々言うことは聞いてもらうつもりだったから問題ないよ！
バスタアアアアー！」

「おま、ちよそれは卑怯だつてばギャアアアアアアアアアアアアアアアア……。」

「……………死んだな。」

「シグナム、アイツを侮っちゃいけない。あんぐらいじゃアイツは死なない。ほら、見てみる。」

一方、現場。

ほとんど垂直に撃たれたバスターだったため、真ん中に剣夜が倒れたクレーターが出来上がっていた。

「あれ？私は今まで何を？って、ええ！？何このクレーター！私なの！？私がやったの！？」

そして上空では、なのはが我を取り戻していた。

「剣夜！？どうしたのこれ！？」

自分がやった、と頭の隅で囁く声を無視して剣夜を抱き起こす。なのはの腕の中の剣夜は頭を胸に抱えられ、違う意味で死に直面していた。

窒息である。リア充氏ね。爆発しろ。全男の嫉妬を抱いて溺死しろ。その時、剣夜の指先がピクリと動いた。

「ど……………」

くぐもってよく聞こえない。

「剣夜？」

なのはが怪訝そうに声を上げる。

「童貞のまま死ぬるかあああああああああ！」

ガバアッ！と体を起き上がらせながら叫ぶ。

いや、起き上がらせたつもりだった。

今の剣夜の状態を確認しよう。 なのはに抱き起こされている。
頭は胸に。

そんな時に体を起こすとうなる？

倒れる。うしろに。

それは端から見れば丁度なのはを剣夜が押し倒しているように見えるわけで。どういっわけかなのは何も抵抗らしき抵抗をしようと
しなかった。

それどころか、

「け、剣夜？その、ね？あの、やっぱりはじめては、ベッドの方がいいと思うんだ？まあ、剣夜がいいなら私はどこでもいいんだけど、みんなも見てるし、ね？」

なんて事を顔を赤くしながら言い出す始末。

駄目だこのエース。はやく何とかしないと。戦闘に支障が出る。

「剣夜？大丈夫……夫？」

「はやて？どうか、し……た……。」

そこに最悪のタイミングでフェイトとはやてがやって来た。
そして固まった。見事に。凍り付いたように。

「バルディツシュ……。」

「シュベルトクロイツ……。」

二人から膨大な負のオーラが立ち上る！

そのまま二人は懷からそれぞれのデバイスを取り出し、名前を呼ぶ。

「セツトアップ。」

さすがに至近距離でセツトアップされれば二人の世界に入っ
ていても気付く。

そして今度は剣夜が固まった。なぜなら、二人のデバイスの構えた
先は完全に自分をロックオンしていたから。
そして早くも魔法の発動を始めていたから。

「おいおいおいおいおい！？お前ら落ち着け、な！？」

慌てて体を起こし、五方星の浮かぶ朱い瞳で二人を見る。
そこで彼は絶句した。

読み取ったのは、とある紛れもない事実。

ふつ。現実つてもんは時に非情だぜ…。

思わず現実逃避をしてしまうほどの事実。

それは、極めて複雑な発動方法をしているのに、撃たれるのは只の
デバインバスターの簡易版。

どれくらい複雑かと言うと、通常のデバインバスターなら解除に
かかる時間は大体行動を開始してから2秒程。

しかし今二人が発動しようとしているモノでは、30秒程の時間を
必要としなければ解除出来ないような複雑怪奇な代物だった。
しかも、一つ一つ。今展開されている魔法は5つ。

一つ解除する間に他が直撃してしまう。

（あ……終わったな……）

理解した。理解してしまった。悲しいことに。

解除は間に合わない。ならば・・・！

せめて防御だけでも、とでも考えたのか、剣夜は結構な魔力を使い、プロテクションを張る。

「無駄やで？そんな前面にしか張ってないシールド。」

「そうそう。だって・・・」

しかし黒化したふたりはそんなあがきを一蹴するかのように嗤う。まるで努力が無駄だと言うかのように。

「後ろから撃つんだもん。」

「なにっ!？」

思わず振り向いてしまったのを誰がとがめられようか。

首が取れるんじゃないか、と思うようなスピードで振り向いた剣夜。しかしそこには何もない。いまだに自分の世界にいるのは以外。

罨だ。そう気付いたときにはもう、二人の魔法が頭、両手両足に直撃して宙を舞っていた。

（あ・・・イーノ・ドゥーエ殲滅眼使えば良かったんだ・・・。）

そんなことを考えながら彼の意識は闇に沈んでいった。

第八話：サングラスよ永遠に 中中編（後書き）

すいません・・・あと一話で終わらせますので・・・

第九話：サングラスよ永遠に 終わり（前書き）

遅くなりました。 すんません。

第九話：サングラスよ永遠に 終わり

ふと、目が覚めた。

「あ…ぐう。…むう…。」

何でだろう？体中が痛い。ものっそい痛い。

しかし、ここは…。

やっぱりあそこだろうか？

そうなんだろう。何か薬臭いし。

四方が白い布で囲まれてるし。何なんだ。さっきまでの俺の身に何があったんだ。

「あ、目が覚めた？よかった。どう？どっか身体痛いとか無い？」

俺がこのよくわからない状況をどうにか理解しようとしていると、カーテンの隙間からシャルマルが顔をのぞかせた。

「ああ、シャルマルさん。大丈夫ですよ。どこも痛くないです。」

「そう？良かった。」

心底安心したような笑顔である。見てると癒されそうだ。ああ、そんなことより。

「シャルマルさん？俺が意識を失う前に、いつたいなにがあったんですか？全く憶えて無いんですけど。」

そう聞くと、なぜか答えづらそうな顔をされてしまった。何だ。俺の身に何があつたんだ。

「そのう・・・ね？世の中には、知らない方がいいことだってあるから、ね？」

「はあ。まあいいんですけどね？　なんか良からぬことが起こったぽいんで。」

「そうしてくれると助かるかな。うん。あはは・・・」

「ふう……。あ、シャマルさん、今は何時ですか？」

「今？え、つとね、14時だね。13日の。」

は？・・・今なんて言った？ジュウサンニチ？

「
・
・
・
^
つ
?
」

「へっ？て言われても・・・ほ？とでも返せばいいの？」

「いやそうじゃなくて。今日は11日はずじゃあ?」

「だって……剣夜くん、二日ほど寝てたわよ？」

[illegible]

「すつごいためたわね……。まあそれはおいといて、ホントよ？ たぶん疲れがたまってたんでしょね。まあ、ちよつとした休暇だ

「思ってなさい。」

「まじかよ……。あれ？イージスはどこ行きました？」

「イージスなら、昨日シャーリーが持つて行っただわよ？」

「シャーリーが？なんでまた……。」

「何か、前々から頼まれてたシステムが完成したから、それを搭載するー、とか言ってたわよ？」

「ああ……。ついにあのシステムが完成したか……。」

「よくわからないけど、すっごくすがすがしい笑顔だったわよ？」

「いえ、大丈夫です。俺から頼んでおいたことだったので。」

「そう？あ、そうそう。アルテミスの方の頼まれていたシステム、無事に搭載が終わった、とか言ってたわよ？」

「ああ、そうなんですか。了解です。……シャルさん？俺はもう帰っていいんですか？」

「うん。もう身体には異常はないから。もう部屋に戻って大丈夫だよ……。」

「そうですか。どうもありがとうございます。」

「はい。お大事にね……？」

とりあえずは何も異常が無いようなので、部屋に戻る。

ああ、あとでアルテミスのチェックもしておこう。

・・・あれ？ちよつと待てよ？三日間仕事やってなかったんだよね？もしかして・・・溜まつてる？

おいおいおいおいおい！やばいって！？ものすごいことになつてるよな！？はあ・・・どうしよう・・・。

と、言うわけで、オフィス、と言うか仕事場。

FW達もなのは達隊長陣も仕事中。・・・お。なのはと眼があつた。ん？立ち上がって、こっちに走ってきた。

「剣夜！？もう起きて大丈夫なの！？」

「ああ、悪かったな？心配かけて。もう大丈夫だ。」

「よかった。心配したんだよ？」

「ごめんって。今度なんかおごってやるから。」

「ふえ？本当？約束だよ？」

「ああ、約束な？」

そう言うのと、なのはは花が咲いたような笑顔を見せてくれた。ああ、癒される・・・。

・・・ん？なんかよくわからない気配が二つ・・・。

ああ、フェイトとはやてか。

「おーい、二人とも？そんなところで申し訳しないで、こっちに来たらどうだ？」

言つと、ゆつくりとこちらにでてきたフェイトとはやて。

「その…、剣夜、ごめんね？まさか…」

「まさか2日も寝込むとは思わんかったんや！」

「なんだ。そんなことか？全然大丈夫だぞ？むしろいい休暇になった。」

「それならいいんやけど…。」

「でも、なんかしつくり来ないんだよね…」

はあ、全くこいつらは何というか、義理堅いと言つか、何というか…

「なら、さ。今度メシおごってくれよ。ならいいだろ？」

「それなら、まあ…」

「せやね。まってるや？フェイトちゃんと一緒に、めっちゃ美味いお店探したるから。」

「はは、楽しみにしとくよ。」

…ああ、はやて？」

「うん？どうしたん？」

「午後から、訓練スペース使わせてくれないか？」

「いいけど、なんでまた？」

「アルテミスの新しいモードが完成したんだよ。その動作確認に、
ね。」

「アルテミスの！？ねえ、見に行つていい！？」

何かフェイトがめっさ食いついてきた。目が輝いてる。

「いいけど、多分つまらないぞ？見るなら来週出来るイージスのシステムのほうが…」

「いいの！そんなことはどうでもいいの！行つていいんだね！？」

「大丈夫だがフェイト、気付け。顔が近い。」

キスまであと数センチ、と言うところまで近寄ってきてる。
危ない危ない。

「ふえ！？いや、あの、そのこれは違うんだよ！？ね！？」

顔真っ赤にして両手振り回しながら言つても説得力皆無だぞ？言わないけど。

「わかつたわかつた。じゃあ、2時な？仕事もあるだろうし。」

「わかつた！絶対行くからね！」

「わかつたわかつた。ほら、まだ仕事残ってるんだろ？」

「ああ、うん！」

パタパタと自分の席に走って戻っていく。

「んじゃ、はやて。午後から頼んだわ。」

「りょくかい。ほなな。」

「あんがとな〜。」

声をかけると、ひらひらと手を振りながら去っていく。
…ちよつと格好いいと思ったのは秘密だ。

時は過ぎ、訓練スペース。
約束通りフェイトがいる。
それはいい。だが…

「なんで全員いるんだ？」

そう。戦闘員が全員いるのだ。

「まあええやんけ。みんなみたいんよ。」

「見せ物じゃないんだが…」

「まあまあ。私たちのことは気にしないで、思いつきりやっちゃって？」

「はあ…まあいいや。アルテミス、セットアップ。」

《了解。セットアップ!》

光が収まると、いつものアーチャーの外套を白くしたバリアジャケット姿の俺。

手には鋼氷大剣。

いいじゃんモンハン! 格好いいじゃん! …落ち着こう。

「アルテミス。行けるな?」

《当然!》

「よし。アルテミス! レストレーション!」

《了解! レストレーション!》

起動キーを口にすると、手にした大剣の刃がほどけていく。バラバラとほどけていき、遂には柄から先がなくなった。…いや。なくなった「様に見える」だけなんだけどね?

まあそれは置いといて。

おお、みんな驚いてるな。それもそうか。剣がなくなったんだからね。

…とりあえず、だ。

「なのは〜ガジェット五体だしちよくれ〜」

「へ?…あ、うん!」

なのはがモニターを操作すると、俺の前に見慣れたなめらかボデー

のガジェットさんが。

「アルテミス、展開終わった？」

《とつくの昔に》

「よし。んじゃやりますか。…繰弦曲・雨垂れ！」

とたん、自由に飛び回っていたガジェットの動きが止まる。
凍り付いたように止まる。
そして…。

ズル……ゴトン！

一体が斜めに両断されて、落ちる。
その衝撃を皮切りに、残ったガジェットにも変化が起こる。
斬！と言う音が聞こえてきそうな具合に、次々と切り裂かれていく。
一瞬の後には、サイコロサイズにまで細断されたガジェット達の残骸が残るだけの状況に変わっていた。

『はっ！？』

外野がうるさい。それもそうか。一瞬でガジェットを切り刻んだんだ。驚かない方がおかしい。

「け、剣夜さん？今、何が？」
スバルが震える声で聞いてきた。

「何って…斬ったんだよ。」

何を当然のことを、とでも言うように言つてのけると、ティアナから反論された。

「でも、刃が無いじゃないですか!」

「ああ、そう言うことか。納得。」

「納得。つて…剣夜? 何したん?」

「ああ、みんなには『視えて』無いんだろう? 魔力でキツめに眼を強化してみる。柄から何か無数の細い糸みたいなものが延びてるだろ? これで斬つたんだよ。」

「確かに…」

「なんとなく、だけど。」

「なんや薄く光ってるもんが…」

「あたしは見えたぞ!」

「神裂の言う通りだ。確かに糸が見える。」

隊長陣は見えたか。fw達は…

『?』

見えてない、と。

「まあいいつか。ネタばらしすると、ワイヤーだよ。俺は鋼糸って

よんでるけどな。これに魔力を流して、自分の手足の延長のように操る。魔力を込めれば込めるほど切れ味も良くなるすぐれもの。」

まあ、実戦じゃあ威力が高すぎてこいつらの出番がなくなるから、あくまでも切り札感覚だけだな。

「ワイヤー……ですか？そんな細いもので、大丈夫なんですか？」

「スバル、そんなに強度が心配なら、これの上に立ってみる。前と後ろで真つ二つに……。」

「……ひいつー!!」「……」

「……は冗談だけど、それぐらいの強度はある。真面目にな。ガジェットなんか屁でもない。」

すごいおびえられた。ちょっとショック。

「んじゃ、隊舎に戻るぞ。お前ら全員午後からデスクだろうっ?。」

「そうだね。皆々帰るよ。」

『はい!』

いいへんじだ。なのはの日頃からのちょうきょ……訓練の賜物たまものだな。

「剣夜?なんか変なこと考えてない?」

「いえそんな滅相もない!」

「・・・そう？なんか急にいやな予感したんだけど・・・」

怖ーーーーーーーーー！！ニユータイプですか！？やべえめっちゃこええ・・・

これからはなのはの前で変なことは考えないようにしよう、うんそうしよう。

人間の進化の余地を垣間見たお昼時であった。

おまけ

「あ、そうそう。はやてちゃんから、剣夜にこれ渡してって。はい。」

「おお。・・・なんだこれ？手紙？何々・・・？」

倒れてるからって仕事の量が減ると思うなよ！ byはやて

・・・あんのタヌキ・・・！フルボッコタイムいつか模擬戦に引きずり込んでやる・・・！」

「あはは・・・まあ、がんばってね？」

「はあ・・・鬱だ、寝よう。仕事終わらせてから。」

ちなみに仕事はものすごい勢いでつみあがってました。orz3。

第九話：サングラスよ永遠に 終わり（後書き）

おまけ　くもしアルテミスの新システムがあれだったらく

「アルテミス！」

了解！

光がおさまると、そこには革ジャンに身を包み、黒いサングラスをかけたおっさん・・・つまりはシュワちゃんがショットガンを持って立っていた。

「お前がジョン・コナーか？」

とりあえずなのはに話しかけてみる。

・・・返事がない。何故？

「あ、あはははははは・・・（泣）」

・・・泣いてるよ。

なんぞこれ

第十話：あたらしい ぶき をてにいれた！（前書き）

やっとファーストアラートまで持って行けた・・・
長かった・・・（涙）

第十話：あたらしい ぶき をてにいった！

ざ・わーるど！時よとまれ！

どうも神裂剣夜です。あまりの仕事の多さに俺のまわりだけ時間の流れをいじって他の人が見たら超速でこなしています。

ん？なんでライトニングの書類がここにあるんだ？思わず全部やりやっただじゃないか。

・・・さてよ？この書類・・・ロングアーチのじゃないか？why？なぜに？まあやるけどさ。たぶんはやてが回してきたんだろう。

フウ・・・

カチャカチャ・・・

ピクッ（ライトニングの書類発見）

カチャカチャカチャカチャ・・・

ピクッ（ロングアーチの書類発見）

カチャカチャカチャカチャカチャカチャ・・・

ピクピクッ（ライトニング&ロングアーチの（ry）

ガチャガチャ・・・

ピキッ（ライトニング&ロングアーチ&スターズの以下略）

ガチャガチャガチャガチャ・・・！

ブチッ（ライト以下略）

バン！（机をたたく音）

ガタッ

ツカツカツカツカ・・・

バタン！

「テメー等自分の仕事俺に押し付けてんじゃねー！」

部隊長室の扉を蹴り開けて叫ぶ今の俺の魂のシャウト。

「ッ！うるさいぞ神裂！何をそんなにいきり立ってるんだ。」

「あれ？シグナム？タヌキは？」

しかし目的の茶色いのはおらず、いたのはティータイム中だったと思わしきシグナムだけ。

「主はやてなら聖王教会だぞ？」

「あ、そうなの？なんだ・・・これはじつくりと計画を練れ、という神のお告げだな。ヨカッタナハヤテ・・・猶予が出来たぞ・・・。」

「よくわからんが、殺してくれるなよ？」

「ダイジョウブサ・・・シヌヨリツライオモイヲサセテヤル・・・
ウケケケケケケケケケケ・・・」

「あゝその、なんだ。何をされた？」

「・・・・・・・・」

「おい、神裂？」

「・・・・・・・・」

「神裂？」

「・・・てに・・・・・・・・られた・・・。」

「？」

「はやてに、六課内の書類全部押し付けられた・・・」

「それは・・・。」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「その、なんだ、元気出せ。な？」

「うん・・・」

すっごい同情の眼で見られた。はあ・・・。

『剣夜君？今大丈夫？』

「シャーリーか。大丈夫だが？」

『よかった。イージスちゃんのシステムが出来上がったから、よかったらデバイスルームに来てくれない？』

「了解。」

要件を伝えるとシャーリーは通信を切った。それにしても、だ。

「もうできたのか・・・さすがシャーリー。悪かったなシグナム。邪魔した。」

「いや、大丈夫だ。」

「んじゃ。」

「ああ。」

部隊長室からで、一路、デバイスルームに急ぐ。
テンション上がってきたー！

「で、ね？00タイプは、機体はできたんだけど、オプションパーツはまだだから、あんまり無茶はしないでね？」

「わかった。・・・だが、他の、特にVFは変形までできるんだろ
う?。」

「頑張ったもの、それぐらいは当然よ。」

「さっすが六課自慢のデバイスマスター!」

「ほめて!もつと私をほめて!」

「・・・と、まあ冗談はこのぐらいにして。ありがとなシャーリ。
これで完全な状態で戦える。」

「このくらいは当然よ。あの子たちのデバイスを作るのにもいい参
考になったし。」

「そう言ってもらえると助かる。」

ブシュ

「失礼しまゝす・・・って、剣夜さん?」

「おう。どうしたスバル。」

スバルが入ってきた。

「いえ。なのはさんから、新しいデバイスを貰いに行けって言わ
れて...みんなで。」

スバルが後ろを向くと、残りの三人が入ってくる。

「ああ、成る程。新しいデバイスに切り換えるのか。うん、時期的に丁度いいな。」

「あ、みんなちょっと待っててね？今出すから。」

そう言いながら机の下に潜るシャーリー。

「あつたあつた。はい、こっちの机にスバルとティアナ。向こうにエリオとキャロね。」

あれ？机の下にあるんじゃないの？なんでもうそこにあるの？あたかも初めからそこにあつたかのように浮かんでるの？

思わずシャーリーを見ると、禁則事項です 的な笑顔でスルーされた。

…シャーリー…やりおるわ。

「凄い…」

「これが、私達の…」

「新、デバイス？」

「そうです！」

説明に入るからか、シャーリーの顔が輝いてる。

「設計主任私、協力、なのはさん、フェイトさん、剣夜さん、レイ

ジングハートさん！」

「はあ・・・」

協力に俺が呼ばれた時、微妙に四人の視線がこちらに向いた。

「面白半分に改造なんてしてねーよ、安心しろ。」

「いえ、そんな！」

「疑ってなんていませんよ！ね！ティア！」

「ええ！そうですよ！」

「ホントか？かなり視線が怪しかったぞ？」

『あはは・・・』

なんか俺が邪魔みたいなので、部屋の隅に移動する。

・・・べ、別に悔しくなんか無いんだからねっ！

・・・おえっ。やるんじゃないかった。

「ストラーダとケリユケイオンは、変化無し・・・かな？」

俺が一人ツンデレに気持ち悪く（自業自得）なっていると、エリオが話を進めていた。

「そうなのかな・・・？」

「ちがいまゝす！」

リンが俺の頭からエリオの頭にダイブしながら、エリオの言葉を否定する。

え？俺？驚かないのかって？だってリンのヤツ、俺の頭に隠れて「静かにお願いしますね」「言って来たんだぞ？驚くわけ無いじゃん。」

「変化無しは外見だけですよ？」

「リンさん！」

「はいですう！」

当の本人はというと、そんなことはお構いなしに話を進めていた。

「二人はちゃんとしたデバイスの使用経験は無かったですから、感触に慣れてもらうためにも、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです。」

「あ、あれで最低限！？」

お、エリオ、驚いてるな？まあそれもそうだろう。スバルやティアナと何ら変わらない動きが出来ていたのに、最低限なんて言われたらそりゃ驚くだろうさ。

「ホントに・・・？」

キヤロも信じ切れてないようだ。

「みんなが使うことになる四機は、六課の前線メンバーと、メカニ

ツクスタッフが技術と経験の粋を集めて完成させた最新型！部隊の目的に合わせて、また、エリオやキャロ、スバルにティア。個性に合わせて作られた、文句なしに最高の機体です。」

そこで言葉を切ると、四機のデバイスを宙に浮かべ、自分の手元に並べた後、それぞれの手元に送る。
すごいなあれ。どうやってんだ？こんど教えて貰おう。

「このコ達はみんな、まだ生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いがこめられて、いっぱい時間かけて、やっと完成したです。ただの武器や道具と思わないで、大切に。だけど、性能の限界まで思いっきり使ってあげて欲しいですう。」

「うん。この子達もね？きつと、それを望んでると思うから。」

「そういうこった。まあ、お前らの実力じゃ、今はまだ、壊すようなことはあんま無いと思うからよ。安心して振り回せ。」

「ごめんごめん。遅くなっちゃったね。あれ？剣夜？どうしたの？」

「おう、なのは？おれがここにいちやあ、いかんのかい？」

なのはが入って来た。やっと来たよ。

「ナイスタイミングです。ちょうどこれから、機能説明をしようかと。」

「そう？もうすぐに、つかえる状態なんだよね？」

「はいっ！」

あれ？無視っすか？

「まず、その子達みんな、何段階かに分けて、出力リミッターがかけられてるから。最初の段階じゃ、そこまで驚くほどの威力はでないから、まずは、その状態で扱いを憶えてみて？」

「で、各自が今の出力が扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、剣夜隊長。ラインや、シャーリーの判断で、解除してくから。」

「ちょうど、一緒にレベルアップしていく感じですかね。」

「RPGみたいにな。レベルはでないけどな。」

「出力リミッターっていうと、なのはさん達にも、かかってますよね？」

「ああ・・・私たちはデバイスだけじゃなくて、本人にもかかってるけどね。」

『ええっ！？』

「リミッターが、ですか？」

「能力限定って言うてね？うちの隊長と副隊長はみんなだよ？私とフェイト隊長。シグナム副隊長とヴィータ副隊長。」

「はやてちゃんもですね。」

「うん。」

「あれ？剣夜さんは、かかってないんですか？」

エリオが違和感に気づく。

そうそう。俺は何でだかりミッターがかけられてない。なぜだ？

「剣夜は特別。あまりにも魔力が大きすぎるから、リミッターを最大でかけても、SSS+程度のランクまでしかかからないんだ。」

「それで、二年前から管理局に、『能力限定には神裂剣夜は含まない。』っていう風に、お触れが出たんだよ。」

「は？おいおい、ちょっと待て。初耳だぞ？俺にリミッターがかかってないのか？」

「うん。あれ？言ってなかったっけ？デバイスにしかかかってないよ、って。」

「聞いてない………たぶん。」

「憶えて無かったんじゃない？そのとき、すごい眠そうだったもん。」

「ああ………。そういうオチか……。」

よくわかった。ついでに今更ながらチートを実感した。

「リミッターがかからないって……. どんだけ規格外なんですか……。」

む？ティアナがあきれている。なんかあったんだろうか。

「で、話を続けるよ？」

「ああ、悪いな、遮って。」

「じゃあ・・・」

そこでシャーリーは咳払いをひとつして、口を開く。

「新型も、みんなの訓練データを元にしてるから、いきなり使っても、違和感は無いと思うんだけどね。」

「ま、慣熟を済ましてからの方が、いいっちゃいいんだがな。」

「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか。」

「遠隔調整も出来ますから、手間はほとんどかからないと思いますよ？」

「うーん。便利だね、最近は。」

「便利ですう！」

「なのは。それは年寄りの台詞だ。」

俺の突っ込みに、わずかに笑いが起こる。

「あ、そうそう。スバルの方は、リボルバーナックルとのシンクロ

機能もつけといたから。」

「え、ホントですか!?!」

「持ち運びが楽になるように、収納機能もつけといた。」

「ありがとうございます!」

「あれ重かったもんな。かさばるし。」

「ええ、まあ。でも、これでもう大丈夫ですよ!」

「わかんないぞ? 案外、重さはそのまんまだったりしてな。」

「それはないですよ」

ALERT! ALERT! ALERT! ALERT!

そんなのんびりした空気を破るかのように、アラートが響く。

「このアラートって・・・」

「一級警戒態勢!?!」

「「グリフィス(君)!」」

なのはと声がかぶる。

すぐに、グリフィスから通信が来た。

『はい! 聖王協会から、出勤要請です!』

協会から？何かあったのか？

『なのは隊長、フェイト隊長、剣夜総隊長、グリフィス君！こちらはやて。』

絶妙のタイミングではやてから通信が入った。

「うん。」

「何があった？」

『協会の騎士団の調査部で追ってた、レリックらしき反応が見つかった。場所は、エーリム山岳丘陵地区。対象は、山岳リニアレールで移動中。』

『移動中！？それって、まさか・・・』

同じくつながっているフェイトから、驚きの声上がる。

『そのまさかや。内部に侵入したガジェットのおかげで、リニアレールは暴走中。車両の制御も奪われてる。』

つげられたのは、最悪に近い情報。

「はやて。そのなかに、乗客は？」

とりあえず、目下の案件を聞いてみる。

『それは大丈夫や。貨物列車やったから、けが人は0。』

「ああ、それなら思う存分暴れられる。」

俺たちが一般人を傷つける訳にはいけないからな。

『いきなりハードな初出勤や。みんな、いけるか?』

『私はいつでも。』

「私も。」

「俺もだ。試したいものがあるんでな。」

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。みんなもオツケーか?』

「……はいつ!」

四人から、若干の緊張を持った声が上がる。この程度の緊張なら、問題無いだろう。

『いい返事や。シフトはA-3。グリフィス君は隊舎での指揮。リンは現場管制!』

『はいつ!』

『なのはちゃん、フェイトちゃん、剣夜は現場指揮。』

「……了解!」

『ほんなら……機動六課フォワード陣、出動!』

「「「「「はいっ!」「」「」

「了解。」

『了解。みんなは先行して。私もすぐに追いつく。』

「さうで、行くか!」

「「「「はい!」「」「」

フォワード陣の初陣。色々不安もあるが、まあ大丈夫だろう。

第十一話：変形は男のマロン・・・じゃないや、ロマンです（前書き）

今回、かなり剣夜君がはっちゃけてます。

これもこの小説のためだ！と言ったら、喜んで自分の身を差し出してくれました。

では、そのはっちゃけぶりをご確認ください。

第十一話：変形は男のマロン・・・じゃないや、ロマンです

リニアレールへと向かうヘリの中。FW陣はいすに座り、俺となのは天井の取手に掴まり、身を屈めながら立っている状況。

『なのはさん、剣夜さん！空からガジェット反応です！』

シャーリーから通信が入る。

「数は？」

『およそ50～60。・・・やれますか？』

「当然。な？なのは。なのはとフェイト、そこに俺が入ったチームで、対応できなかった事件は一つを除いて、無かったよな？」

俺がどんな顔をしているのかは解らないが、おそらくは自信に満ちあふれた顔をしているのだろう。

「うん。大丈夫だよ。・・・ヴァイス君！私も出撃^でるよ。剣夜隊長とフェイト隊長の三人で空を抑える。」

なのはがパイロットのヴァイスに声をかける。因みにこのヴァイスという男、俺のことをアニキと呼んで慕ってくるのだが・・・まあそれは置いておこう。

「ウツス、なのはさん。お願いします。」

《mein hatch open》

ヴァイスの言葉と共に、ハッチが開かれる。

「じゃ、ちょっと行ってくるよ。みんなも頑張つて、ズバツとやつつけちゃおう!」

「やつつける、はどうかと思うけどな。ま、怪我すんなよ?明日の訓練に響く。」

「」「」「はい!」「」「」

うん、いい返事だ。・・・三人は、だが。

(なのは。キャラの様子がおかしい。悪いけど、頼んだ。先に出撃^でてるぜ?)

(うん、了解。すぐに追いつくから、出たところで待ってて?)

(あいよ。)

とりあえずなのはに任せておく。あいつは子供の扱いも上手いから大丈夫だろう。

「ヴァイス!ヒヨッコ達は頼んだぞ!」

「任しといてくださいアニキ!」

「よし。・・・神裂剣夜、出撃^でるぞ!」

ヴァイスに一言言ってから飛び降りる。うひょー!この感覚がきも

ちEー！

「イージス、アルテミス。セットアップ！」

《《了解！スタンバイレディ、セットアップ！》》

いつものバリアジャケットに身を包み、さらにイージスのシステムを開始すべく宙に浮いた状態で起動キーを口にする。

「イージス、モードVF-25F。ファイターモード。」

《了解。モードVF-25F。ファイターモード！》

口にしたらたん、身体が組み変わるようなみよんな・・・じゃない。妙な感覚がした。

光が収まると、完全に俺の身体は機械のようになっていた。

「オオ、スゲエ。ホントニバルキリーダヨ。」

声も機械的な音声に変わっていた。

ここまでのやりとりと機体番号でおわかりの人もあるだろうが、今の俺はかのマクロスFに登場する可変戦闘機、VF-25F、通称メサイアへと変身していた。

・・・はい、完全に俺の趣味です。あ！やめて！石投げないで！その手に持った熱いパトスを振り下ろさないで！説教なら受けるから！

「剣夜・・・だよね？行くよ！もうそこまでガジェットが来てる！」

おっと、なのはが降りてきた。

「ワルイワルイ。ンジャ、イキマスカ！」

言っと、なぜかなのはがよくわからない顔をしていた。どうしたんだ？

「ドウシタ、ナノハ？ドツカイタイノカ？ハラカ？ハラガイタイノカ？」

「・・・その機械音声、何とかならない？」

「ダツテサ、イージス。ドウダ？」

《む？主、やめてしまふんですか？なかなかいいと思ったのですが・・・》

「キャツカダ。ホラ、モトニモドセ。」

《むう・・・了解。》

一瞬、喉らへんが光ったような気がした。
なぜ、ようなくなんて曖昧な表現なんだ、って？
だって今戦闘機形態だぜ？確認しようが無いじゃん。

「よし、声も戻ったところで、今度こそ行くぞ！ついてこい！なのは！」

「うん！」

足のバーニアを噴かし、加速しつつガジェットに向かう。
やっべ。あの神機動を再現できるなんて！テンションあがってきた

ー！

「はっはー！レッツ、パァリイイイイ！」

「剣夜！真面目にやって！」

なのはに怒られた。うん、自重しよう。

「こっちの空域は、三人で抑える。新人達の方、フォローお願い！」

『了解！』

（同じ空を三人で飛ぶのは久しぶりだね、フェイトちゃん、剣夜。）

（うん、なのは。・・・で、そっちの飛行機は、剣夜でいいんだよ・
・ね？）

（そーだぞー。これがイージスの新しいシステム。以後よろしく。）

（・・・まあいいや。さ、行くよ！）

フェイトにまであきれたっぽい。なぜに？

「っ！」

念話を切ったとたん、ガジェット達が一斉にビームを撃ってきた。

だが甘い！東方で培った俺の弾幕回避スキル、なめるでないわ！
弾と弾の隙間を縫うように飛び、人型 バトロイドへと変形。
右手にマウントされたガンポッドをガジェットに向け、トリガーを
引く。

ドガガガガガガガガ！と、およそ外見とはかけ離れた
音が響き、射線上にいたガジェットを三機、粉砕する。
隣と上を見れば、なのはとフェイトがそれぞれ二機撃墜していた。
・・・フェイト、パンツ見えてるぞ。俺たち以外にいないからい
いけど。

ともかく、これで十機は墜ちた。さて、システム確認と行かせて貰
おうか！

「イージス、フルロックオン！」

《了解。フルロックオン！ハッチオープン、頭部機銃発射用意、ミ
サイル発射用意！》

「おおおおおお、らあっ！」

《ファイア！》

イージスの声と共に放つのは、魔力で造られた武装。

48ものミサイル（似せてるだけの誘導弾）、頭部の角っばいここ
ろから撃たれる二本のレーザー。

そして、両手で抱えたガンポッドからばらまかれる、暴力的なまで
の魔力弾の波。

雨あられ。まさにその表現が当てはまるような攻撃に、次々とガジ
エットが爆散してゆく。

「はっはっはっはっは！どうだ！六課の技術は世界一！・・・
ふう。イージス。モード00だ。一気に決める。」

《了解。ですが主、『アレ』はまだ使えませんか？》

「大丈夫だ、問題無い。」

《了解。モード00。解放します。》

今度の光は蒼だった。光が晴れると、白と蒼をベースにし、全体的にシャープなイメージを持たせるような構造をした、これまた完全にパクリなMSモビルスーツになっていた。

・・・ダブルオーガンダムですがなにか？

《GNドライブ起動！ツインドライブ、安定領域に到達。・・・い
けます！》

「ダブルオーガンダム、神裂剣夜、目標を駆逐する！」

一度は言ってみたかったこの台詞！この興奮をどうしよう！・・・
そうだ！ガジェットにぶつけよう！（いい迷惑）

と、言うわけで。さっきの全弾発射や、なのはとフェイとからの猛
攻から運良く逃げ回っていた五機のガジェットに向けて両手に持っ
たGNソード？を向けて一言言った後に突っ込んでいく。

「貴様等のその歪み（ボディーの丸さ）、この俺が断ち切る！」

ガジェットは後ろを向いて、逃げようとしていたようだが、無駄無
駄ア！

すぐに追いついて、左右のソードを広げるように薙ぐ。

「戦いの途中で後ろを向くとは・・・ナンセンスだな!」

その勢いのまま、両手を下に振り抜く。

ガジェットの装甲をバターのように斬る感触が手に伝わってきて、目の前のガジェットと後ろの二機は爆発した。

「ライフルモード! ファイア!」

《ライフルモード、ファイア!》

切っ先を残りの二機に向け、さらに攻撃を加えようとイージスに指示を出す。

GNソード?の刃が180°回転し、ライフルモードに変形する。付け根から二条のビームが放たれ、ガジェットを貫いて空に駆け上がっていく。

「アルテミス! 後何機残ってる!?!」

《残り18機!》

「了解。イージス、モードセラヴィーだ。」

《了解。モードセラヴィー!。》

今度のモードはセラヴィーガンダム。変身が終わると同時に、両手のGNバズーカ?を肩の上にあるGNキャノン?に接続、粒子供給を開始する。

《チャージ78%・・・85・・・98・・・100%！チャージ完了！撃てます！》

すでに銃口には溢れんばかりのクリスタルシルバーの魔力光が溜まっている。

あとはこれを解き放つだけだ。

「ツインバズーカ・・・バーストモード！」

《ファイア！》

両手のトリガーを同時に押し込む。瞬間、身長の三倍はあろうかと言っ程の極太ビームがすべてのガジェットを飲み込み、爆発さえ許さずに溶解させる。

「・・・ガジェット反応無し。鎮圧完了。」

「ねえ、なのは。私たちがやってきた事って・・・なんだったんだろうね。」

「フェイトちゃん・・・言っちゃだめだよ。むなしくなるから。」

『車両内、および上空のガジェット反応、すべて消滅！』

『スターズF、レリックを無事確保！』

『車両のコントロールも取り戻したですよ！今止めま〜す！』

『・・・ああ、ほんならちようどええ。スターズの三人とリインは、ヘリで回収して貰って、そのまま、中央のラボまでレリックの護送

をお願いしよかな。』

はやてたちから、次々に通信が入る。そのどれもが良い知らせで、とりあえずは安心する。

『ライトニングはどうします?』

『現場待機。現地の職員に、事後処理の引き継ぎ。よろしくな?』

「はやて〜。俺はどうする?」

そのまま通信が切られそうだったので、あわててはやてに指示を仰ぐ。

するとはやては少し考えてから、

『なら、剣夜には外からへりを護衛してもらおかな?さっきの飛行機なら余裕やろ?』

なんてことをのたまってきた。冗談じゃない!

「おいおい・・・いくら何でもそんなことはホントにやらせないよな?」

一縷の望みをかけて聞いてみるが、返ってきたのはイイ笑顔と、

『部隊長命令や』

という、無慈悲な言葉。

あれ?何でだろう・・・眼から汗がとまらないや・・・あはは・・・

現実是非情です。そんなことを考えながら必死にへりを追いかける。

「ヴァイス！てめえここぞとばかりにスピード出してんじゃねえ！」

俺の平穩は、まだ先のようだった。

第十一話：変形は男のマロン・・・じゃないや、ロマンです（後書き）

・・・はい。完全にパクリました。特にグラハムさんのセリフを。

いいじゃんいいじゃん！かつこいいじゃんグラハムさん！ついでにダブルオーガンダム！

ああ、バルキリーも忘れてないよ？うん。お前もかつこいいさ。ほら、元気出せよ。

なんだこれ？

第十二話：青天の霹靂（前書き）

遅くなりました、更新です。

第十二話：青天の霹靂

色々と内容の濃かった初出勤から数日。

フォワード達の訓練も、今日から個人練習へと切り替わる、らしい。そのはずなんだが・・・

「んじゃ、個人訓練を始める前に、一回剣夜隊長と模擬戦、やってみようか？」

なんてことを朝一番になのはが言ってくれちゃったため、今フォワード陣はむこうで固まって作戦会議中。

たまにこちらをちらちらと見つつ、なにやら真剣に話し合っている。俺としては、そこまで真剣に話さなくてもなく、なんて思ってしまうのだが、どうも彼らは違うらしい。

・・・日頃の恨みか？ありそうで怖い。ま、まあ確かに訓練メニューは俺となのはで考えているんだが、そんなことをする奴らじゃ無いと思うのでこの考えは置いておこう。

というか、だ。最近使っていない俺の複写眼なら、アルファステイグマティアナの使う幻

影を見抜けるんだが、今回は一方的にたたきのめしてはいけないそうなので、なのはからイージスの機械兵共々封印指定された。

・・・畜生。ちょっと悔しい・・・でも戦っちゃう！ビクンビクン！

お。どうやら作戦会議は終わったようだ。こっちに歩いてくる。

「大丈夫か？んじゃ、始めるぞ？なのはくカウントたのんだ。」

・・・ヤヴァイ。あいつ等眼が座ってる。ありゃあ何が何でも勝ちに来る眼だ。

そんなににらまないで！心は硝子なんだから！
……ないな。うん、ない。

俺がセルフで気持ち悪くなっていると、なのはから声をかけられた。

「剣夜？ほどほどに頑張つてね？」

み・な・ぎ・つて・きたー！

なのはから応援されたおかげで、俺のやる気は急上昇さ！

……まあ、急上昇してもそんなに変わらないんだが。

だって、口ではこんなこと言ってるけど、たのしみなんだ、俺も。

こいつ等が今の段階で一応は管理局最強と言われている俺にどこまで食らいついていけるのか。

考えただけで楽しみだ。

「両方とも準備オツケー？じゃあ、はじめよ？ レディー……
ゴー！」

「アルテミス！」

「マツハキャリバー！」

「クロスミラージュ！」

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「……セーット、アップ！」

なのはが手を振り下ろし、全員がセツトアップを終えると同時に、かねてより言ってみたかったセリフを言ってみる。

「ゆくぞ新人ども・・・魔力の貯蔵は十分か？」

side ティアナ・ランスター

「ゆくぞ新人ども・・・魔力の貯蔵は十分か？」

剣夜隊長がそういった途端、ものすごい魔力が隊長から吹き出してきた。

魔力量が大きすぎて、半分実体化してる。背中から、隊長の魔力光のクリスタルシルバーの翼が生えているかのように見える。
・・・まずいわね。勝てる気がしない。でも・・・！

「やるだけやるわよ！クロスシフト、S-24！」

「「はい！」」

「おう！」

スバル・・・その返事はどうかと思うわよ？

「なら、早速行こうかね？」

剣夜隊長がそつつぶやく。右手に持っている、常人には持てないんじゃないか、と思うほどの大剣を上に掲げる。

膨大な魔力が集まっていくのが解る。アレを食らったらただじゃ済

まない。ここはまず・・・

「散会して、体勢を立て直すわよ！ほら、早く！」

「フレイム・・・スラッシャー！」

飛び退いた横を、炎の斬撃が飛んでいく。

・・・でたらめだ。何で斬撃が飛んでくんだ。訳がわからない。

一端森の中に隠れる。カートリッジを二発ロード。

11発の魔力弾を作り、木の陰から飛び出す。

・・・何で構えもしないで、あっちこっちを見てるんだろう。

あ、こっちに気がついた。

よし、計算通り！引つかかってくれた。

（スバル！シルエット出すから、一緒に突っ込んで！）

（了解！）

フェイクシルエットを、四方から剣夜隊長に向かって伸びたウイングロードの上に出す。

なるべくスバルと同じような動きをするように、気をつけて操作する。

「クロスファイア・・・シュート！」

11の誘導弾を一斉に放つ。これなら、少しは足止めできるはず・・・！

「ぶうつうつうつうるあああああああ！」

と、思った一瞬後、剣夜隊長が大剣を振り回す。その動作だけで、スバルのウィングロードとあたしのクロスファイアが一気に消される。

大剣振るだけで魔法を消すなんて聞いたことがない。というか、あり得ない。

（エリオ、キャロにブーストかけて貰って、四人で一斉に攻撃するわよ！）

（（（了解！）））

指示を出した後、カートリッジを三つロードする。

「クロスファイアー……」

「一閃、必中！」

「リボルバー……」

「ブラストレイ……」

「おお、一斉に攻撃してくる訳か！よっしゃ、来いや！全部受け止めてやらあ！」

剣夜隊長が吠える。そんな余裕も、今のうちですよ！

side off

side 剣夜

「なら、早速行こうかね？」

その言葉と共に、普段抑えてる魔力の5%を解放してみる。

おーおー、顔が引きつってるよ。やり過ぎたかね？まあいいや。

「フレイム・・・スラッシャー！」

月牙なんとか的なノリで炎に変換した魔力を飛ばす。

もちろん直撃はさせない。

少し手前に着弾させ、煙で姿を隠すのが狙いだ。

ズバアアアアアン！

狙い…だ…

手前に着弾させるはずだった斬撃は、何を間違えたのか地面じゃなく、そのまま直進していった。

フォワード達の間を通り、どっかにぶつかって消えた。

あれ？みんながいない。隠れたのか？

「はあああああああ！」

四方からスバルのウイングロードが延びる。

…ほう。シルエットも混じった…っていうか、全部シルエットか？
なら消してもいいよな？うん、大丈夫だ、問題ない。

「ぶつうううううあああああああ！」

と言うわけで、右手の鋼氷大剣を振り回す。

もちろん魔力を纏わせて。

スバルのシルエットとウイングロードを切り裂く…と言うより引き
ちぎる。

「クロスファイアー…シュート！」

ティアナのクロスファイアが11発、こっちに飛んでくる。

だが、まだ誘導のツメが甘い。じつくりと見れば、弾幕に穴がある
のがわかる。

その穴をすり抜けつつ、大剣を振るい、クロスファイアをかき消す。

「リボルバー…」

「クロスファイア…」

「一閃…」

「ブラストレイ…」

何もして来ない、と思ったら、さっきのクロスファイアはどうやら

俺の足止め目的だったらしい。

それを囫にしてい、一斉攻撃の為のチャージ時間にしたんだろう。ふむ、戦術としては間違っていないだろう。

だが、それは自分とレベルが近い相手の場合だけだ。

……もしかして、俺の実力を確かめようとしたのか？

は、ははっ、ははははっ！

そうかそうか、試したか！俺を！

…舐められたモンだな、いやホント。

ここらで一度、思い知らせてやろうか？

……よし。ちよびつとだけ、トラウマにならない程度に、揉んでやろう。

そうと決まれば、話は早い。

「おお、一斉に攻撃してくる訳か！よっしゃ、来いや！全部受け止めてやらあ！」

吠える。声に剋を混ぜて。

剋とは、某レギオスの世界で武芸者達が使うエネルギーだ。

本当は体に新しい、剋脈と呼ばれる器官が無いと使えないんだが、そこはこのチートボディ。そんな事は関係ない。

「アルテミス、コードボウ。」

《了解、コードボウ。変形します。》

アルテミスを変形させるためのコードを口にする。

手の中の大剣が、一度球体に変わり、上下に細く伸びていく。ある程度まで伸びると、手に持つ部分の少し下に円形の何かがひろがり、そこから枝が伸びてく。

それだけの変化を一瞬で行い、今俺が構えているのはかの有名なモンスターハターに登場する、龍弓「日輪」になっていた。

すかさず、弦と矢を魔力で構成し、引き絞る。
狙いは上に。

イメージは、分裂する矢の雨。
引き絞る。

腰を落とし、真上に矢を向ける。

それと同時に、バリアジャケットにも変化が起こる。

上半身は、右の肩から左までを覆うプレートだけに。
下半身は袴のように。

弦を持つ右手は金属製のガントレットをつける。

スバルとエリオが突っ込んで来る。

ティアナとキャロ（ホントはフリード）の攻撃が迫る。

矢を放つ。

空に向かい一直線に突っ切り、ある高さで鏃やじりを下に向け、幾千もの
細い魔力矢へと分裂、4人に降り注ぐ。

とりあえず技名を叫ぶか。

えーっと？矢が雨のように降ってくるんだろう？

…そのまんまでいいか。よし。

「レインアロー！」

おお、4人共頑張ってるよ。

スバルは放つはずだった拳を、上に放つ。

エリオは槍を頭の上で回転させる。

ティアナはその場から飛び退きながらクロスファイアを放つ。
キャラはひたすらフリードにブラストレイを撃たせる。

（フリードの）健闘の結果、空を埋め尽くす程だった矢の数は、半分程にまで減った。

だが、レインアローは時間稼ぎでしかない。

「俺の事を忘れてないか!？」

上空にばかり意識が行き、俺への注意が疎かになる。

アルテミスをハリセンに変え、ティアナとキャラがいる場所へ走る。
一般人には見えないようなスピードで、だ。

「きゅくっ!？」

「あいたっ!」

「きゃあ!？」

спан! спан! спан!

一瞬で肉薄し、フリード、ティアナ、キャラの順番に頭を叩く。
いい音出すじゃありませんか。
「ティア!？」

「キヤロ!？」

驚くスバルとエリオの後ろへ移動。
2人の頭も叩く。

「…あれ？剣夜さん？」

「あつちにいたはずじゃ…？」

未だに自分等の状況がわかっていないような2人に、内心溜め息を吐きながら告げる。

「いつまでも一つの場所にいると思うか、バカ。移動するに決まってるだろ？」そう言っても、あまり反応は返ってこなかった。

「ほら、なのはが呼んでる。帰るぞ。」

とりあえず教導官の所に連れて行こう。
反省会はそれからだ。

第十三話：戦い終えて

死闘（笑）を繰り広げた新人達を隊長陣が待つ広場まで連れて行く。4人は今日から担当になる隊長・副隊長の下で何かコメントを貰っている。

ティアナはなのは、スバルはヴィータ、エリキャラはフェイト。ついでに言っと、フリードは俺の肩の上に留まってる。

なんか、あのハリセンの一撃で何かを感じたらしく、主人のキャラ口とは別に、俺に懐いてきた。

…まあ、害はないからいいんだけどね？

何というか、こう、キャラからの非難がましい視線が痛かった。

「まあ、細かい事はこれからの訓練で固めていこう?」

「はいっ!」

お。なのはのトコの反省会は終わったっぽいな。

それなら、別に独りぼっちでいる必要はない。

早速、なのはに近付いていく。

「剣夜~~~~~!」

「ぐわっはあ!」

声をかけようと息を吸ったら、いきなり鳩尾に頭からダイブしてきた。

お陰で溜めた息を全部吐き出しながら変な悲鳴を上げてしまった。

おかしい。普段のなのはなら、他の人の視線がある前でここまで積極的にはならないはず。

何かがおかしい。ここは一つ、冷静に朝から思い出してみよう。

……………うん、見事に何も無かった。

訓練が始まってからはどうだ？……………特に何も無かったはず。

じゃあ、何だ？

「あ、そうそう。イーギス返すね？」

下手すれば、このまま思考の深淵に潜り込んで現実逃避しようかと迷う俺に、抱き付いたままの超密着状態から、なのはがもぞもぞと動き、見慣れた銀の下金に金の宝石で龍が描かれた指輪を手渡してきた。

おまえか！

「…イーギス。今度はなのはに何を吹き込んだ？」

地を這うような低い声で、この状況を間接的に作り出したであろう存在に話し掛ける。

すると奴は金の龍の部分を点滅させながら、

《何。只単になのは嬢に、もう少し甘えてはどうか？と、助言しただけのことですよ。大して問題は無いでしょう？》

なんてことをのたまって来やがった。

「やっぱりお前が原因じゃないか！？しかもなんてことを助言して

くれるんだ！これでまた俺は
「

「剣夜！」

…セリフすら最後まで言わせてくれないのか。

「何でしょうか、なのはさん。」

今の俺は酷くやつれた顔をしているのだろう。
顔を見たティアナがドン引きしてる。

と、いきなり今まで抱きついていたなのはが体を離し、正面に回ってきて。

「今日は、一緒に寝よう？」

満面の笑みと共に、原爆に匹敵するほどの爆弾を投下した。

「いやいやいやいや。まあ落ち着け、な？」

即座に賛成したくなる心に向かってスターライトをブレイクしつつ、
せめてもの抵抗をする。

「駄目…なの？」

「いえ全くもってそんな事は御座いませんとも！はい！」

最後の砦は、上目遣い＋涙目の前に儚く崩れ去った。

「俺は…無力だ…」

地面に綺麗なor2のポーズを作る。

多分、横から見たらアルファベットが見えるだろう。

「剣夜？落ち込んでへんで、こっち来てくれへん？」

何分この体勢を維持していただろうか。

いつから来たのかわからないはやての言葉に顔を上げると、みんなは少し離れた所にいるはやての周りに集まっていた。

……教えてくれたって良いじゃないか、などと言う考えを頭を振って消し、小走りでみんなのところに向かう。

はやてがわざわざ出向くと言うことは、何かあったんだろうか。荒事じゃないといいな。

そんな事をかんがえながら。

「……で？部隊長自らどうしたんだ？」

合流して、早速はやてに問い掛ける。

緊急の用事なら通信で伝えるだろうから、そこまで急ぎの用事ではないのだろう。

そうなると、本当に真意が読めない。

何なんだろうか？

そんな事を考えながらはやての言葉を待つ。

するとはやては、とても嬉しそうな笑顔で隊長陣、特になのはとフエイトを見つつ理由を告げる。

「六課に出動要請が出たんよ。場所は第97管理外世界、通称地球

「！」

なるほど、ロストロギアでもあったか。

で、レリックかもしれない、つーことで六課に出動要請ね。
はいはい、納得。

「本当に？はやてちゃん。」

「ホントホント。ワタシウソツカナイ！」

「なんでカタコトなんだよ。」

спан！

とりあえず未だに手に持っているハリセンで突っ込む。

「ふ…剣夜。なかなか良いもん持つとるやないの！」

「はいはい。お前の話は後でな？んじゃ、新人共。一時間後にメイ
ンロビーに荷物持って集合な？隊長陣も、それでよろしく。」

なんか自分のターンに持って行こうとしたはやてを適当に受け流し、
全員に問い掛ける。

「別に、ちよつとぐらいは反応してくれたってええやんけ…」
落ち込むはやてはみんな無視して頷く。…あはれ、はやて。

「はやてゝ。飴いるか？」

とりあえず飴を目の前にさしだしてみる。

「誰が飴なんて……ってこれチュッパチャプス！？なんでミッドに

あるん!？」

「なんで…って、ミッドでは結構有名だぞ？」

なんかすんごい驚かれた。なんでさ。

「パクリヤン! 明らかなパクリヤン!！」

口ではそう言いながら、俺の手からチュッパチャプスを奪い取り、一瞬で包装を剥いて口に放りこむ。
うんうん。体は正直だ。

「んじゃ、俺も準備してくるからな。遅れるなよ? 『部隊長』。」

未だにチュッパチャプスをなめながらツッコミ続けるはやてを置いて、自室にテレポート。

え? レベル? 6ですが何か?

しかし、まあ。地球かあ… 土郎さんと桃子さん、元気かねえ?

第十三話：戦い終えて（後書き）

はい、すいません。

うまくサウンドステージに繋がるように、少し改ざんしました。あ
しからず。

第十四話：悪夢の始まり（要するにフラグ）（前書き）

遅くなった上に短いです。すみません。

第十四話：悪夢の始まり（要するにフラグ）

一時間後。

ロビーに全員が集まった。

「うし、全員集まったな？……リイン、座標教えてくれ。一気に転移する。」

「はいです！今アルテミスちゃんに送るですよ！」

「ん、頼む。」

アルテミスにデータが送られたのを確認して、モニタに出力する。

……ここつて、二年前に……。

「なあリイン。座標はここで『あつて』るのか？俺の記憶が正しいなら、ここは確か……」

「大丈夫。そこで間違えあらへんよ？」

はやてがニヤニヤしながら登場。

マジかよ。まさかよりもよってここなのかよ？

迷惑じゃないのか？……大丈夫そうだなあ。あの大きさなら。

「はあ……了解。諦めますか。」

おーい、みんな？あつつまれへえ！」

どっかの歌のお兄さん風に皆を呼ぶ。

「なんやねんそれ……あまりにもキャラにあってないわ。」

はやてがなんか言ってるけど無視。
この前に読み取った転移用の術式――（自分で改良済み）を発動させる。

「跳躍ぶぞ〜！荷物は手に持つとけよ？忘れていつても知らないぞ？」

全員が慌てて荷物を手に取る。うんうん。素直なのは大変よろしい。

全員定位置についたので、魔法を本格的に発動。
足元に複写眼の文様と同じ魔法陣を出現させる。
因みに、俺の魔法陣は基本的にすべてこの魔法陣になっている。理由は知らん。

「準備完了…目標、地球、日本、海鳴市…らへん。」

「らへん！？しっかりとした座標を教えたですよね！？そこに行ってくださいですよ！？」

ラインに怒られた。ちえっ。なんだい！ちょっとふざけただけじゃないかい！

「はいはい、了解。じゃ、真面目にいくぞ？」

…イージス、座標指定頼んだ……。」「

全員がずっこけた。リンまで空中でずっこけてる。

…いや、まあ、うん。ぶっちゃけ、細かい術式の調整は苦手なんだよ。言い訳だけど。

「いや、違っんだ！これについては言い訳をさせてくれ！」

全員が目をジト目にしてこちらを見ているため、必死に言い訳を試みる。

「ほら、お前ら俺の魔力量知ってるだろう？ほぼ無尽蔵の魔力量だと、細かな魔力操作は難しいんだよ。」

《故に、私が術式の調整をサポートする。そういうことですね。》

イージスもかばってくれたため、最悪の印象だけは免れたが、依然として状況は芳しくはない。どうするか…

「ほ、ほら！もう飛ばすぞ！こんなどうでもいい事なんて置いといて。とりあえずは、地球に行っちゃおうジャマイカ！」

なんかもう色々混乱しすぎて語尾がおかしくなってる気がするが、今の状況的に放置。というか、放置しないと六課内での俺の立場がやばくなる。

「まあ・・・」

「そうだね・・・」

「せやな・・・」

よかった。三人娘は納得してくれたみたいだ。

安心して、少しはなれたところで放置していた術式の元へ向かう。

「「「後でじっくりと、そう。じっくりとからかえばいいもんね」
ええな」(ね)「「「

だから、本来の俺の耳なら普通に聞こえるはずの、こんな会話も聞き逃したんだろう・・・

第十五話：放置やシカトほどつらいものは無い（前書き）

すいません。更新がかなり遅れました。

で、遅れた上に何をのたまつか、と言われるかもしれませんが、今回（も）内容が薄いです。

ご了承ください。

第十五話：放置やシカトほどつらいものは無い

「はい、到着です！」

とりあえず、あの後悪夢を見た事などは置いて、転移――（したかったのに出来なかったのは別の話）して、ようやく地球に降り立つことが出来た。

……いや、うん。ホント長かったよ。なんか八神一家――（の中でもはやてとヴィータとシグナム）に一年分ぐらいからかわれたけど。「やーいやーい微調整苦手」とか、「調整をデバイス頼み……神裂、お前……」とか。しまいにはなのはとフェイトに笑いをこらえながら慰められる始末。……。

「

――

――ツツツツツッ！！

！」

「け、剣夜さん！？」

「ど、どうしたんですか！？」

うん。この記憶は封印しておこう。危うくどっかの運命の名を冠すゲームの狂戦士みたいになるとこだった。というか、近くにいたエリキャラコンビが涙目だ。

「あ、ああ。悪かったなお前ら。もう大丈夫だ。ちょっと自分を見失ってただけだ。悪い、怖がらせたな。」

「いえ……」

「ちょっと、びっくりしましたけど。大丈夫です。」

よかった。トラウマになつて無くて。なんか怖がらせたもんなら、最悪、金の悪魔^{フェイト}が鎌振りかぶつて地平線の彼方まで追ってくるもんな。それはなんとしてでも回避しなければ。多分、途中から白^{なの}い悪魔も参加してくるだろうからな。「お話しするの！」とか叫びながら。

「というか、ここは具体的にはどこなんでしょう？　なんか、湖畔のコテージ、って感じですけど。」

「ああ、それは」

ティアナの疑問に答えようとした時だった。自動車が一台、こちらに走ってきた。

……タイミングよすぎやしないか？

まあいいか。気にしないで置こう。ご都合主義とかそんなんだろ。

「自動車……？」

「こつちの世界にもあるんだ……？」

ティアナが突然やってきた車に、というか地球に対して失礼な事を言っていた。

「ティアナ。さっき自分で文化レベルがほとんど変わらないって言

つてた所じゃないか。そりゃ車ぐらいあるさ。動力は電気じゃなくてガソリンだけだな。」

「あはは・・・」

ティアナが笑って誤魔化す。全く・・・

「なのは！フェイト！」

車から金髪の女性が降りてきて、そのままのはとフェイトの所に走っていく。

「アリサちゃん」

「アリサ。」

「なによもう！ご無沙汰だったじゃない！」

「にやははっ。ゴメンゴメン。」

「色々忙しくって。」

「アタシだって忙しいわよ？大学生なんだから。」

金髪の女性・・・まあ、アリサはどこか誇らしげに胸を張る。

俺は四人にここで待っているよう伝え、三人がいるところに歩み寄る。

「アリサさーん！こんにちはです！」

「ようアリサ。相変わらず元気そうだな。」

「リイン！久しぶり！・・・剣夜は、二年ぶりだったかしら？久しぶりね。」

「はいです〜！」

「ま。そんなところか。久しぶりだな。」

因みに、二年前ぐらいになのは達が地球に休暇で帰る時に、俺まで半ば強制的に連行された。

そのときに、目の前のアリサや、もう一人の三人娘の親友、月村すずか嬢や高町家、ハラオウン家に挨拶回りをさせられた。

その後も、お互いの近況報告などをしていると、ふいにアリサが問いかけてきた。

「ねえ、あの子達放っておいていいの？」

「……………あ。忘れてた！」

第十五話：放置やシカトほどつらいものは無い（後書き）

A：なぜこんなに更新が遅れたのか？

？：モンハンに没頭していた

？：みなみけを全話見ていた

？：リトバスでエクスタシってた

？：ねてた

正解は次回の後書きで。

第十六話：宿敵（前書き）

またしてもおそくなつたぜー。
・・・ほんとすんません。

前回の答え。
全部でした。

第十六話：宿敵

あの後、ご機嫌斜めだった四人（主にスバルとティアナ）をなだめすかし、何とかサーチャーの設置まで漕ぎ着けた時には、いつの間にか転移してから二時間程が経っていた。

転移した時には一緒にいたはずだったはやて&ヴォルケNZは、説得に苦勞していた俺を横目に、なのはたち幼なじみにだけ声を掛け、自分達はさっさと私用を済ませに、前線を退いていった。

「じ、じゃあまあとりあえず、仕事を始めようじゃないか、な？」

「配置はどうしますか？」

「スターズとライトニングで良いだろう？俺は適当に街中を回ってくさ。」

「適当につて…」

「まあいいじゃねえか。じゃーねー、頑張つてね。本格的に危なくなったら助けてあげるから、それまで自力で頑張りな。」

そのまま踵を返し、街の方向に向けて歩き出す。

「え、ちょっと、剣夜さん!？」

なんかティアナがうるさいけど無視して森の中に入っていく。

「行っちゃった・・・」

「まあまあ、多分剣夜にも考えがあるんだよ。大丈夫だって、剣夜なら。」

「え？なのはさん、怒らないんですか？」

「信頼してるもの。きっと何か理由があるんだよ、多分・・・」

「多分って・・・」

「たまに剣夜の行動は私もわからないもん。本人曰く、先の先を見越して動いてるらしいよ？結構抜けてるところもあるけど。」

「はあ・・・どー見ても先を見て動いてるようには見えないんですけど、そんなもんなんですかね？」

「そんなもんなんですよ。きっと・・・で、なのはさん。」

「ん？」

「フェイトさん達・・・とっくに行っちゃいましたよ？」

「嘘!？」

森の奥。光すらぎりぎり届くか届かないかの最深部。

既にセツトアップは済んでいる。

アルテミスを銃に、イージスは全力で障壁と術式サポート。

そうやって構えた後、全方位を警戒するために両手の手首から鋼糸を垂らし、張り巡らす。

非殺傷とか言っては居られない。

それこそ全力全開で行かなければ、奴は倒せない。

「出てこいや模倣犯。いるのはわかってんだ、二年振りの再開と行こうじゃないか。」

言い放つと、正面の茂みが揺れ、一人の赤い外套を纏った男が弓を構えながら姿を表した。

「まさか気付かれるとは思わなかったんだけどなあ…。」

「冗談。そんなアーチャーの格好して殺気垂れ流しとか、見つけてくださいとでも言ってるようなもんじゃねえか。」

「それでも殺気は抑えたつもりなんだけど」

「寝言は寝て言え、死に損ないが。」

「ひどいなあ、こんな好青年捕まえて死に損ないとか。……て言うか、それを言うなら君もだよ。よく心臓貫かれて生きてるね。」

そこで赤い弓手は言葉を切り、この世界の狂気を押し込めたような笑顔を向ける。

「さつさと死んでくれないかな？僕の、俺の、私の、我の、妾の、最高にエキサイティングでエクスタシーなカーニバルが始められないんだけど。」

「そんな最低につまらなさそうな祭りは一生開くな。」

「えっ……」

「今日は何の為にここに来た？大人しくスカリエッツィの所でじっとしていれば良かった物を。」

「いや、この前リニアレール事件が終わったじゃないか？そろそろかなあ、って思ってたね。地球でのロストロギア事け」

皆まで聞く前に、俺の体は動いていた。

両手で銃を前方に構え、両手の引き金を引き絞る。

待機させていた鋼糸を操り、ヤツの身体を引き裂こうと動かす。

「黙れ！それも貴様の言う原作ブレイクとやらか！」

「その通り。君も一度……って、そういえば君は原作を知らないんだっけ。これは失敬。」

しかし、確実に殺すつもりで放った攻撃は全て受け止められる。

「ひどいなあ、こんな事をするなんて。……でも、これで正当防

衛だよね？ 残念だね、今回は戦う気はなかったのに。」

「抜かせ。」

「ふん。まあいいや。・・・『トレース投影、オン開始』」

「型月厨が……！」

奴が投影したのは、毎度お馴染みのモノクロ双剣。

「貰った能力がこれなんだから仕方ないだろう？それに、魔眼保持者に言われたかないね。」

「黙れ。」

これ以上の会話は不要。

ただ、目の前の敵を倒すために。

「武装練金！」

即座に懷から核金を取り出し、起動。俺の背中に銀の翼が、周りを12個つつ銀の剣と盾が舞う。

「おいおい…核金なんてどこで手に入れたんだい？それも神様から貰ったのかい？」

「これは二年前、遺跡を調査中に見つけたロストログアだ。恐らくこの世界にある唯一の核金。」

「へえ……。まあ、いつか。君を殺して奪えばいいや。」

「能書きはいい。来るなら来い。」

「当然！」

言い放つと同時にこちらに向かって飛びかかってくる。

何の小細工もない、只の突撃。チャージ

確かに威力はある。だが、

「律儀に喰らってやると思つか！ 牝牛！」トラス

自分の周囲を巡回していた銀盾の内一つをヤツの進路を塞ぐように配置し、銀剣を待機させる。

「【うご騰？・す朱雀・くわい六合・くわん勾陳、しゅつてい射出体勢】！」

「しばらくさい！叩つ斬る！」

ガキンッ

勇ましい叫びと共に振り下ろされた双剣は、トラス牝牛により完全にうけとめられていた。

「なっ！？」

「なにをそんなに驚く。曲がりなりにも武装錬金だぞ？王を守るための十二の銀盾と銀剣、それに銀翼の武装錬金。名付けて、『シルバーアームズ』。」

「特殊能力は、高い操作性と、盾なら高速での修復機能、剣なら・・

」

「【射出】！」

その言葉と共に高速で動き出す四本の剣。それぞれが異なる動きをするため、にわかには軌道をよむことなど出来ない。
それに。

「クソッ！『^{トレス}投影、^{オン}開始』！」

とつさに干将・莫耶を破棄、新しい宝具を取り出す体勢に入る。

「させると思つか？【解放】！」

途端、銀剣に変化が起こる。

膳？と朱雀は炎、六合は強固な樹を、勾陳は石を纏う。

「はあっ！？そんなのありかよ！」

「ありだ。剣の方の特性は、十二の剣、個々に関連した名前をつける事により、名前に対応した属性を持つ。今だったら十二天将だな。」

「武装錬金までチート、かよ。」

「それが俺だからな。異論も反論も受け付けない。」

「そうか。んじゃ、俺様もちょっとばかり本気を出そうかね。」

「出させると思つか？」

「ああ、くそっ！こんなフラグは回収なくてイイっての！」

むくりと。何の前触れもなく、目の前の焼死体が起き上がった。見れば、もう膝から下は新しい皮膚が出来上がっている。

「真祖の肉体・・・七面倒なモン使いやがって。」

「いいじゃないか。・・・で、だ。」

「何だ。」

「今度は俺様のターンだよな？」

「ッ！」

とっさに右に飛び退く。

一瞬遅れで、左肩を紅い魔槍が貫いていた。

「ガイ・ボルグ【刺し穿つ死棘の槍】。・・・ほう、今のを避けたか。」

あー……。最悪過ぎる。ブロックン・ファンタズム左肩は使い物にならず、いまだに槍は刺さっているから、【壊れた幻想】でも使われたらお終いだ。
とりあえずはこの槍をどうにかしよう。かくなる上は・・・

「ゴ、ハッ・・・ち、『力を喰らい』・・・」

左目で殲滅眼を発動させ、槍の魔力を回復にあてる。
イノ・ドワーエ

「（アルテミス。俺が次に口を開いた瞬間にナイフを逆手で右手に

創れ。」

《（了解。）》

下準備は終えた。後は。

「おいおい。お前殲滅眼イーノ・ドゥーエまで持ってたのかよ。こりゃびっくりだ。」

「・・・『そして放つ』！」

瞬間的に踏み込み、心臓めがけてナイフを突き立てる！

第十六話：宿敵（後書き）

自重？なにそれ美味しいの！？

あえて変なところで切ってみるといって挑戦。

第十七話：敗北・・・とフラゲっばいもの（前書き）

言い訳はありません。

お好きに断罪してください。

第十七話：敗北・・・とフラグっぽいもの

…ふと、意識が途絶え、目覚めた。

・・・ここはどこだ。

辺り一面は真っ黒で、自分の体さえどこにあるのかわからない程だった。

一度、目を閉じる。

体の表面を、やけに粘着質な液体のようなものが撫でていく。
…流れがあるらしい。

無意識に、流れてくる方向に手をのばした。

・・・は・・・った・・・う……

不意に、流れの根源らしき場所から、声と思しきモノが聞こえてきた。
おほ

風・・・は…どこ・・・う…

腕をかく。脚を蹴る。なぜだか分からないけど、あそこに行かなければ、あの声を聞かなければいけないような気がした。

抵抗なんて無いものだと思って腕を引けば、只の水よりも前に進んだ。

ゆつくりと、でも確実に前に進んでいく。

その内、またあの声が聞こえてきた。

風の……は……どこ……だろう……

近くなってきた。

遠くからでは分からなかったが、流れの行き着く先は、薄くだけれど七色に輝いていた。

風の始まりは……どこだったんだろう……

……着いた。

目の前には、極彩色の流れ。

川のようにもあり、大樹の枝が分かれていくようにも見える。

まさか此处に届くとはね……君の認識を少し、誤っていたようだね。

とつさに辺りを見渡す。

これまでの声とは違う、明確に俺に向けて発された声だった。

無駄だよ。君には知覚出来ない場所にいるからね。僕の姿を探しても、見つけることはかなわない。

不気味な声だった。

声で言ったらまだ十代前半だろう。

だが、声に込められたナニ力が、そう決め付けるのを阻害する。

まあ、君が此处に来るのはまだ時期が早い。
さっさと自分の世界に帰りな。

世界が歪み始める。

体が、周りが、光の大河が歪み、捻れ、それと同時に意識も歪む。

世界

どんどん

が

ゆ

む・・・

が

意識

が

に 下

落ちる……。

今はお休み。その内、嫌でも平和を渴望するようになるから。

でも、君は優しすぎる。今度逢う時は、その辺が改められて
いる事を願うよ。

何たって君しか、この世界の向かう先を変えられないんだか
ら。

「……………」

夢を、見ていた気がした。

いつものようなベッドで見るような夢ではなくて。

もっと、それこそ存在意義に関わってくるような大切なナニ力を忘れてきたような感じがする。

……！

そういえば、ヤツはどこだ！？

確か……

『こんなに無様だとは思わなかったよ。……正直、君には失望した。同じ転生者だから少しは楽しめると思ったのにね。……』

『次にあるイベント、ホテルアグスタではもうちょっと頑張つてよね。じゃないと……』

君の大切な人が一人、居なくなっちゃうかも……ね。

……思い出した。あいつはそのまま宝石剣で転移して行きやがったんだ。

ああ、胸糞悪い！これであいつとの戦績は0勝2敗。

「次は負けん！・・・多分。」

まあ、あいつもそう遠くない内に再会するって言ってたし。

とりあえずは服を着替えてなのは達に合流しますかね。

第十七話：敗北・・・とフラゲっぱいもの（後書き）

最近厨二病が酷くなって行ってる気がする・・・

第十八話：スバルがだんだん犬に見えてきた。・・・いや、なじったりとかそん

タイトルに特に意味はありません。

第十八話：スバルがだんだん犬に見えてきた。・・・いや、なじったりとかそん

……とりあえず、服を着替えないといけない気がする。

左肩はもう治ったけど、バリアジャケットごと貫かれた訳だから、
血の匂いぐらいいは付いてると考えた方がいいだろう。

となると、この服のやり場に困……………らなかった！

そういえば、こんな事もあるつかと【べんりなそうじ王の財宝】に色々な日用品を
入れていたんだった。

え？本来の使い方と違うつて？はっはっは、気にするな。

俺は名より実をとる！

で、着替えた訳だが。

服が変わってる事をどう説明しよう！？

やべーよ、盲点だったよ。

完全すっかりすっきり見事に気持ちいい位綺麗に、忘れてたよ。
日本語おかしい？気にするでない。

《普通に着替えた、では駄目なのですか？》

《駄目な理由でもあるんでしょう？このめんどくさいご主人の事だから。》

デバイスうつさい。砕くぞ。その狙ってるとしか思えない龍の部分とかを。

ん？待てよ？

砕く 金属？ コイン コインランドリー

これだ！

「と言うわけで、コインランドリーに行こう。」

《成る程…確かに、良案ですな。》

《なんだ、普通に解決しちゃうんだ…つまんないの。》

デバイス黙れ。特にアルテミス。

そうと決まれば、さっさと行こう。

「あれ？剣夜隊長？なにしてるんですか？」

速攻でスバルに見つけられました。
速攻でスバルに見つけました。

速攻でスバルに見つかりました!?

バカな!何故私を見つけられる!

子供の命と、すり替えておいたのさ!!

な、なんだってー!?

……落ち着こう。びーくーる、びーくーる。

「あ、ああ、す、スバルか。な、何。なんでもないさ、何でも!」

「………?なんか隠してませんか?」

「ビックリドッキリギックリ!」

「………古っ。」

「うるさい!」

ばれました。二重の意味で。

てかスバル何でこのネタ解るんだ?

僕が色々やってんのさ。

なんだ!?!時間軸的にまだ出てきてはいけないヤツが出てきた気がするぞ!?

「剣夜さん?ホントに大丈夫ですか?辛いなら肩貸しますよ?」

「大丈夫だ、問題無い。」

「？」

あれ？このネタは通じないんだ。よくわからん。

「で？サーチャーの設置か？ご苦労なこつたな。」

「そう思ってるのなら手伝ってくださいよ！どれだけ神経すり減らすと思ってるんですか！」

「だってなあ・・・俺がやったら二秒で海鳴市全域に張れるんだからなあ・・・お前らのためにならないだろう？」

「確かに・・・」

「ほら、納得したところで行くぞ？なのは達と合流するんだろ？」

「あ、はい！」

あれ？目の錯覚かねえ？スバルの頭と尻に犬耳としっぽが見えた気がしたんだが。

・・・ま、いつか！

「ほら～置いてくぞ～」

「ああっ！待ってくださいよ～！」

前言撤回。やっぱり犬だコイツ。

第十八話：スバルがだんだん犬に見えてきた。・・・いや、なじったりとかそん

テストまつただ中に俺は何をやってんだろう・・・

第十九話：マ　ー・・・ロングアーチの悪意が見えるようだよ。（前書き）

いつもの通り、タイトルに深い意味はありません。

第十九話：マー……ロングアーチの悪意が見えるようだよ。

紆余曲折あったが、まあ何とかスターズと合流して、コツコツとサ
ーチャーを設置して行つて。

何時の間にか、空は若干だけれどオレンジ色に染まり始めていた。

「さて。これでサーチャーの設置は完了だな。」

「え？もうお終いですか？」

「ティアナ？何言ってるの？」

「いえ……何か、呆気なかつたなうて。」

「何だ。そういう事か。簡単だ。」

「剣夜が、サーチャーの穴を埋めるように鋼糸を張り巡らせてくれるからだよ。」

「そういう事。だから、お前らの仕事は、ひとまずは終了。お疲れ様。」

告げると、まるで、今にも「我が世の春が来たアアアアアー——」とでも叫び出しそうな顔をして喜ぶ二人。

何だ？何があいつらをそこまで喜ばせるんだ？

「だつて……」

「二人とも、ものすごく、厳しいんですもん・・・」

「当たり前だろう？任務なんだから。」

「そうそう。でも、二人ともよく頑張ったよ？」

「はいっ！」

『ロングアーチから、スターズ、ライトニング、ついでにメテオへ。』

ロングアーチから通信が入る。

… ついでにってなんだ、ついでにって。

ロングアーチの俺に対する扱いが透けて見えるようだぜ…

ちなみに。念話や、通信と言った、魔力を使う類なら、アルファ・ステイグマ複写眼で見える。

こう、イメージとしては、目の前に文章が並んでいく感じだ。通信ならそこに映像が乗っかる。

というか、ミッドの技術のほとんどに何らかの形で魔法が関わっているため、市街地のご真ん中でアルファ・ステイグマ複写眼を使うとえらいことになる。・・・まあ、あんまり実害は無いが。精々が視界が微妙に塞がってウザイ、位だな。

『さっき、教会本部から新情報が入りました。ロストログアの所有者が判明。運搬中に紛失したとのことで、事件性はないそうや。』

本体の性質も、逃走のみで攻撃性は無し。ただし、大変に高価なものである、できれば無傷で捕らえて欲しいとのこと。
・・・まあ、がんばるか。』

「「はい！」」

「・・・さつてと。一端帰るとするか。」

「そうだね。サーチャーの設置も一段落ついたし。」

「です。です。晩ご飯ですよ。」

「やった！ご飯！」

スバルが大喜びで声をあげる。

・・・前から思ってたんだが、コイツとエリオの食べる量って明らかに胃の容量超えてるよな？

え？まさか、胃が常人の三倍とかに膨らんで無いよな？
もしくは、どっかのゴム船長みたいになってないよな？

・・・なにそれこわい。

「ライトニング。そっちはどう？」

『こちらライトニング。こっちも一段落付いたから待機所に戻るよ。
ロングアーチ、何か買って帰ろうか？』

『こちらロングアーチ。ありがたいことに、夕食は民間協力者の皆さんが用意してくれるそうや』

『うん。了解。じゃあ、スターズのみんなを車で拾って帰るね』

「ありがと、ライティング。」

「や、合流するだけで良いぞ？　ちょっと、アルテミスとイージスの限界に挑戦したいから。」

『限界に挑戦したいから……って、その超万能デバイスに限界なんてあるん？』

「あるさ！……多分。」

『『「はあ……」』』

何か、三人から「又コイツは常識をぶち破るのか……」みたいな顔をされた。

……納得いかん。

『じゃ、通信切るよ？』

『こつちもやな。』

「了解。帰ったら憶えてるよ？」

『『お断りします』』

丁重に断られてしまった。

「んゝ。でも、手ぶらで帰るのも何だかな？」

なのはポケットの中を探り始める。
おそらく、”あそこ”に電話をかけたんだろうが。

「なのは。携帯なら、さつき時間を見た後に鞆に放り込んでたじゃないか。」

結構あるよね、携帯で時間を確認するの。

「え!?!?! ホントだ。」

「だろ?」

「うん……」

「あ、お母さん? なのはです。」

まあ。ちょっとしたトラブルはあったが。
なのはは携帯から電話をかけ始めた。

「あはは、うん。お仕事で近くまで来てて……そうなの。うん、ホントに近く。え? 剣夜くんはいるかって? ……うん。隣に居るよ? でね? 現場のみんなに」

『な、なのはさんの……お母さん!?!』

『そ、それは、存在はして当たり前なんだけど……』

『あゝお前ら。覚悟しとけよ？会うには、色々な心の準備が必要だから。』

念話に割り込み、ちよつとした忠言をば。

スバルからティアナに念話がつながったから、何かと思えば、
イイ塩梅に混乱してやがる。

「ーキ、差し入れてあげたいから。 うん。ざつと 二十人分
くらい。」

『え！？ち、ちよつと剣夜さん！？それって、どういう意味ですか
！？・・・てゆーか、念話に割り込まないでください！』

『どういふものにも、只、ちよつとした覚悟が必要なだけだよ。』

『なんでお母さんに会っただけなのに覚悟がいるんですか・・・』

『何。会った瞬間に、驚く準備をしておけ、ってことだ。』

『驚く準備って何ですか！？明らかに 』

『はい、念話しゅりょー。』

『剣夜さん！？』

ぶちっとな。

「じゃ、十分ぐらいしたらそっちに行くから。．．うん、それじゃ。」

も一つぶちっとな。

携帯をしまつと、なのははこっちに向き直って。

「さて。ちょっと寄り道。」

「はいです」

それにリインがやけに高いテンションで乗った。

「あの．．．今、お店って．．．」

「そうだよ？家、喫茶店なの。」

「喫茶翠屋。お洒落で美味しいお店ですよ」

「ええ〜っ！？」

「．．．ま、そうなるわな。」

第十九話：マ　ー・・・ロングアーチの悪意が見えるようだよ。（後書き）

おまけ

「そういえば剣夜さん。」

「ん？・・・どうしたティアナ。そんなに真剣な顔をして。」

「イージスとアルテミスの限界に挑戦って、具体的には何をするんですか？」

「ああ、それか。簡単だよ。ちょっと、アルテミスで車を作って見ようかなって。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ホントに規格外ですね。」

「そうでもないぞ？剣だって、これまでで一番大きくして・・・いくつだけ？」

《二十メートルほどでしたね。》

「ん？どうしたティアナ？」

「もういいや・・・」

第二十話：剣夜のパーフェクト虚刀流教室（前書き）

今回、刀語のサントラを流しながら読むとよりいいかと思っています。

あと、後半少しシリアルです。

第二十話：剣夜のパーフェクト虚刀流教室

まあ、何はともあれ喫茶翠屋に到着したスターズ＋リイン＆俺。

とりあえず実家と言うこともあり、なのはが一番最初に店に入ること。

カランカラン

よく店とかにある、ドアを開けると音が出る、正式名称がいまいち解らないアレをならしつつ、なのはが店の中へ。

「お母さん！ただいま！」

「なのは！おかえり。」

「桃子さん、お久しぶりです。」

「剣夜君も久しぶり！確か・・・二年ぶりだっけ？」

「事件の半年後でしたから・・・そうなりますね。」

「桃子さん！お久しぶりです！」

「あありインちゃん！久しぶり！」

「はいです。」

和やかに再会の挨拶を進めていく大人達。だが、二人は物の見事に

混乱しているようだ。

・・・あ、因みに俺は三年前に一悶着あった後、ここ翠屋を訪ねている。

『お母さん若っ！』

『ホントだ・・・だから剣夜さんは、心の準備をしとけ』なんて言っただのね・・・』

「いや？二人とも、驚くのはまだ早いぞ？」

「うわっ！」 「びつくりした！・・・だから剣夜さん！人の念話を盗み聞きしないでください！」

「そう言われたってなあ・・・見えちまうもんはしょうがないだろ？」

「そうですけどー！」

その後、土郎さんと美由紀さんも出てきて、そのたびに二人がビツクリしてたのはいいっこないだ。

・・・まあ、高町家の皆さんは賢者の石つかってんじやないかって位若々しいもんなあ・・・気持ちわかるよ。

「あ、この子達、私の生徒。」

「おお。こんにちは。いらっしやい。」

「は、はい！」

「こ、こんにちは・・・」

おお、緊張でガチガチになってるよ。特にスバル。
まあ、それもそうか。かのエースオブエースの実家に来てるんだからな。

「ケーキは、今箱詰めしてるから。」

「うん。フェイトちゃん達と待ち合わせしてるんだけど・・・いても平気？」

「もちろん！」

スバルとティアナは近くのイスについて、士郎さんに出された紅茶を飲んでいる。

「剣夜君・・・ちょっといいかな？」

「はい。どうしました？」

と、噂をしていたら本人から声をかけられた。

「いや何。久しぶりだからね。ちょっと、腕試しにつきあってくれないかい？」

「いいですよ！ちょうど虚刀流を試す機会が無かったんで、困ってたんですよ！」

「じゃあ、道場に行こうか？」

「望む所ですよ。」

どうやら、手合わせをお願いしに来たようだ。

「お前らも来るか？特にスバル。接近戦の参考ぐらいにはなると思うぞ？」

「え？何するんですか？」

「手合わせ。士郎さんとな。」

「嘘お！？」

「本当お！」

「行きます！行かせてください！」

「決定だな。じゃあ士郎さん。そういうことでお願いします。」

「いいよ。」

最終的に、全員がついてくる事になった。

「さあやって参りました高町家の道場！」

「スバル？どうしたの？」

「いえ・・・何か言わなきゃだめな気がして・・・」

「でもなのはさん。大丈夫なんですか？」

「ん？なにが？」

「いや、土郎さんですよ。危なくありませんか？」

「あくまで稽古だからね。そこまでの事にはならないと思うよ？それに・・・」

「それに？」

「家のお父さんは・・・強いよ？」

すでに向かい合って、土郎さんは木刀を二本、構えている。

「剣夜君？そんな格好で大丈夫なのかい？」

「大丈夫です、問題ありません。」

今の俺の格好は、上半身が裸で下半身が袴。その上裸足。・・・まあ、簡単に言えば原作の七花君だ。

解らない人は、TSUTAY で刀語を借りて見よう！三巻あたりがベストだ！

「では、始めましょうか。……………虚刀流一の構え、鈴蘭。」

「じゃあ、行くよ? ……ふっ!」

左足を前に向け、右足のつま先を右に。左手を前に、右手は指を下にして腰に。

虚刀流の基本的な『待ち』の構え、鈴蘭。

士郎さんは両手に短めの木刀を持った二刀流。

じゃあ、で足に力を込め、

行くよ? で一気に飛び出す。

ふっ! のfを発音する頃には、もう右の木刀が振り下ろされようとしていた。

「「早っ! !」」

スバルとティアナが驚いている声が聞こえるが、スルー。

目の前の『敵』に集中する。

「虚刀流……雛罌粟、二連!」

左右の手刀を下から上に払い、迫っていた木刀を退ける。

この状態なら、胴体がから空きになる！

だが、それは士郎さんとして解っていること。

だから、身体を後ろに下げようと踏み込んでいた右足に力を込める。

だけど、それを待つ理由は無い！

「虚刀流、もくれん木蓮！」

飛び膝蹴り。もちろん加減はしてある。

というか、加減をしなかったら肋骨が粉々になる。

「うおっと！」

間一髪で後ろに飛んで躲される。

でも、技がつけられない訳じゃない！

「虚刀流」

「はあっ！」

「薔薇！いば！」

全体重を乗せた跳び蹴りと、上段からの振り下ろしがぶつかり、はじき飛ばされる。

五メートルくらい開いた距離を縮めるべく、新しい構えを取る。

「虚刀流七の構え

かきつばた
杜若」

「クラウチングスタート・・・？また妙な構えを取るね。」

「この構えは典型的な『動』の構え・・・今度はこっちから行きま
すよ？」

「望む所だよ。」

「・・・シッ！」

間合いは二歩、いや！三歩！

この間合いならアレが使える！かきつばた かきつばた杜若が杜若たる所以が！ゆえん

一歩目。思いつきり踏み込む。士郎さんは横薙ぎの構えのまま動かない。迎え撃つつもりのようだ。

・・・好都合だ。

二歩目。踏み込んだ左足のかかとを床に打ち付ける。

三歩目。左足をバネに、天井向けて飛び上がる！

士郎さんはまさか俺が跳ぶとは思ってなかったらしく、反射的に両手を振ってしまっている。

「本来ならここで何回転かして威力を高めるんですが、今回は無しです！虚刀流七の奥義！」

「間に合え　　！」

急いで上空に向けて木刀を構えようとしているのが見える。
でも、いかんせん持ち上げるより降りる方が早い！

「落花狼藉！」
（はつかりばくせき）

足を斧刀に見立てての踵落とし。もちろん加減は（ry。

「はああっ！」

何とか間に合った二本で防がれるが、大きく体勢を崩している土郎さん。

「真庭忍法足軽・・・からの『雛罌粟』
（ひなげし）から『沈丁花』
（しんちょうげ）まで、打撃技混成接続！」

足軽で重さを消した272の打撃が炸裂するが、その対象は土郎さんじゃない。

両手の木刀、そのうちのある一点に集中して左右分けて136の打撃技を繰り出す。

最後の一撃ずつのみ重さを戻し、一端はじいて距離を取る。

「・・・ツ・・・今は・・・重さを無くしていたのかい？全く衝撃が来なかった。」

「ええ。ある特殊な歩法で、自分の重力をゼロにする。真庭忍法、足軽です。」

「凄まじいね・・・自分が受けた後だと、特にその異常性がわかるよ。」

「お褒めにあずかり恐悦至極。・・・さて。どんどん行きますよ？」

「そうだね。じゃあ、僕は教えて貰った氣を使った奥義を出すとするよ。」

「ああ・・・ありましたね、そんなの。」

昔冗談で神鳴流の技を教えたら、物の見事に習得された事があった。俺でも一週間かかったのに、何のバグだが、一日で形にされた。

・・・・・・はあ。

「・・・まあいいです。じゃあ、準備はいいですか？」

「大丈夫。いつでも来なよ。」

「では遠慮無く・・・ハッ！」

先ほど同様、杜若で目の前まで一気に移動し、構えるは五の構え、夜顔。

そこから繰り出される、五の奥義！

「虚刀流」

「御神流亜流」

「飛花落葉！」
ひからくよう

「真・雷光剣！」

身体の前で合掌、両手を翼のようにしつつ前に打ち出す。

士郎さんは、木刀に氣を纏わせ、それを雷に変換している。

・・・まあ、なんでつかえるんだよ、って感じなんだけど。

ガキイツ！ガツ！バチバチバチイツ！

おおそ木刀と掌底がぶつかった音とは思えない音が出る。

まあ、今更なんだけどね。（戯言風に）

バチイツ！

一際大きな雷鳴が止むと、士郎さんの愕然とした表情があった。

「今、何をしたんだい？剣の氣が残らず何処かに吹き飛んでいったんだけど。」

「・・・飛花落葉ひからくようには秘密がありましてね。この奥義は、対象の表面に衝撃を流す
所謂、鎧崩しと呼ばれる技なんですよ。」

「そんなことが・・・」

「出来るから虚刀流なんですよ。・・・で、これの反対の奥義、四の奥義　柳緑花紅りゅうりょくかこうは・・・って、口で言うよりやって見せた方が早いですね。　虚刀流、四の奥義・・・」

すでに懷で両足を横に、右の拳を左で包み、思いつきり身体をひねった状態　　四の構え、朝顔を取っている。

ひねった腰を勢いよく前に戻し、拳を右の木刀に当てる！

「柳緑花紅！」

「グッ……ん？」

当たりはした。でも、傍目には木刀には何の変化も無い。

「当たった・・・よね？」

「ええ、確かに当てました。ですが、柳緑花紅の凄い所はここからです。ちよつと、打って来てみて下さい。」

「それはいいんだけど、どっ！」

「そこっ！」

振り下ろされた木刀を人差し指と中指で挟む。
それだけで木刀は砕け散ってしまった。

「そんな！？」

士郎さんは、思わず砕けた木刀を離してしまう。

手から離れた木刀は、床に落ちた衝撃だけで粉々になった。

「剣夜君：君は今、何をしたんだい？ 只のパンチでこうなると思いがたいんだけど……」

それには答えずに、黙って構えていた両手を下ろし、構えを解く。

「……柳緑花紅には、ある特性があります。」

「特性？」

「ええ。相手の体の何処にでも衝撃を伝える事の出来る、鎧通しの奥義。……それも、間のモノには何ら影響を出さずに、です。」

「凄まじいね……。でも待つて！ そんな技を使えば……」

「はい。簡単に人を殺せます。」

言い切ると、今まで息を止めるようにして見ていたギャラリーが、ざわめいた。

「ですが、俺はこの技を、何か特別な理由が無い限り他人^{ひと}に使うつもりはありません。」

「それは、」

「それに、です。……俺は三年前、あの人の墓の前で誓ったんですよ……」

『槍を使わない。』

『人を殺しえる技を使わない。』

『理想と誇りは、俺が引き継ぐ。』
つて。」

「それは、どうして？」

「これが、贖罪だからです。……。もう、止まらない。いえ、違いますね。もう、何も失いたくないんですよ、きっと。」

「普通感覚だろう？それは。」

「それが俺の場合は行き過ぎているんですよ。いつまでたっても前に進めない。つい最近まで、俺の時間は三年前で止まってたんです。」

「……。だからこそ、俺はあいつを許せない。
執務官になったのもあいつを追うため。」

俯いていた顔を上げると、土郎さんとなのは、リインは暗い顔をして、スバルとティアナは訳が分からない、といった顔をしていた。

「……。いけない。辛気臭い雰囲気になってる。」

「ま、まあその話はまた今度にしましょう。今は試合でしょう？」
なるべく明るい声を出す。

「そうだな！よし、次はこっちから行くぞ！」

士郎さんも俺の意図が読めたのか、いつもより大きな声を出してくれた。

「じゃあ折角ですし、もう一本の木刀も折って見せますよ。ああ、後でキチンと元に戻します。安心してください。」

「なら遠慮な、くっ！」

士郎さんは木刀を前に突き出し、そのまま突っ込んで来た。てか早っ！神速使ってるよこの人！

仕方ない。この速さだと成功するか分からないけど！

「虚刀流　　菊！」

体を半身に、木刀を背中を掠らせるようにして受け流し。

両手の肘の裏側で挟み、背骨を支点にして、槌子の原理で

「折る！」

第二十話：剣夜のパーフェクト虚刀流教室（後書き）

ヤバい…三年前を今書いてるけど、相当長くなる…どうしよう…

あと、十五万アクセス記念で何かギャグでも投稿しようかと思ひます

嘘予告：最終決戦（前書き）

十二割が嘘です。

本気にしないように。先生との約束だぞ？

・・・ふと思いついてやった。今では後悔も反省もしている。

嘘予告：最終決戦

話をしよう。

あれは今から、丁度十年前。

まだお前らがママのミルクを一生懸命ゴクゴクやってた頃の話さ。

あの時の事は今でも思い出せる。

何てったって、あの事件で初めて俺はあの二人 【エースオブレジエンド】と、【エースオブエース】に出会ったんだから。

あれからまあ、色々あったんだけどな。その話はまた別のお話、つてことで。

・・・そう、あの日も、こんな風に空は澄み渡ってたよ。

「アインヘリアル一号機、二号機共に何者かからの攻撃を受けています！ 隊長！このままじゃマズいですよ！」

「やむを得まい・・・陸士103部隊、全隊員出動準備！命令は待機だが、悠長な事は言ってられん！責任は全て俺の首にかける！何としてもアインヘリアルを守り抜くぞ！」

『おおっ!』

突然の襲撃。

「誰か応答してくれ!現場は、アインヘリアルはどうなったんだ!」

「ルーツ!ユーリ!レイン!何でも言わないんだ!通信はとつくに繋がってんだぞ!悪ふざけはよせ!」

「嘘だろ!?!おいヘイル!故郷に婚約者が居るんだろ?!?答えるよ!」

『・・・・・・こちら・・・・ザザ・・・・103部隊・・・・隊員h・・・・ん滅した・・・・ザ・・・・救援を・・・・ザ・・・・ザ・・・・』

「おい!どうした!何があつた!答える!」

「・・・・・・通信、完全に途絶えました・・・・」

「クソッ!」

「056部隊に救援要請だ!通信つなげろ!」

「駄目です!023から067まで、完全に繋がりません!恐らく

は・・・」

「嘘だろ!？」

次々と壊滅する地上部隊。

『さあ、今こそ浮上の時だ!これこそが、君たちが求めていた絶対の力!旧暦の時代、一度は世界を滅ぼした、古代ベルカの悪夢の叡知・・・【聖王のゆりかご】だ!』

混乱の中、無限の欲望は剣を抜く。

「タイプゼロ・セカンド・・・排除する。」

「ギン姉!何で!?!どうしてこんなことするの!?!」

「よー幻術使い。そろそろ諦めたらどうだ?」

「これ以上やったとしても、お前が私たちに勝てるわけ無いっすよ?」

「黙れ・・・っ!」

「ガリユ・・・みんな、殺して・・・!」

「ルー！」 「ルーちゃん！」

窮地に立たされるストライカー達。

「大丈夫か！」

「あ・・・あなたは・・・レジェンド・・・」

「いい。しゃべるな。ガジェットは俺に任せろ。」

「だが・・・」

「大丈夫だ。そこで見てろ。・・・アルテミス。最初っから全力で行くぜ？」

了解です！

「行くぞガジェット・・・残機は十分か？・・・躁弦曲第十番！【惨殺地獄】！」

動き出す伝説・・・そして。

「よう・・・また会ったな。今度こそ三年前の決着をつけようか。」

「いいね。望む所だよ。・・・『トレース投影・開始オン』」

「イージス！00だ！」

「まさか・・・この私が負けるとはね。いやはや・・・だから人間は面白い。」

「死にかけの真祖が、何をほざく。・・・しかし、俺もちょっとやばいかもしれねえ。最後のエクスカリバーは余計だったわ。」

「ふ・・・ああそうだ。君たちが期待している次元航行部隊なら、今頃別の次元世界じゃないかな？」

「何っ！？」

「ちょっと行き先を弄ったのさ・・・これでゆりかごは・・・」

終わらない絶望。

その最中、欲望は勝利を確信し、嗤う。

「くはははははははは！私の勝ちだ！駆動炉を止めたとしても、じきにゆりかごは宇宙そらにあがる！そして君たちはアルカンシエル以外にゆりかごを破壊する術は無い！」

「・・・イージス。いけるな？」

《ですが、アレはあまりにも主に危険が》

「危険とかはどうでもいい。・・・いけるな？」

《・・・はい。》

「アルテミス。最大容量で鋼系を展開。ゆりかごを包め。一片たりとも破片をミッドに落とすなよ。」

《わかってるわよ！》

「・・・それでいい。さて！帰る前にもう一仕事だ！・・・もつとも、帰れるかどうかは賭でしかないがな。」

《主。》

「いいさ。これでいいんだ。」

《ですが》

「行くぞ、お前ら。一世一代、土壇場での大どんでん返しの始まりだ！」

伝説は止まらない。何があろうとも。

「・・・完全に、破壊されたよ。破片一つ・・・落ちてこなかった。」

「そうか・・・ははっ。・・・今回ばかりは、ちょっとだけ・・・疲れた、わ・・・」

「っ！？剣夜！？寝ないで！」

「ムチャ・・・言いやがる・・・。」

「剣夜！？剣」

「悪い。・・・少しだけ・・・寝る・・・。」

「・・・あれ？寝ないの？」

「・・・あれやなのはちゃん。きっと剣夜も、まだなんか事情があ

るんや。言ったらあかん。」

「え、でもはやて・・・傷が治って行って・・・ええ！？治って行ってる！？」

「嘘！？何で！？」

「・・・オートリバース オールフィクション肉体再生、大嘘憑き、ありとあらゆる回復魔法・・・正直賭だったが、うまくいったようだな・・・よかったよかった。」

「え・・・嘘・・・剣夜？」

「ああ。剣夜だ。」

「~~~~~っ！剣夜あ！」

「ぎゃああああああああっつつつつ！痛い痛い痛い痛い痛い！折れた肋骨が刺さる！痛い！死ぬほど痛い！」

「剣夜、剣夜剣夜剣夜！」

「マジで痛い！ちょ、アツーーーー！」

「・・・あ、気絶しよった。」

「・・・なのは・・・もしかして、ゆりかごより強い・・・？」

嘘予告：最終決戦（後書き）

痛い！痛い痛い！石投げないで！お願いだから！謝るから！自分で
も訳がわかってないから！はっちゃけすぎただけだから！

第二十一話：バイク（前書き）

先に謝つときます。ごめんなさい。

ネタ不足だぜ！

第二十一話：バイク

結局。士郎さんと決着をつけることは出来なかった。

元々、勝利条件をキチンと決めてなかった、と言うこともあるし、士郎さんの木刀が二本とも折れてしまった、と言うこともあるのだが（士郎さんは素手で戦おうとしていた。）、何よりフェイト、おまけのエリキヤロが到着してしまった、と言うことが大きかった。

あ、木刀はちゃんと直したよ？こんな 感じで。

「キングクリムゾン！」 「『『『『『』』』』』』」なにそれこわい」「『『『『『』』』』』』」

まあ、なにはともあれ士郎さんとの手合わせは微妙に不完全燃焼っぽかったが終わった。

で、今はフェイトが乗ってきた車に乗り込んでいるのだが、ここでちょっとした問題が起きた。

「剣夜さん！僕を膝の上にのせてください！そしたら大丈夫なはずです！」

右からエリオが輝いた目をして見上げてくる。
やめて！その目には弱いのに！

「け、剣夜さん・・・わたしを、のっけてください・・・」

キヤロよ、恥ずかしいならやめればいいじゃないか、と言いたい。

「剣夜？何なら天井に張り付いてる？」

「いやそのりくつはおかしい」

なのは・・・俺はスパイダーマンか？

「えっと・・・ど、どうすれば・・・」

フェイト・・・もう少ししっかりしてくれ・・・

「どうしてこうなったし」

はい、回想はいりまけろす！

~~~~~

「あ・・・」

「うん？どうしたフェイト。何か忘れ物か？」

「そうじゃないんだけど、この車、五人乗りだったよ。エリオとキヤロは二人で一人分くらいしか使わないだろうから、一人あまっちやうんだよね・・・」

「うん？なら、俺が降りるよ。それなら大丈夫だろ。」

「どうしたの？」

「おお、なのは。いや何、一人余る、って話だ。」

「あ、そつかあ。んゝ、剣夜が後ろにしがみついて行く、とか？」

「待て。俺が降りるのは決定事項か？」

「だって、剣夜のことだから、『俺が降りるよ。それなら大丈夫だろ。』とか言いそうだもん。」

「一言一句違わずに口にしました。」

「でしょう？」

「いやしかし、どうしたものか・・・」

「うゝん・・・」

三人で額突き合わせて考えるが、なかなか「これだ!」といった案が出てこない。

「やっぱ、俺がソニックムーブでついてくか。認識阻害張って。」

「そうだね・・・それがいいかな？」

「エリオかキヤロを膝に乗せる、って手もあるけど・・・」

「恥ずかしがって乗らないだろうな。」

「・・・ま、みんなに聞いてみようか。」



「そうだな。それが良いだろう。」

~~~~~  
・・・と、言うわけだ。話した途端、凄い勢いでエリキャロがこっちに来たのが怖かったがな。

《主。》

「うん？どうしたイージス。何か妙案が？」

《ええ。私の中には、バイクや車のデータも入って居るのですが。》

「「それだ！」「」」

はい、あっさりと解決案が出ました。・・・俺たちの苦勞は何だったんだろう・・・

《では、どういったものにしますか？》

「決まってる。ヤマハのXV1700AS Road Starだ。」

《了解。丁度、データベースにデータがありました。完全に創造し、私のバックアップから外れますがよろしいですか？》

「かまわない。」

前世からの相棒。まさかもう一度乗れる日が来るとは思わなかった。

「剣夜、嬉しそうだね?」

「ああ・・・やっと、やっと乗れる・・・この日をどれだけ待ち望んだか・・・!」

《構築、完了しました。動力にはGMドライブを応用していますが、よろしいでしょうか?》

「ああ。むしろ、そっちの方が良いだろう。」

「GM・・・」「ドライブ?」

「ああ、みんなには話してなかったか。イージスのガンダムモード・
・あの四機には、全く新しい思想の元創られた動力炉 G
Mドライブが搭載されてる。」

「確か、周囲の魔力素を始動時に取り込んで、余剰分を廻す事によって半永久的な稼働を実現出来る・・・だっけ?」

「ああ。理論上は、どれだけAMFが濃かったとしても動ける・・・はずだ。」

「すごいじゃないですか!何でもみんなのデバイスにも搭載しないんですか?」

「スバル・・・少し考えてみる。そんなにほいほい質問してたら、自分のためにならない・・・まあ、良いけどな。」

まず一つ。システムの小型化が難しい。お前らも俺のダブルオーの両肩についたドライブ、見た事あるだろう?あれが限界だ。アレを

「背負って戦えるか？」

「ちょっと・・・無理っばいです。」

「だろう？で、二つ目。暴走しやすい上に、オーバーヒートすれば止まっちゃう。未だにフルドライブは危険なまま。トランザムまでこぎ着けるのは、まだ先だろうな。」

「剣夜さんでも・・・ですか？」

「今のところ、俺が一番適任なんだよ。暴走の作用にも耐えられるようにできている身体は、そうそう居ないから。」

「はあ・・・」

「ま、試験運用でデータをとって、将来的にはお前らのデバイスにも組み込んでやるから、それまで待ってる。」

「はい！」

「・・・で？さっきのコテージに行けば良いんだな？」

「そうだよ。道・・・わかる？」

「大丈夫だろ。多分。」

「多分って・・・」

「じゃ、先に帰ってるからな。何か微妙に嫌な予感がするんで・・・主にメシ関係で。何か適当に見繕って来るわ。」

「夕飯はバーベキューだ、って言ってたから・・・大丈夫だと思
うけど・・・」

『スバルとエリオがな・・・どこまで食べるかわからないから・・・
準備しとくに超したことはないだろう?』

『ああ・・・』

最後は念話で。さすがに聞かれると、自重されて全く食べない、な
んてこともあり得そうだからな。特にエリオ。

なんだかんだで気配りが出来るヤツだから、十分にあり得る。

「じゃ、お先に〜!」

アクセルをまわして、最初はゆっくりと進み始める。

しばらく走ると、スピードが上がってきた。

これだよ。この感覚だよ!

《ねえ、ご主人様?》

「どうした?アルテミス。俺は今、久しぶりのバイクを楽しむのに
忙しいんだが。」

《それが・・・後ろを見てみてください。》

「イージスまで?どうした。何があった?」

言われた通り、ミラーで後ろを見る。

!?

すくにもどした。いやいやいやいや、さすがにこんなオチは無いだろつ。

「そのバイク！止まりなさい！ナンバープレートが付いてないよ！」

「畜生！こんな才はいらねえええええええ！！！」

「止まりなさい！聞いているのか！」

「止まるもんか！　というかイー・ジス！　なんでナンバープレートをつけなかったあああああ！！！！！！！！」

《反省も後悔もしていません。大丈夫、問題ありません》

「おおありじゃ あああああー……」

第二十一話：バイク（後書き）

学校が無いと暇で仕方ない…

時事ネタ：エイプリルフル？頭冷やそうか？（前書き）

思いついてやった。反省も後悔もしていない（キリッ

え？どうしたの剣夜？その右手の魔力は何？どうし

ブツンッ

ザー……

時事ネタ：エイプリルフル？頭冷やそうか？

「ああ・・・平和だなあ・・・」

おはよウナギ、こんにちワン、こんばんワニ。

毎度おなじみ、と言うほど回は重ねていませんが。

神裂剣夜です。名字で呼ばないでください。

ただいま、私は六課の食堂でアフタヌーンティータイムです。

え？時系列は何時だって？

H A H A H A、気にスンナ。

そもそも、俺は原作を知らないんだから時系列がどうのとか言われ
ても訳がわからん。

あのいけ好かない型月厨は知ってるみたいだけどな。

・・・で、何の話だっけ。

ああ、そうそう、平和がどうの、って話だったか。

まあ、平和だなあ、とか口にするると確実に事件フラグなんだが、ま
あその辺は気にしないで置こう。

前世でやった鉄の歯車平和歩行のパスちゃんが言っていたように、

平和とは人類の歴史の中で異常な状態だそうだが、そんなことは知ったこつちやない。

平和を守りたいから、管理局に入ったヤツも居るだろうし、身内の平和を案じたからこそ犯罪に走ったヤツも居る。

まあ、俺が担当した事件では、そういった奴らの心配を取り除いてやれるようにアフターケアもしていたんだが、まあ、それはまた別の話だ。

そういえばさあ、某パスちゃんとウチのライティング隊の隊長、声似てないか？

いや、何となくだが、一つの声帯を二人が持っているような・・・

・・・まあ、いいや。今度もまた事件があったときに型月厨と会ったろうし、そのときにそれとなく聞いてみよう。

あいつなら知ってそうだし。不本意だけど。

「いやしかし、平和だ・・・」

時刻はすでに昼の二時近く。みんなはどうせデスクワークか訓練だろうし、食堂に居るのは遅めの昼食を取っているのが何人かと、後は俺だけ。

最近はフォワードの奴らも力をつけてきたから、そろそろ俺が教導に本格的に参加する日も近いかも知れん。

ああ、朝の段階ではやてが何か企んでいたが、まあ気にしなくても

良いだろう。

今はこの平和な、のんびりとした時間を。

「ゆつくりと『緊急事態発生！剣夜隊長！至急訓練スペースまでお越しく下さい！』・・・ゆつく・・・りと・・・なんだろうねえ・・・はあ。」

とりあえずモニターの先のルキノに複写眼を^{アルファ・ステイグマ}発動させた禍々しい感じになっている目で恨みがましい表情を向け、イスから立ち上がり上着を手取る。

ちょっと涙目になってるのを見て、良心が痛んだのは秘密だ。

~~~~~

というわけで、割と走って着いた訓練スペース。

相変わらずの臨海だ。津波が来たらどうするつもりなんだろうか。

さて、俺としてはこの両目に写る光景をどうにかして伝えたいのだが、如何せん形容し難い状況になっているので、どうすればいいのやら・・・。

とりあえず、見えているものを片っ端から言っていこうと思うので心して聞いてくれ。

まず、

- ・ なんかハイライトが消えた虚ろな目であたりに雷を落としまくっている真・ソニツクなフェイト
- ・ と対峙して「お話しするの！」とか叫びながら所かまわず砲撃をぶっ放してるなのは
- ・ の砲撃を切り裂いてめっちゃいい笑顔で笑いつつレヴァンティンを振り回しているシグナムの姐さん
- ・ を止めようとギガントなアイゼンを振りかぶっているヴィータ
- ・ と一緒に吠えているザフィーラ
- ・ に向けて火を噴いているフリード
- ・ を見ながら泣いているエリキヤロ
- ・ を泣き止ませようとしているシャルマル先生
- ・ を守ろうと頑張っているティアナとスバル
- ・ 達を遠くから見ているロングアーチー同

「なにこのカオス」

とりあえず、比較的話が聞けそうなティアナらへんに行く。

「スバル！シールドもつと強度あげて！」

「これ以上は無理だよ〜！」

ここも修羅場だったか。

見ていてかわいそうだったので、二人の前にシールドとアルテミス

印の盾を張り、その前に鋼糸で陣を組む。

いきなり目の前に出来た盾に戸惑っていたが、魔力光が俺の思い出したのか二人が勢いよく振り返る。

「「剣夜さん！」」

「悪い。何があっただ？」

「えつと・・・」「そのお・・・」

「なんだ？どうしたんだ？」

歯切れが悪そうに口ごもる二人。あたかも、フェルマーの最終定理を解けといわれたかのようにだった。

「まず、フェイトさんがサンドイッチを食べてたんですよ。それで・・・」

「フェイトさんが、『やっぱりタマゴサンドが一番だね！』みたいなことを言っただけです。」

「それになのはちゃんが『トマトサンドが一番だよ！』って反論したのよ。」

「シャル先生。エリキヤロは？」

「寝かせて、ロングアーチのみんなに渡してきたわ。ココじゃ危なすぎるし。」

「で、八神部隊長が『レタスサンドにきまつとるやる。』って・・・」

「はやて・・・あれ！？はやてはどこ行った!？」

「はやてちゃんなら・・・あそこに。」

そう言つてシャル先生が指さしたのは、なのはの丁度真下。

見れば、そこには明らかに一戦を戦い抜いた後のように、バリアジアケットがぼろぼろになったはやてがうつぶせに転がっていた。

たまにぴくぴくと痙攣するあたり、生きては居るようだ。

・・・痙攣しちゃだめな気もするが、まあいいだろう。

「その会話を、通りかかったシグナムとヴィータちゃん、ザフィーラが聞いて、」

「それぞれに譲れないサンドイッチの具材があつたみたいで、口論になって・・・」

「訓練が終わつて、みんなでストレッチしてたんですけど、いきなりバトルが始まっちゃって・・・」

「キャラが混乱して、フリードが暴走して・・・」

「あとは、この通りです・・・」

「はあ・・・なにやってんだかな、あいつ等は・・・」

いやホントに。何やってんの？喧嘩をするなどは言わないが、TP  
O位弁えるよ・・・

そんな理由で俺の平穏が乱された？

・・・あ、駄目だ。抑えきれない。

「・・・ティアナ、スバル。」

「「は、はい！」」

「絶対にここから出るな。良いな？」

「「イエッサー！」」

「さて・・・蹂躪してやる・・・！」

~~~~~ここからは、音声のみでお楽しみください。~~~~~

「いい度胸だなフェイト！喰らえよ！神雷！神雷！も一つ神雷！」
「え！？きゃあああああああ・・・」

「お話するの！」

「ああそうだなあ！肉体言語でなあ！サンライトオオオオ
スターアアアア！！」
バ

「お話s いやあああああああ・・・」

「どうした神裂！やり合おうではないか！」

「神裂流拔刀居合しんれつりゅう
疾風刃来しつぷうじんらい」

キンツ

「神……」

ド
サ
ッ

「俺を名字で呼ぶなと」

「ギガントシューラーク！」

「サンライトバスター。」

ドオオオオオン・・・

「大振りすぎるんだよ……」

「でええええいあああああ！！！！！」

「神裂流アレンジ……真・七花八裂」

「うあああああああ！！」

「……峰打ちです。安心してください……」

「あ、うん、うん……」

「ロイヤルフレア」

「おゆー!」

「フリードマン」

~~~~~

「全員正座ア！」

「はい」





時事ネタ：エイプリルフール？頭冷やそうか？（後書き）

はっちゃけすぎた。

はい。反省してます。

べ、別に剣夜にたたきのめされたせいだとか、そんなんじゃない・・・

おや、こんな時間に誰だろ・・・  
q a w s e d f r t g h y j i u  
l p ! ! ! ! ! ! !

## 更新停止のお知らせ

…まあ、いきなり何を言い出すんだ、と言う形なんですが。

秋まで、更新を停止させて頂きます。

いや、メール執筆とかでちょこちょこ通学時間に書いていくつもりではいますが。

それでも、今よりかはペースが格段に落ちるかと思います。

理由は、と聞かれますと、自己中心的な理由なんですが。

部活と委員会に力を入れたいんです。

…僕は今、体育祭実行委員会なんですが、ぶっちゃけ。

新学期から鬼のように仕事が待ってるんです。

特に今年は審判長なんて役職についたもんですから、全プログラムのルールを固めないといけないんですよ。

まあ、結局何が言いたいのかと言えば、

「地震恨むぞ」と。

で、部活の方なんですが。

県大会の標準タイムが後少しで突破出来そうなんですよ。

ええ、県大会位で何を言い出すんだ、と思うかと思います。

本人は至って真剣そのものですが。

来年になると、高校になるので標準タイムがまた大幅に遠ざかるんですよねえ…

まあ、それは置いておいて。

そんなこんなで、秋になりましたら、というか9月に入りましたら、本格的にまた再開出来ると思いますので。

どうか、見捨てないで、お気に入りリストの片隅にでも置いといて下さい。

それでは。

## A p r i l f o o l

.....。

…騙された人、居ますかねえ？

はい。

時事ネタです。

四月バカですよ。

エイプリルがフルですね。

更新停止はしません。

多分。恐らく。メイビー。

あ、部活と委員会の下りは本当にある話です。

まあ、標準タイムって言っても、後コンマ五秒を縮めるのがどれだけ大変か…

W h i t e   S e a l さん、ガチでしたか？

ネタにのってくれましたか？

ガチでマジだったならごめんなさい。

こんなバカの土下座でよければ、いくらでもやりますのでご勘弁を。

さて、来週中にはサウンドステージを終わらせたいなあ…

あ、でも伏線も張らないとなあ…。

まあそんなこんなでこれからもやって行きますので、よろしくお願いします。  
いします。

## A p r i l f o o l (後書き)

あえて何も語らないでおきます。

二十二話：大食いは罪だよ…（前書き）

あるえ？

一週間で投稿するつもりだったのに、なんでこんなに掛かったし

解せぬ

## 二十二話：大食いは罪だよ…

ここには、なにかがあった。

普通に生活しているぶんには、まず出会わないであろう状況があった。

そういう職業に就いて居る人なら別だが、ただの一般人・・・たとえば、魔法が使えたとしても、こんな状況に出くわす事は稀まれだろう。

世界には、未だにココと同じような状況に置かれた国が沢山あると言っ。

規模こそ違い、確かにココは

『戦場』

だった。

「はい、ティアナ！回鍋肉できあがりだ！どこへなりとも持ってけ！」



「ありがとうございます！」

「剣夜く？ここに麻婆豆腐できる？」

「了解だ！エリキャロだろう！？辛さ控えめで良いな！」

「大丈夫！」

「はい麻婆お待ち！」

『早っ！』

「次は誰だ！」

有り体に言ってしまうえば、嫌な予感が的中した。

最初、みんなでワイワイバーベキューをしていた頃はよかったんだ。

それを、美由紀さんが「スバルとエリオって、どれくらい食べられるの？遠慮しないでいいよ？」と爆弾を持ち込み、

エイミイさんが「じゃあ大食い大会でも開こうか！」等とあおつたのが運の尽き。

当然、事情を知っている上で良識がある大人陣（なのは、フェイト、シャル先生、ザフィーラ、シグナム姐さん、ヴィータ、ついでに俺。）は止めたさ。

だけど、イイ笑顔をしたお姉ちゃん二人組に詰め寄られ、「いくら

食べても太らない薬――（一食限定）」を出させられたのがいけなかった。

食べても太らないなら、と今まで反対していた者達（女性陣）が軒並み反逆。

俺とザフィーラだけでは抵抗など無いに等しく、あっさりと敗北。

そうして、大食いコンテストが開かれたのだが・・・。

まず、スバルとエリオはいつも通り。

そこに負けず嫌いなヴィータと姐さんがヒートアップ。

その上、いつもは静かな面々までもが闘志を燃やし、全体的によくわからないテンションのまま大会が始まった。

俺は早々にギブアップ。するとはやてが「じゃあドベの剣夜は料理つくってな？」と鶴の一声。

それで冒頭に場面は戻る。

「ああ、くそっ！人手が圧倒的に足りない！せめてもう一人位俺が居れば・・・ん？待てよ？

その手があったか！！」

「剣夜さん？何を」



今まさに飛びかかろうとしたとき、全員の頭に順番にハリセンが振り下ろされた。めっちゃ痛え。

『何すんだはやて!』

「アホ! ココを焦土に変えたいんかい!」

『だが!』

「問答無用!」

『はい・・・すみませんでした・・・』

一斉に頭を下げる。正面から見たら、なかなかシユールな画になっていると思う。

「よし! 気を取り直して! 仕事を分配するぞ!」

『おう!』

その後、2時間ほど戦争は続き、人々は争いの無意味さを知った。

二十二話：大食いは罪だよ…（後書き）

あれだ、携帯が壊れたのがいけなかったんだきつとそうだそうなんだ

第二十三話：いやはや・・・（前書き）

あれ・・・？

自分でも何を書いてゐるのかわからない・・・

というか、

・・・いや、後書きで言います。

## 第二十三話：いやはや・・・

いやはや・・・。

大変な騒ぎだった・・・。

あの後、結局分身達は役に立たず、俺一人で全てをこなし続けた。

というか・・・！

分身！せめて野菜を切る位は手伝ってくれても良いんじゃないか！？

それに、俺が右往左往している横で**ぶんしん**等**ぶんしん**は唯食ってるだけだったし。

まあ、すぐに砲撃ぶち込んで消したから良いんだけどね。

で、今は俺が骨を砕くような努力の末にたどり着いたデザートの時間。

「ああ・・・しあわせ・・・」

「なのはちゃんかおがとろけとるで・・・」

「そついうはやてもだよ・・・」

で、あつちでは・・・

「ティアく・・・もう私このまま死んでもいいく。」

「へんなこといわないのー。ぶつわよー」

「スバルさん死んじやだめですよー？」

「きゃろー、もうひとくちちょうだい・・・」

エリオよ、何があつたし。えりおになつてゐるぞ？

「シグナム・・・ギガ・・・いや、テラ美味しいなこれ！」

「ああ・・・こんなものは食べたことがない。」

「ザフィーラも食べる？」

「・・・いや、甘いものは・・・」

「本当は？」

「・・・。。。いただくのか。」

流石はヴォルケンリッター。ふにやふにやになつてない。



というか、それ以外は全員骨抜き状態なんだが・・・大丈夫か、機動六課？

大丈夫だ、問題無い。

！？

なんだ！？どこからイーノックヴォイスが聞こえて来たぞ！？

気のせいだ、心配するな。

「何だ・・・気のせいだよ、驚かしやがって。」

済まない。

「別に？いいさ。ちょっとビックリしただけだからな。」

・・・ありがとう。

「礼を言われるような事では無いさ。」

「あの、剣夜？」

「ん？どうした、フェイト？」

「さつきから、誰と話してるの？誰も居ないように見えるんだけど……」

「ああ、イーノックとルシフェルだよ。まさか実際に話せるとは思わなかったわ」

「ああ……そう……」

「待て。なんであからさまに引いた顔をして後ずさる。と言うか、皆さんの『コイツとうとう頭逝っちゃったか……』みたいな視線が痛いんですけど。」

俺の周囲5メートルに人がいなくなった。さつきまでふやけてたチビ共まで逃げていったから相当なんだろう。

……待てよ？もしや、俺は六課ではいけない話をしてしまったのか？

クッ、なんと言ったことだ。おそらく、過去にイーノックさんとルシフェルさんと言う人が何かやらかしたかもしくは殉職したのだろう。それを俺は知らないままにいけしゃあしゃあと、軽々しくその名前を口にしたら引いていったんだろう。

そう、それはあたかも雖見沢で『オヤシロ様はいない』と声を張り上げて叫ぶようなものではないか。

これはまずい、まずすぎる。夕飯は美味しかったけど。

かくなる上は、精一杯の誠意を持って謝罪しよう。「剣夜？」そう

すればきつと、己の無知を恥じるだけで済むはずだ。

よし、どうやって謝ろうか。土下座ではインパクト・・・じゃない、誠意が足りないと取られるかも「けんやゝ、おーい、剣夜くゝん・・・駄目や、聞こえてへん」知れない。

よし、両手を前に出し、掌を上に向けよう。何かの本で、最大級の服従の証だと読んだことがある。

膝を折って、正座の体勢になり。両手を目の前の地面に置き、掌を上に向けて・・・よし。

後は口上だ。これが駄目駄目だと、罪が重くなる可能性がある。

「この度は…皆さんの気持ちも考えずに……取り返しの付かない事をしてしまい、本当に申し訳御座いませんでした……！」

簡潔に。最低限の言葉の中に最大級の謝罪の言葉を。

「せやなあ…剣夜？」

はやてが肩に手を置いてくる。

「はい…」

「だいじょうぶやからな？ 厨二病は治せるから。魔法が使える分、些かやりずらいとは思っけど、ゆっくり、治療していこうな…？」

顔を上げると、聖母のような顔をしたはやてが。

ああ…そういうことが……

「何だ……事件は、無かったのか……。俺アてつきり、六課の一大事だと思つて……！良かった……。本ツ当に、良かった……。……！」

「剣夜……」

「はやて……」

思わず、見つめ合う。その瞳には、全てが見透かされているような気がした。

「ウチの尊敬する、ヒルルクさんの名言を汚すなや……。……！」

「痛い痛い痛い痛い！肩が、肩が砕ける！」

「砕けてまえ、こんな肩……！ちょっと僧帽筋が鍛えられてるからつて、ちよつと背筋があるからつて、ちよつと胸筋が発達しているからつて……」

「筋肉をバカにするな……。……！」

「え、あ、うん、ごめん。」

パツと。何事も無かつたかのように手を離された。

「……………」

「……………」

「……………。なんか、ごめん。」

「……………うん、こっちも。」

何、この妙な空気。

「じ、じゃあ、みんなで先にお風呂、入っちゃおうか！」

「そ、そうだね！そうしようか！」

「あ、でも、ここお風呂ないのよねえ……………」

「じゃあスーパー銭湯に行こうか！あそこなら大丈夫だよ！」

「そうね！そうしましょうか！」

「じゃあみんな、準備して五分後にここに集合ね！」

『はい！』

ああ、すばらしきかな、チームワーク。

二人が行動不能でも、残りがキッチンとフォローしてくれる。

俺はなんていい仲間を持ったのだろうか。

「よし、風呂に行くぞ！」

「「「オーツ！」」」

「剣夜：厨二病疑惑が、晴れた訳じゃ無いんだけど……」

少し離れた場所で、一人涙をこぼすエースの中のエースがいたそう  
な。

第二十三話：いやはや・・・（後書き）

というか、なんで更新は続けますと言った矢先に（字はこれであつてよな？）長期間放置してるんだか・・・

ごめんなさい。これからはせめて一週間、もしくは十日に一度は更新できるようにしていきたいと思います。

第二十四話・湯煙の先には金色が（前書き）

今回は、そこまで遅れてない・・・と思いたい。

あ、中盤少しシリアル入ります。

で、その後ピンク入ります。

どちらも苦手な人はご注意を。



## 第二十四話：湯煙の先には金色が

本にしたら文庫本一冊は埋まるのではないか、と言うような紆余曲折があつたものの、何とか到着した銭湯。

これまでのいきさつを鑑みれば、むしろ戦闘と言っても過言では無いだろう。

え？何があつたかつて？

ふふ、一つだけ言うとすれば、だ。

エクセリオンモードのレイジングハートって、あんな使い方も出来たんだね・・・

「はい。いらっしやいませ。海鳴スパクアへようこ 団  
体様ですかあ？」

「えつとお……大人13人、子供4人です」

「エリオと、キャロと……」

「わたしとアルフですっ」

「あの、ヴィータ副隊長は……」

「あたしは大人だ」

とりあえず、受付をはやてに任せ、俺たちは奥へ進む。

「あ、男女別々なんですね。よかった・・・」

なんかエリオが酷く安心しきった顔をしているんだが、どうしようか？

- ・ 放置する
- ・ 無視する
- ・ 優しくスルーしてあげる

酷くね！？

・・・まあいい。気を取り直して、もう一度。

- ・ スルー
- ・ 声をかける
- ・ 優しく背中を押す

これだろう。

「エリオ、どうせだからみんなと一緒に入ってこい。その方が良いだろう？」

「い、いいいや、あああんですね。それはやっぱり、スバルさん

とか隊長達とか、アリサさん達もいますしっ！」

「嘘こけ。」

「ホントですってばあ！」

「いやいや・・・なあ、フエイト？」

「そうだよ。エリオと一緒に風呂は、久しぶりだし……。入りたいなあ」

エリオ、絶対絶命、万事休す。ついでに四面楚歌。

「う…うあ……………うわああああああ！！」

Uターン。後、全力疾走。

エリオはにげだした！

「ははははははは！見たか、あれ！顔真っ赤だったぞ！」

「そこまで恥ずかしがる事無いと思うけどなあ……」

「じゃあ剣夜、エリオのこと、よろしくね？」

「りょーかい。んじやな」

というわけで、俺も男湯に……

「あゝ、剣夜さん。」

いけなかった。

「どうした、キャロ？」

「えっと、・・・だったら、わたしも・・・行けますよね？」

「ああ、そゆことか。ああ。・・・すれば、お前も・・・出来るぞ？」

「ありがとうございます！」

俺が教えてやると、ぱつと笑顔になって、大人陣の所に駆けていった。

さて、エリオ。ここらが年貢の納め時かも知れんぞ・・・？

「で、ココにこのコインを入れて、だな。」

「あ、そうやって鍵をかけるんですか・・・」

銭湯に来たことが無いらしいエリオに、ロッカーの使い方を教えてやる。

流石、と言ったところなのか、すぐに理解出来たようだ。

「よし。じゃあ行こうか・・・エリオ、何故俺の腰から下を凝視し

ている」

「え！？い、いや・・・なんか、入れ墨みたいなものがあつたので・・・ホントですよ！？」

あー・・・。

やべえ、存在を忘れてた。

最近発作も無いから、つい人前で服を脱いじまった。

「・・・なあエリオ。背中に入れ墨は、どこまで彫つてある？」

「あ、やっぱり入れ墨だったんですか？えっと、大体肩胛骨けんきつこつの下ぐらい、ですよ？」

「・・・もうそんなに上がつて来たか。」

「え？」

「ああ、なんでもないさ。さ、風呂行くぞ？」

「あ、はい！」

「はい。どうぞ」

「ありがとうございます」

「え？」

バツ！と、勢いよくエリオが振り返る。

俺はもう知っていたから何も言わないが・・・

俺達の視界に映ったのは、女湯の番台をやっているらしいおばさんと、ちよつと長めのタオルに身を包んだキャロの姿だった。

「あ、エリオ君、剣夜さん！」

そのままこつちに駆けてくる。

「ええっ！？」

「やっぱり、剣夜さんの言った通りでした！」

「だろう？」

「はいっ！」

「キャ、キャキャキャキャロっ、キャロ！？」

「落ち着け。」

ゴン！

「！？・・・え？なんでこつちに！？」

脳天に落とされた拳のダメージをもともせず、未だに混乱している様子のエリオ。

これはこれでおもしろいので、放置して浴槽に向かう。

背後からは、エリオのうわずった声が、絶え間なく聞こえて来ていた。

「ふう……」

ちょっとしたアクシデントはあった（シャワーが水だったが、とりあえず二人の身体を洗い終えたので子供用の露天風呂に放り込んできた。

で、今は一人で大人用の方のかい露天風呂に浸かっている。

こうして一人で居ると、嫌でも考え事が浮かんで来る。

エリオには入れ墨と説明した、下半身の奇妙な紋様。

ユーノ司書長によれば、黒龍病……もしくは、魔力浸食型ステイツパーソン症候群。略称MISPS。

全身を循環する魔力により病気が進行していき、最終的には全身が動かなくなる病気……だそうだ。

治療法は今のところ無し。病状が似ている、というだけで、実際にはSPSではないが、便宜上そう名付けられている。

三年前、あの忌々しい事件が起こる少し前にうっかり触ったロスト

ロギアによってかけられた呪い。

大きく魔力を使うたびに浸食されていき、今では下半身どころか背中まで来ているらしい。

黒い蛇が巻き付くような紋様が全身に浮き出るため、黒龍病と呼ばれる。

具体的には、ディバインバスター五発で一日に使える魔力とほぼ同じなんだそうだ。

なら身体強化だけなら、と思ったら、思っただけより危険だった。

強化の最中には全身を魔力が巡るため、より症状の進行を進める形になってしまった。

・・・まあ、ガンダムを創ったのもそのせいなんだけどな。

GMドライブなら、起動時以外魔力を使わなくて済む。

ま、そもその戦闘自体そこまでしないだろうから、大丈夫だろう。

「・・・ふっ」

長いこと風呂に浸かっていたからだろうか、少しのぼせてきた。

・・・さて、そろそろあがるか。



というか、黒龍病…ね。

名前だけなら、それなんて厨二病？って感じたが、実際の症状は笑えないからタチが悪い。

ただ麻痺するだけならいくらでも動かす方法はあるが、筋肉が固まっちゃったら動くものも動かない。

しかも今発作が起こる可能性があるのが下半身全体と来たんだからしまつが悪い。

・・・まあ、あれこれ考えても仕方ない。上がろう。

ガラッ

「・・・え？」

「・・・え？」

さて、ここで一つ、銭湯のマナーを確認しておこう。

浴槽内にタオルを入れてはいけない。

つまり、これが何を意味しているのか。

今、マイサンは全力全開で解放状態である。

だが、いつもなら問題無い。

男湯だから。

なら、目の前にある光景は何？

「・・・ここは男湯の筈だぞ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！キヤ                      モゴッ！」

多分、今この瞬間だけ、俺は光速を超えたと思う。

現状を理解して、悲鳴をあげようとしたのはに一瞬で接近。

右手で口を押さえ、左手で腰を支えて倒れないように。

「・・・とりあえず、悲鳴は上げないでもらえると助かる。」

「                      ！！（コクコク）」

真っ赤な顔で何回も頷いたため、とりあえず右手は離す。

「・・・・・・・・・・えーっと、」

「うつ・・・・」

「・・・こ、ここって混浴だったのか？」

「そう・・・・みたい、だね・・・」

「!」

慌てて目をそらす。密着状態で上目づかいは鬼畜すぎる。

「・・・剣夜？」

「なんでもない!なんでもないぞ!」

「なんでもないなら、その・・・こっち向いて?」

「・・・はい。」

あゝ、肌すべすべだな・・・じゃなくて!

意外と、着痩せするのね・・・でもなくて!

「えっと・・・」

「にはは・・・」

露天風呂で二人、どうすれば良いのかわからずに硬直。

誰か・・・!この際スカリエッティでもあの型月厨でもいいからこの状況を何とかしてくれ・・・!

ガラッ

「!」

助けキターーーー!よし、これで勝つ・・・

「ふ、二人とも・・・何、してるの・・・？」

バカな・・・！フェイト、だと・・・？

「いや、これはだな・・・」

「どう見ても、剣夜がなのはを襲っているようにしか思えないんだけど・・・？」

デスヨネー。

「フォトンランサー。」

《Yes》

「なんでバルディッシュが桶の中にはいつてるんだよ！」

「こういう時、力が無くて・・・悔しい思いをしなくて良いようにだよ！」

良いセリフなのに感動しないのはきっと、俺の寿命が秒読みに入ってるからであろう。

「シュート！」

凄え、正確に脳天を撃ち抜きやがった・・・

「なのは！大丈夫だった!？」

「う、うん、大丈夫だよ?」

「良かった・・・」

そう言つて胸に手を当ててホッと息を吐くフェイトちゃん。

うん、心配してくれるのは嬉しいんだけど、一つ、凄くめんどくさい問題を作っちゃったんだよね・・・

「・・・ねえ、フェイトちゃん。」

「?どうしたの、なのは?」

「気絶した剣夜・・・どうしよう?」

「・・・あ。」

## 第二十四話：湯煙の先には金色が（後書き）

すぺしゃるさんくす！

・後半のネタ提供 空牙刹那さん。

ピンクの光にも負けず、情報を提供してくれた勇者です。

おそらく、スターライトなブレイカーの餌食になったのではないかと。

さて、文中に出てきた病名ですが、あくまでも症例が似ている、と言うことです。

まあ、ここぞ！と言うときに腕が動かないー、程度の解釈で結構です。

というか、wiki片手の私に多くを期待しないでください。

実際の患者さんがいらっしやいましたらごめんなさい。

そして後半エ・・・。

はき出した砂糖を返せ。

コーヒーが砂糖水になったじゃないか。

## 第二十五話：厨二病は治りません

やあ、また会ったね。

誰だよ、お前。

僕かい？説明してあげても良いけど、きっと理解出来ないと思うな。

じゃあいい。

そうしておいた方が賢明だね。

てか、ここは・・・ああ、また此処か。

下・・・なのかわからないが、とりあえず下を見れば、いつぞやの光る河。

なあ・・・

ん？

ここって、もう根源でよくね？てか、そうだろ？

根源・・・とは、少し違うんだけどね。まあ、大体同じようなものだよ。で？

で？って・・・なんで俺が根源に居るんだよ。



入れ墨。進んで来てるみたいだね？

・・・何が言いたい。

いや？君にはまだ早い。また・・・今度は、寝る場所が無くなった時に来なよ。そのときは、全てを教えてあげるから。

・・・？

そろそろ、目を覚ました方が良くないかな？

どーやって起きれば？

意識を上を持っていけばいいさ。ちょっと苦しいけどね。

ふむ・・・こう、か・・・っ！

ぐいっと、引っ張られるような感覚の後、頭が割れそうに痛んできた。

・・・嘘つき。何が“ちょっと痛い”だよ・・・。

「ん・・・」

目覚める。

「知らない天井だ……。いや、」

「知らない天井だ。

らない天井だ。

ない天井だ。

い天井だ。」

一人エコー。むなしい。

起きる。

そのときに、身体にかけられていた毛布が床に落ちた。

どうやら、俺はソファーに寝ていたらしい。

「んー……。えっと、銭湯に行つて、露天風呂に入つて……」

駄目だ。そこから先の記憶がない。

「ここは……。コテージか。おおかた、のぼせでもしたんだろう。」

で、此処まで運ばれて寝かされていた、と。

イージス、だいたいあつてるか？

《大体は、ですが。概ねそれでよろしいかと》

《知らぬが仏、とも言いますしね》

アルテミス、何が言いたい。

《いえ、別に何も？》

「まあいいや。・・・で？今の状況は？」

さつきから、空と少し離れた地上から魔力反応がある。ロストログ  
アが暴走してたら大変だ。

《ついさつき、搜索中のロストログアがヒット。いまはみんなで釣  
りにいってまゝす》

「先陣は・・・フォワードか？」

《はい》

「んゝ・・・。一応、様子、見に行くか。」

《上ですか？下ですか？》

「どっちもだ。」

と言っわけで海鳴上空。

「レストレーション」

《レステレーション。鋼糸展開》

「索敵開始。見つけ次第狩れ」

《Hound Dog Killing mode》

「なあ、イージスよ・・・」

《何か？》

「魔法発動の時だけ英語になるの、やめない？」

《だが断ります》

「・・・。。（イラッ）」

「何か・・・冒険の序盤で出てきそうなデザインだな、オイ。」

《掛け合わせていったらキングが出来ませんかねえ？》

「流石に無理だろう。てか、アレじゃ物理攻撃効かないんじゃない？」

《その可能性は大いにあり得ますね》

「コアだけ鋼糸で貫くか・・・面倒くせー」

《まあそう言わずに》

「はあ・・・」

しかたない、覚悟（厨二をさらす）を決めよう。

「吾は面影糸を巣と張る蜘蛛。                      ようこそ、この素晴らしき惨殺空間へ。」

繰弦曲・貫破                      「

今作成、今命名。後悔はしている。

『こちらロングアーチ！緊急の報告です！』

「どうしたん？」

突然の報告。それは、つまりイレギュラーが起きたと言っ事。

それがわかっているからこそ、上空でフォワード陣を見守っていた隊長陣は身体をこわばらせた。

『ダミーの数が、ものすごい勢いで減って行っているんです・・・

何かの兆候かも知れません』

「ダミーが・・・？」

「ふむ、シャーリー。そこまで慌てることは無いだろう。」

「そーそー。多分、あいつが起きてきたんだろ。」

『あいつ・・・ですか？』

「うん、多分ね。でも、そんなことが出来るのは一人しかいないから。」

「メテオ分隊隊長・・・神裂剣夜にしか、ね。」

『え？剣夜さんですか？でも、なんでこんな広範囲に・・・』

「鋼糸、だろうよ。」

『あー・・・すみません。報告遅れました、神裂です。ダミーの掃討、終了しました。』

「おつかれ、と言いたい所やけど・・・報告不備の報告書、帰ったらきつちり50枚、書いて貰うで？」

『うへえ・・・』

「返事は？」

『・・・イエス、マム。』

「よろしい。．．．なのはちゃんとフェイトちゃん、なんでそんな真っ赤なん？」

「え、それはその……」

「えつと・・・」

「ああ、着替えさせたつちゅー事は、当然あーんなどこやこーんなところを見て」

「わーっ！わーっ！！」

「どうかしたか？」

「何でもないで？」

「ならいいんだが・・・」

「さあ、きかせてもらおか？どんな感じやったんや？部隊長命令や、洗いざらいしゃべってもらおか！」

「いやああああ!!！」

「自業自得、か。ヴィータ、私は今、この言葉の意味がよくわかるよ。」

「あたしもだ、シグナム。」



第二十五話・厨二病は治りません（後書き）

うーん・・・なんか考えがまとまらない・・・。

伏線にすらなっていないですね、ごめんなさい。

・・・なんか、後書きで謝ってばかりな気がする。

気のせいかな。

さて、あたしや今から海外に高飛びするので、つぎの投稿は早くても来週です。

それでは

第二十六話：スベツナズ・・・響きがいいわ。いや、それだけなんだけどね？

・・・はい、遅くなってごめんなさい。

軽く日常に入り・・・たかったなあ・・・（遠い目）



やあ、ただいま絶賛ダブルオー状態の剣夜君です。

なんか、今日一日このままで過ごさないとイケないらしい。

・・・鬱だ。

事の始まりは、出張任務から帰ってきた翌日のこと。

「じゃー、これでいったん解散にしようか。あ、隊長陣は残ってな  
？」

『お疲れ様でしたー！』

元氣よく返事をして、宿舎に帰っていくフォワード達。うんうん、  
元氣があつて大変よろしい。

俺たちは残れとのありがたあゝいお達しを部隊長様からいただいた  
ので、はやての周りにみんなが集まる。

「で？なんで残らせたんだ？早く帰って寝たいんだが。」

「あれあれ？剣夜くん？そんなこと言ってるいいんか？」

「？何が・・・」

「シグナム！」

「御意！」

《Schlangenform!》

「え、ちょ」

何か言う暇もなく、そのままシュランゲの刃に絡め取られる。

「さて、と・・・」

はやてが、背中あたりから何か、巻物のようなものを取り出した。

・・・いや、どこに隠してたし。

「総員、刮目せよ!」

バツ！

「第一回、」

「剣夜の処罰を、」

「どうしてくれよう会議――!!」

漫画なら確実に効果音がつきそうなアクションと共に、はやてが巻物を広げる。

それをすかさずなのはとフェイト、それにはやてが読み上げた。

・・・え？え？なに？なんなの？

「はい、誰か意見あるか？」

「はいはいはい！」

「おーヴィータ、凄い自信やな、ゆうてみい」

「まず、あたしがギガント、シグナムが紫電一閃でぶちかます。」

「ふむふむ、で？」

「それでな、」

えー。釣った魚は放置ツスか。

地面に転がされて（立ったままでさえいさせてくれなかった）、なにやら楽しそうに意見を交わす皆さん方。

できるなら議題が俺の安全に関わらないのであれば、是非とも参加したかったんだが・・・

どうやら、スライムもどきの時の遅刻はまだ許してもらえて居なかったみたいで。

その罰をみなさんで考えているようだ。

肝心要の俺に記憶が無いんだが・・・何があっただろう。

《ねえねえ、ご主人様？》

なんだ。俺は今、この全く仕事をしようとしないうちの自分の海馬に必死に仕事をさせようとしているのだが。

《極度の電撃を頭部に受けると、記憶って飛ぶことがあるらしいですよ？》

何が言いたい。

《いえ、別に？》

「よっしゃー！これでいいじゃん！」

「は、はやてちゃん・・・ホントにやるの？」

「そうだよ、いくら何でもこれはちょっと・・・」

「決定事項や！」

「うう・・・」

「・・・その、剣夜・・・どんまい。」

なんだ。俺は何をさせられるんだ。

「と、いうわけで・・・」

どういう訳なのか、小一時間ほど使って聞いたただしいのだが、それは認めてくれないだろう。

「明日一日、剣夜はダブルオー状態でミッドをパトロールすることになりました！」

・・・え？

「いやゝ、悩んだんよ。こっちで指定した衣装でゝにするか・・・」

「まあそんな訳だから、頑張ってくれ、神裂」

「はやてに迷惑かけんじゃねーぞ！」



・・・え？

で、だ。

翌日目が覚めてから必死に夢だと思い続ける 姐さんに捕まる イ  
ージスとアルテミスが悪ノリする 六課から放り出される イマココ

どないせーっちゅーねん・・・

とりあえず、いつの間にか手に持っていたタスキ（機動六課メテオ  
隊隊長・ただいまパトロール中、邪魔しないでね）を首から提げ  
る。

いや、これだけで身元を証明出来ないってことぐらいわかってるよ  
？でもさ、

気休めにはなる、と思いたい・・・

「あゝ！ロボットだゝ！」

「あらほんと。良くできてるわねえ。・・・本当によく出来てるわね、局の新兵器かしら」

「確かに凄いな。・・・ウチの会社で生産させてもらえないだろうか・・・」

「ねえお母さん、見てきて良い!？」

「いいわよ？気をつけなさいよ？」

「わかった！」

「・・・大丈夫かしら、誘拐犯が狙ってたりとかしらないかしら」

「大丈夫だろう、我が社のSPが警戒してる。そうそうそんな事態にはならないさ」

「だと良いんだけど・・・」

「ロボットさん！」

遠くから、いかにも良家の息子、といった感じの金髪ショタツ子が駆けてくる。

あ、ロボットって俺か。

「あ、こっち向いた！ わー、かつこいい・・・」

「どうしたんだ、少年？」

「しゃべった！？」

え、驚くのそこなの？

「そりゃあ中に人がいるんだ。しゃべらなきゃおかしかろうよ」

「え、ロボットさん人間だったの！？」

「え、なんだと思ってたの！？」

「ロボットさん！」

「えー・・・」

ねーよ・・・

とりあえず、目に付いた場所にベンチがあつたためそこに並んで座る。

シヨタとダブルオーガンダムが並んで座っている様子・・・シユールだな。

さつきから通行人の視線が痛い。

「で、君はなんて名前なんだ？」

「ん、僕？僕はルーク！ルーク・ガイアだよ！」

「そうか。俺は神裂剣夜。一応管理局員なんてもんやってたりする。」

にしてもガイアか。まさか、“あの”ガイア社じゃあ・・・ないよな？

「お兄ちゃん管理局員だったの！？」

「ああ。これでも執務官で一等空尉だぞ？」

「すごい・・・。あ、じゃあじゃあ、魔法とか使えるの？」

「ああ。・・・こんなんでどうよ？」

右手に炎、左手に氷塊。掌サイズで創り出してみる。

「すごい！わあ・・・」

「ほれ、氷は溶けないようにしてみた。これをやろう」

「わ、お星様の形だ・・・ありがとう、お兄ちゃん！」

「いやいや。ただの氷結魔法です。これぐらいで喜んでくれるならいくらでも創りますよ。」

「えへへ・・・」

まあ、そんなものでもこんな顔が見れるならいいか。

それにしても嬉しそうな顔である。

「ルーク？」

「あ、お母さんだ！」

見れば、遠くから手を振っているマダムの姿が。

「行ってこい。何かあったら機動六課に來い。いつでも歓迎してやるさ。」

くしゃりと、心持ち寂しそうなルークの頭をなでてやる。

「お兄ちゃん・・・うん！またね！」

「ああ、またな！」

笑顔に戻り、こちらに手を振りながら駆けていくルーク。

いやあ、いいリフレッシュになった。この後もパトロール頑張りますか。

キキッ！

「おら、こっちに来い！」

「わ、お兄ちゃ」

ボタン！

ブオオン！

え？

い  
ち  
い  
ち  
い  
ち  
い  
ち  
い  
ち  
い  
ち  
!

待て、落ち着け。冷静に現状を把握しよう。

黒い車が止まった。ルーク、中に引きずり込まれる。車、猛スピードで発進する。イマココっぽい。

ええええええええええ！？誘拐！？マジで！？

《主、追いかけましょう。今なら間に合います。》

こんな時でも冷静なイージスの声に、暴走気味だった思考が元に戻る。

そうだな、ごちゃごちゃ考えたって仕方ない。行動あるのみだ！

「上手くいきましたねアニキ！」

「ああ・・・こんなに上手く行くとは思わなかったぜ・・・」

「あのガイア社の息子、これは身代金が取れそうだずえ！」

「・・・・・・うむ」

所変わって車の中。そこでは、今やつと状況を理解しおびえているルークと、その両脇を固めるように座るいかにもな男が二人、どこから手に入れたのかアサルトライフルを携えていた。

前にはこれまたいかにもな黒スーツの男が二人。グラスンをかけて、

なんだか『スミス』とか『トンプソン』とか呼ばれて銃弾をかわしてデザートイーグルを持ってそうな・・・と言えばわかる人にはわかるはず。

まあ、つまり言ってしまうえば、ネオとかと戦ってそうな顔をしていた。

車内は一人、シヨタツ子を除いてみんなが浮かれていた。

無理もない、どうやらルークの会社は相当な大企業であるらしく、そこからとれる金は計り知れない。

四人は全員、25mプールを札束で埋めるヴィジョンがはっきりと頭に浮かんでいた。

・・・そう、ついこの瞬間までは。

飛んできたものが見えたのは一瞬であつたし、すぐに通過して行つたのだから、誰も気がつかなかった。

そう、常人ならば「頭上」を「何か蒼と白のモノ」が通過したからと言って、特に気にしないだろう。

・・・だから、次の瞬間に助手席に座っていた男・・・面倒だ、トンプソンがビームに撃ち抜かれたのも、当然と言ってしまえば当然だろう。



「初弾命中。このまま狙撃は・・・」

《続けない方が良いでしょうね》

「だよな、下手に撃って事故られても困る」

《ご主人様？降りてくるみたいですよ？》

「お、よっしゃ。ルークをさらったんだ、その恐怖・・・二千倍位にして返してやる・・・！」

今鏡を見れば、おそらく修羅が映るのであろう。

・・・まあいい。

え？何したかつて？

簡単簡単。飛んで追い抜いて、そのままGMソード？で撃ち抜いただけだよ。

慣れれば誰にでもできるさ。（出来ません）

《ッ！主！》

「へ？・・・うわっとおー！」

左に急加速。すると、すれすれをロケットが飛んでいくのが見えた。

「RPG・・・?」

《でしょうね。》

「おいおい、質量兵器持ちかよ・・・勘弁してくれよまったく。」

《警告、レーザーロックされています。おそらく、追尾式のミサイルかと。》

「そういうの、勘弁して欲しいんだが・・・」

ゆっくりと後ろを振り向く。

「!？」

すぐに戻す。

「・・・なあ、イージス。」

《なんでしょうか?》

「何か、武装トラックが三台・・・明らかにこっち狙ってるんですけど。」

《狙ってますね。》

「・・・どうする?」

《見敵必殺、が妥当かと》

「デスヨネー…… はあ…… いっちょ頑張りますか？」

《頑張りましょう！》

「アルテミス…… 元気だね。」

それからすぐに、対向車線からも車は居なくなり、俺と黒服さんたちは止まって向き合っていた。

…… いや無理だろこれ。

何か特殊部隊がおこちゃまに見えるレベルの戦力なんですけど。

あ、戦車出てきた。

ざっと150人…… +戦車&へり。

どないせーっちゅーねん。

第二十六話：スペツナズ・・・響きがいいわ。いや、それだけなんだけどね？

次回予告！

突如現れた黒服達。

鍵を握るのは少年、ルーク。

機械が生み出した世界から人間を救うため、剣夜改めネモが立ち上がる！

・・・とまあ、マトリックスネタはおいといて。

ちょっとしたアンケートのようなモノを取ります。

ISで虚刀流・・・見たくないですか？

あ、もちろん女性で。

一夏に対して絶対的な優勢ですよ。

お客さん・・・どうですか？

とがめちゃんみたいなおにゃのこ、ISに乗せませんか？

と言っわけです。

賛成か反対かだけでも良いので、お便りまってまーす！

次回 五方星、『剣夜無双』

次話も見ろのだぞ？

ちえりお！

・・・俺なにしてんだろ。

## 第二十七話：無双（前書き）

遅れました、申し訳ありません…

ここにそう書くことが当たり前になってきた自分が怖い今日この頃。

PS 文体を変えた上に書き方を変えて、なおかつ三人称オンリーです。

お気をつけを。



ダブルオーガンダム。

その機体を説明する上で、欠かすことの出来ない要素がある。  
ダブルオーには、その両肩にGMドライブと呼ばれる独自の駆動  
機関が搭載されている。

六課が結成される前から既にシャーリ、マリー、そして剣夜の間  
で推し進められていた計画。

それは、“自分の魔力を使わずに高い戦闘力を得る事”を最終目  
標としたプロジェクト。

そのテストパイロットとして剣夜が名乗り出たのは、自分が抱え  
ている問題　その頃にはもう、発作が始まっていた　のせいで  
もあったが、ゆくゆくは人手不足に喘いでいる地上部隊に、たとえ  
一機つつだとしても配備出来ないかと考えたからであった。

…まあ、そんな裏事情は良いのだが、一つ弱点がある。

それは。

搭載している武器が少ない、と言うことであった。



それだけの事が、と侮る無かれ。

管理局員が所持しているデバイスは、そのほとんどが一つか二つしか形状が設定されていない。

足りない分は、個人個人の魔法で補うことが十分可能だからだ。

だが、ダブルオーは違う。

右腕に装着されたGMソード3は、あくまでも剣と銃にしかならない。  
マウント

両腰のGMソード2も然り。

…つまり、何が言いたいのかと言うと。

手数が少ないのだ。

ダブルオーライザーという隠し球もあるにはあるが、その機能は目下開発中である。

そして、それが誰よりもわかっているからこそ。

神裂剣夜は、テンパリが最高潮に達していた。

(やべー……。)

剣夜は、他人からは見られることのないヘルメットの内部で、酷く冷たい汗が頬を伝うのを感じていた。

(どーすんだよこれ…皆さん目がマジなんですけど…)

ヘルメットの眼部モニターから送られてくる映像と、強化ガラスのスリットから見る肉眼の風景、そして右目の隅に投射されている解析データ。

その全てが、彼に一つの情報を伝えてきていた。

即ち、

(総敵数108……)

そう。三台の装甲トラックから降りてきたマフィア達は、いつの間にかそんな数にまで膨れあがっていたのだ。

因みに、黒服だったのは最初の5人だけで、その後に出てきた方々は全員、全身を鉄板をつなぎ合わせて作ったような　わかりやすく言ってしまうと、メタルギアP.W.の、バトルドレスのような格

好をしていた。

D 装備。明らかな防御力重視の服装の上、持っている得物は P K M や M G 3 と言った、所謂機関銃ばかり。

その銃口は、明らかにこちらを向いていた。

「やるしか、ないよなあ……」

そうつぶやく剣夜。その左手には、ライフルモードの G M ソード 2 が。右手には、折りたたまれていた大型剣を展開した G M ソード 3 が、それぞれ振るわれる時を待っていた。

《どう攻めます？》

《決まってるじゃない！突撃あるのみよ！》

《アルは何もしてないから気楽極まりないな……》

《何それ！？》

軽口をたたき合うデバイス達、それは剣夜の緊張をほぐすためなのだろう。それがわかっているから、剣夜も苦笑混じりにとがめる。

「お前達、気持ちを切り替える。こっちから仕掛ける。」

《《了解<sup>ヤ</sup>》》

デバイス達が返事をした直後、剣夜の姿が消えた。

一瞬のタイムラグの後、互いに背中を合わせて死角をなくそうとする誘拐犯達。

だが、その一瞬が命取りであった。

気がつけば、集団のど真ん中に剣夜の姿が。

剣夜は右手を横にぴんとのばし、その場で一回転。

右手の延長線上に伸びているGMソード3の刀身が、武装した男達を吹き飛ばす。

一回転したかと思えば、その回転した運動エネルギーをそのまま上への跳躍に利用し、5メートルほど飛び上がる。

その頃には、もう銃口は上空の剣夜に向けられていた。

男達の練度の高さがわかる一シーンであるが、このときばかりは運が悪かったとしか言いようがない。

男の内の一人が引き金を引こうとしたその時、その男の額を白銀に輝くビームが撃ち抜いた。

ドサツ…と、重いモノを地面に落としたような音がして、男達の

間に動揺が走る。

口をあんぐりと開け、徐々に落ちてくる蒼と白の金属の塊を見ていることしか出来ない。

携えた重火器も、トリガーを引かない限りは鉄の塊でしかない。

そして、その決定的な隙は致命的な被害の元となった。

次々に額を通り抜けていくビーム。だんだんと数を増やしていく、倒れた男達。

我に返った一人が、MG3の銃口を剣夜に向け、見えないナニカを振り払うかのように乱射する。

引き金を引かれたことで作動したボルトが前進し、二つのボルトが銃弾を固定、銃弾を発射する。

役目を終えた薬莢が排出され、同時にリンクが新しい銃弾をセツトする。

7・62mm NATO弾が、真っ直ぐに剣夜へと飛んでいく。

普通であれば、その破壊力を遺憾なく発揮するであろう鉛の塊はしかし、その軌跡を左右に逸らされた。

中心から真っ二つになった。結果を言ってしまうえばそれだけの事であるが、この一文にどれだけの重さがあることが。

振り抜いたGMソード3をそのままに、左のGMソード2を発砲

した男に向け、トリガーを引く。

白銀の光柱は、男の額の中心を正確に撃ち抜いた。

着地した剣夜は、そのまま一度一回転。十数人が吹き飛び、吹き飛んだ十数人に当たった男達がまた吹き飛ぶ。

人間将棋倒し。その表現が一番適切だろう。

最初に剣夜の姿が消えてから、ここまで僅か五秒。

その五秒で、108人いた男達は20人弱にまで姿を減らしていた。

まさに神速。

二十数名の残党は、皆一様に怯えた表情を顔に張り付け、抱えていた機関銃をたった一人の存在へ向けた。

ガガガガガガガッッ!!!

一斉に発砲し、その弾丸は全て一直線に剣夜へと迫る。

と、その右手が一瞬霞んだ。

次の瞬間、男達は自分の目を疑った。

発射し、その装甲と肉体を穿つ筈だった弾丸。その残骸が、剣夜の足下に山となっていたからだ。

当たりそうだったものを斬る。　まだ遠かったものは衝撃波で落とす。

それだけの事を、右手が霞んだ一瞬で行ったのだ。

「……………で？次は何だ？」

唯の問いかけ。その筈なのに、男達はまるで猛獣のうなり声でも聞いたかのように身体を硬直させる。

「あ……………ああ……………」

「無理だ……………」

「勝てるはずがない……………」

「化けモンだ……………」

言い出したのは、誰だったのか。

そんなことはもはや関係ない。一目散に後ろに逃げ出した男達には、一つのことしか考えられなかった。

即ち、『この絶対的強者からの、逃亡』。

「逃げるなよ……………もう少し遊んでこうぜ？」

だが、男達をあざ笑うかのように剣夜は逃走経路の先に現れる。

……………知らなかったのか？ダブルオーからは、逃げられない……………

立っている男が居なくなるまでに、そう時間はかからなかった。

「こちら機動六課所属、神裂剣夜執務官だ…説明しにくいけど、とりあえず質量兵器のオンパレードだ。至急、確保用の人員を回してくれ。以上。」

《了解。すぐに局員を派遣します。お疲れ様でした。》

ぶつと、通信が終わった後に剣夜は苦笑する。

「これから疲れるんだがな…」

剣夜が、おもむろに振り返る。

そこには、全身を銀色の装甲に覆われた、2メートルほどの人型が歩いてくる所だった。

「あんたが、この部隊の司令官か？」

『肯定する。私が指揮官だ』

スマートな銀色の鎧は、どこから出しているのかわからないような機械音声で声を発した。

必要最低限の場所を覆う装甲。見るからにスピードタイプだと



解る格好の人型は、腰に下げていた鞘の片方から、すらりと50センチメートルほどの刀を抜いた。

『貴様の戦いぶり、見させて貰った。』

「そうかい。　で？俺はお眼鏡にかなったのかね？」

『肯定する。　貴様は己とやり合うに相応しい相手だ。』

「そりゃどうも…っと！」

剣夜が、皮肉でしかない礼を言おうとした直後、不意に指揮官（仮称）が斬りかかってきた。

「いきなりは酷いんじゃないかい？」

剣夜も、後ろに飛びつつ右腕のソードを展開。着地と同時に斬りかかる。

ギャリイツ！

おおよそ剣と剣がぶつかりあった音としては相応しくない音が響く。

鏢迫り合いの体勢となった両者。お互いに生身の場所が全く見えないため、さながら映画やアニメのようだった。

「お、らあっ！」

『……………！』

そのまま、一度二度と切り結ぶ。そこで剣夜は違和感に気がついた。

（刃が…欠けてやる…！）

今さっき打ち合った場所の刀身が、欠けているのだ。まるでグラインダーにでもかけたかのように。

（まさか…あいつの武器は…！）

顔をあげて銀色を睨む。ヘルメットに阻まれて解らないが、剣夜には銀色が少し笑ったかのように感じられた。

『気がついたか。』

「ああ…お陰様でな…！」

『この刀の絡繰り、初見で気がついたのは貴様が初めてだ…』

「高周波ブレード…」

『肯定する。見事、と言っておこつ』

「舐めんなあ！」

今度斬りかかったのは剣夜から。上段から振り下ろしたGMソードは、頭上に掲げられた高周波ブレードと打ち合った。

『ぬうん！』

銀色がブレードを振ると、GMソードが半ばから断ち切られた。

『はははは！どうだ？自分の得物が真っ二つになった感想は』

斬！

「あんたが高周波ブレードなら…」

『ぐ…お…』

刹那。さっきまで誰が見ても優勢だった筈の銀色が、ぐらりと体勢を崩した。

「俺は、プラズマだ…！」

見れば、剣夜の左手には腰にマウントされていたビームサーベルが、振り切られた状態で握られていて。

銀色の装甲が、頭頂部から股下まで一直線に両断されていた。

「……どうだ？自分の装甲が真っ二つになった感想は…」

そして、立っている男は剣夜だけになった。

「この現場を引き継ぎに来ました、エリック・マロット三佐です。」

「ありがとうございます…神裂剣夜執務官、ついでに一等空尉です。」

互いに敬礼を交わし、簡単に事件報告を終わらせる。

エリック三佐は、40代中盤といった感じの、目が優しくうな…有り体に言ってしまうえば、おじさまだった。

「しかし、よくこれだけの数を一人で…しかも武装が強烈な相手を。私なら五分でミンチですよ。」

はっはっは、と笑う三佐に、剣夜は特に何のリアクションも返さない。

「流石、『赤い忍者』と言った所ですか？」

「その名前は捨てました…刀と一緒にね。」

「おや、これは失敬。…しかし、三年前の部隊壊滅事件…残念でしたね。」

「……………。…終わった事です。」

「…違う、と笑う三佐から離れ、一人で所々陥没している道路を歩く。」

「…そう。…終わった事を、何時までも引きずってちゃいけない…」

…わかってるはずなんだけどな…」

「隊長…。」

ミッドチルダ、西部。

空は、だんだんと暗くなっていた。

## 第二十七話：無双（後書き）

さて…。

文の書き方を変えてみたのはテストです。

出来れば、前の方が良かった！

こっちのが断然良いわ！

そこまで変わってねーじゃんか、バーカ

惚れたわ、抱いて！

などなど、思った事を正直に感想に書きちゃってください。

普段感想をあまり書かない方も、『前が良かった』『これからはずっとこんなんで』とかだけでも良いので、よろしく願います。

…え？MG3の説明がやけに詳しい？

ははは、ナンノコトヤラー

あ、三十万PV突破致しました。

これからもどうぞご贔屓に…（揉み手

では、今月今宵の五方星、これまでに御座います。

ちえりお！

第二十八話・招待状（前書き）

剣夜ドンマイ。それだけ。



## 第二十八話：招待状

機動六課、男性寮、その一室。

そこでは、一人の青年と言っても差し支えのない年齢と体格の男が頭を抱えていた。

結構広めの部屋だが、同居人の姿はない。

どうやら、一人でこの部屋を使っているらしい。

妬まし…羨ましい限りである。

「ん~~~~…………どーすつかねえ、これ…」

青年　剣夜の手には、高価そうな封筒に入れられた一枚の手紙。

「助けてくれたお礼って言われてもなあ…どうせ行かないだろうし…」

そう、この間一（と言っても一週間もたっていないが）の誘拐犯との愉快的闘争の果て、見事に少年を助け出した剣夜。

そのお礼として、少年の父親が今度開催するらしいオークションの招待状を渡されたのだ。

だが、剣夜にはその日、任務が入っている。

出張任務らしいのだが、未だにどこに行くのか等は教えられていない。

「…ま、とりあえず部隊長サマに相談してみますかね…」

そうして、剣夜はベッドから重い腰をあげ、部隊長室を目指すのだった。

「部隊長。今よろしいでしょうか？」

ええよゝとの、気の抜けた返事を聞いてから部屋に入る。

中では、六課の部隊長である八神はやてと、その融合騎、リインフォース？が湯飲み片手にくつろいでいた。

どうやら、丁度午後の休憩時間だったらしい。

「どしたん？こんな時間に。」

「まだ休憩時間ですよゝ？」

「ああ、いや…。これをどうすれば良いのか、判断を仰ぎたくてな」  
そう言いながら、懷から出した紙をはやてが座っているデスクへと投げる剣夜。

「何々…？」

その紙をのぞき込むはやてとリイン。が、どうもその様子がおか

しい。

だんだんと顔がにやけてき、終いには完全にからかうときの顔になっている。

「へえ…。…で、剣夜はこれをどうしたいん？」

「や、俺一人では判断が出来なくてな…部隊長の決定にゆだねよう  
と思つて。」

「そーかそーか…ホントに私が決めていいんやな？」

「ああ…どうした、そんなに念を押して…」

「これをどう判断せいと？」

ピラッ…

はやてが、手に持ってしげしげと眺めていた紙を裏返す。

そこには。

『恥ずかしがりながらもカメラ目線でポーズを決めるのはさん（  
巫女服）』が映っていた。

「これを見せてどないするつもりやったん？」

「馬鹿なああああああ！！！！？？？？」

『私、からかってます』と言った言葉が書いてありそうな、イイ笑顔でそう問いかけるはやて。

あわてて剣夜は自分の、執務官用の黒い制服の内ポケットを確認する。

確認した結果。

「反対のポケット…だと…？」

呟きながら、さつきとは反対のポケットに手をつ込む剣夜。

そこから、白い封筒を取り出すと、そのままorzの体勢へと移行する。

「嘘だ…嘘だろ……そうだ、これは夢だ、夢なんだ。そうだろう？  
だって、そうでもなければやての手に『なのはピクチャNo.1  
45があるはずがない。そうか！これは夢だ！てことは寝れば治る  
のか！もとい、夢から覚めるんだな！よし、そうと決まったら早速  
寝よう！これで起きるはずだ！よし！お休み！」

そのままぶつぶつとつぶやくと、そのままどこから布団を取り出し寝ようとする剣夜。

あきらかに正気では無い。まあ、自業自得だが。

「待たんかい」

スパーン！！

「まそつぶ！？」

だが、そうは問屋<sup>はやて</sup>がおろさない。剣夜の頭に、背中から取り出したハリセンをたたきつける。

蛙が潰れたような声を出し、堅い部隊長室の床に沈む剣夜。

剣夜の悲鳴が、某ソードマスターの名言のようにも聞こえるが、気にしたら負けである。

「ほら、布団しまつて…てか、どこから出てきたん、この布団…」

はやてが剣夜を助け起こす。絵面だけ見れば美しい光景だが、実際の関係は加害者<sup>つこみ</sup>と被害者（自業自得）である。

…大変遺憾である。

「…で？オークションに招待されて、行くかどうか迷ってる…って事でいいんやな？」

「…ええ、大体あってます。」

気を取り直して、部隊長室。

そこでは、さっきと同じようにはやてが紙を眺めていた。

…因みに、写真は無事に剣夜の懐へと戻った。

「…ふうん…。…ま、ちょうどええんかな…」

「ですね」

「うん？ちょうどいい？」

なにやらラインと相談しているはやて。どうやら、仕事モードらしく、顔は既に真剣である。

「いや、ほんと丁度良かったわ」。

「ですす！」

こんどは二人でうんうんと頷き合う。だが、当然剣夜には何が何だか解らない。

「いや、二人して何の話を…」

「よし！神裂隊長！」

「はっ！」

疑問を晴らそうと問いかけようとした直後、はやてから名前を呼ばれて直立状態になる剣夜。

「オークション、行っていていいで。」

「…え？」

「いや、丁度そのオークションの警備を六課が担当する事になってな？」

「丁度良いから、一般客に紛れて警備して貰おう！って訳なのですよ」

「はあ…」

いきなりとん拍子で決まって行く事に対して、剣夜は生返事しか出来ない。

「よし、決定！当日剣夜は一般客の警備！反論は受け付けない！ええな！」

「りよ、了解！」

とりあえず、敬礼を返しつつ。

なんだかめんどくさい事になりそうだ、と思う剣夜なのだった。

## 第二十八話：招待状（後書き）

はい、と言うわけで二十八話でした。

どうだい？あの誘拐事件…伊達に二話も使った訳じゃ無いんだよ？

と私は胸を張ってみます。

…まあ、見え見えでしょうけど。

いいもんいいもん！アグスタでは伏線張りまくるもん！

……おえつ。



第二十九話：口は災いの元、特に女性関係の（前書き）

大変遅くなりました。

その割には出来がいまいち…

精進します。

## 第二十九話：口は災いの元、特に女性関係の

「んー…」

ホテルアグスタ。クラナガン南東にあるそのホテルは、『ちよつと頑張れば泊まれるかもしれない高級ホテル』として有名なホテルだ。その廊下、照明が少し抑えられたおかげで何処か薄暗いそこを、スーツ姿の男性が一人で歩いていて。

「やっぱきついな…もう少し人数が居ないもんかねえ…」

赤い髪をしたその男性は、なにやらモニターを見ながらつぶやいている。

「ま、鋼糸張つといたし、一応の対処は出来るはずだが…」

見れば、垂らされた男の右手からは、きらきらと光る糸のようなモノが伸びている。

《よほどの事がない限り、主が動くことも無いでしょう》

《そーそー。気い張りすぎですよー？リラックスリラックス》

「その“よほどの事”が無ければ良いんだがな…」

《…それ、フラグのつもりですか？》

「まさか。機械ダンゴムシが来なければいいな、程度の願望さ。特

に意味はない」

《だといいんですけどね》

「だな」

「ああ、剣夜…やっと会えたよ。どうだい？調子は」

廊下の角から歩いてきた二人の男性。

そのうち、茶髪の男の方が赤髪の男…剣夜に声をかけた。

「ユーノさん、アコース査察官も。お久しぶりですね」

「ユーノでいいって、言ってるのに。…安心したよ、元気そうだね、よかった」

「やあ、剣夜君。相変わらずなようで安心したよ」

「ええ、お陰様で。大分カツカツですけどね。…で、“アレ”は？」

「出来上がっているよ。…とりあえず、二十本。」

茶髪の男性…ユーノは、懐から小さな箱を取り出し、それを剣夜に手渡す。

「ありがとう…これでまた、ある程度は戦える」

「あくまでも、これは応急処置。リミットを超えれば症状は悪化していく。…わかってると思うけど」

「ええ。わかってますよ、自分の事ですから」

「…それは？」

これまで一言も話さなかった男性、アコースと呼ばれた青年が二人に問いかける。

「これは…そうですね。風邪薬、みたいなものですよ」

「はあ…？」

ユーノが答えるが、その抽象的な言い方に困惑しているようだった。

《主。そろそろ…》

「わかった。…ではお二人とも、失礼します」

「ええ。…気をつけて」

「また、すぐに会いたいね」

「…そのうち、会える気がします。では」

「バルディツシュ、開催まで、あとどれくらい？」

《三時間と二十七分です》

「ありがとう」

フェイトがさつきまで剣夜達が話していた所を通り過ぎる。

ただ、十年來の友人には気がつかなかったようで、そのまま進んで  
いつてしまった。

所変わって、廊下の先にある、ラウンジのような所に剣夜はいた。  
…ソファに座りながら。

「で、後一時間なんだが…」

《正確には五十九分と三十二秒ですね》

「…暇だ」

《…警備を暇だという人程、信用できない人はいませんね》

「そうは言っても、暇なモノはな〜……………ん？」

《どうしました？》

「念話だ。これは…スバルとティアナか」

『　　そろえば、無敵の　　』

『　レアスキル持ち　　みんな　　』

《また盗聴ですか？》

「人聞きの悪い事言っな。『見える』ものはしょうがないだろう」

「（ティアナの方、文章じゃよくわからないが…影があつたな。大丈夫か…？）」

ちよつと考え込む剣夜。

文面からではあまり伝わってこないが、いつものティアナでは無いような気がしたからだ。

予想や想像、と言うより、もっと直感的な部分で剣夜はそれを感じ取っていた。

「（ま、大丈夫か。なんだかんだ言いつつ芯はしっかりしてんだ。心配するほどの事じゃ無いだろう）

…んじゃ、俺等もホールに入るか。」

《念のため、ですか？》

「んにゃ、暇つぶし兼パトロール」

ホールの中、既に一般客が入り始めているその二階部分。そこで

は、ドレスを着たのはとはやての姿があった。

「流石に中の警備は厳重、か…」

「一般的なトラブルには、十分に対処出来るだろうね」

「外は六課の子達が固めてるし、入り口には防災用のシャッターもある。ガジェットが此処まで入ってくる事は、無さそうやしな」

「油断は出来ないけどね」

「ま、一般の警備会社も雇ってるし、私たちがでるような事態には、ならないと思うけど」

「そうだね。…だから、ちょっとだけ暇なだけだね」

「やっと会えた…」

「せやね…ってうお！剣夜！どっから出てきた！」

不意に、はやての後ろの扉が開き、そこから剣夜が出てくる。

扉の至近距離に居たはやては、いきなり背後からかった声にビツクリして振り向く。

そこには、今にも死にそうな表情をした剣夜が立っていた。

「どうしたの？その顔…」

「…暇で、死ぬかと思った」

「「あゝ…」」

「剣夜が現地入りしたのって、三時間前やったっけ。そりゃ暇にもなるわ…」

「脳内で、セルフテトリスやってた」

「さ、災難だったね…」

なのはもはやても、少し顔が引きつっている。  
…セルフテトリスをやってた、と言われれば、誰でもこんな顔を  
するかも知れないが。

「つか、その格好…」

剣夜が、二人の服に視線を移す。

「ん？どっかおかしいかな？」

当然、二人の話題もそれに移っていく。

「いや、なに。ドレスを着るなんて聞いてなかったからな。…ふむ」

「どう？似合ってる？」

ちよつと全身を見せるような仕草をするのは。  
当然、その目は「似合っている」と言われる事を期待している。

「ああ。二人ともよく似合っている。綺麗だぞ？」

「「ふえ？」」



「ん？聞こえなかったか？綺麗だぞ、二人とも。まさかここまで似合うとは思わなかった。」

「へえ…」

「ふん…」

「ん？どうした？二人して、女の敵を見るような目で見て」

「多分、全員にそう言ってるんだろうね…」

「せやな…このフラグメイカーが！」

「え？え？」

「さ、なのはちゃん。警備に戻るか、こんな女たらしはほっといて」

「

「そうだね。行こう？」

「え？おい、ちょ…」

そのまま、後ろの扉から出て行ってしまった二人。  
剣夜は一人、取り残される形で二階に立っている。

「…俺、何かまずい事言っただ？」

《…まず、女心を学びましょうか》

第二十九話：口は災いの元、特に女性関係の（後書き）

遅れてすいませんでした。

次からは…と言っても、また遅くなりそうで怖いのですが。

作中の、アグスタのランクは創作です。

内装を見る限り、リッツカールトンなんかよりは一ランク落ちるかな、と思ひまして。はい。

では、次こそは早めに。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6410o/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～五芒星から見る物語～

2011年9月23日06時52分発行